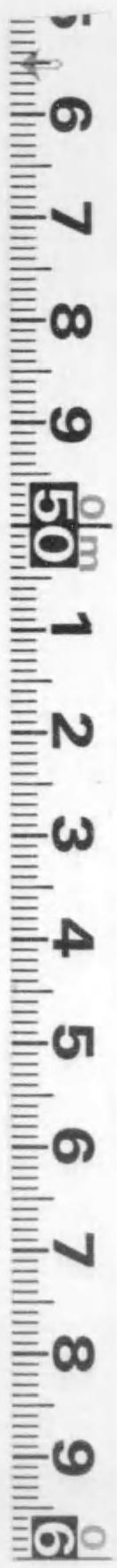


318

410



始





陸軍戸山學校編纂

劍術用具ノ研究

東京

軍需商會



正誤表

頁	二四	三	三	三	四〇	四七	四七	四八	五三	五七	六〇	七七
行	三	四	一〇	一〇	一〇	四	一〇	六	終行	七	七	一
誤	第三縱	述ヘシ	ナラヌ	存保	廻臂ノ	綴紐	形チ	尤モ	經	スルニ	(3)ノ一	
正	第三横	述ヘン	ナラス	保存	臂廻ノ	五、綴紐	形	最モ	徑	スルニ	(3)ノ二	
頁	七七	七九	八二	八八	八八	九三	〇〇	〇〇	〇〇	一〇	一四	
行	三	一	六	一	一	三	三	三	八	六、 十、		
誤	3ノニ	難	腐融	帶フニ	免カレ	推	暴	蔭干	尖ル	蔭干		
正	消ル	雖	腐蝕	帶フルニ	免レ	堆	曝	蔭乾	灸ル	蔭乾		



3/8-4/0

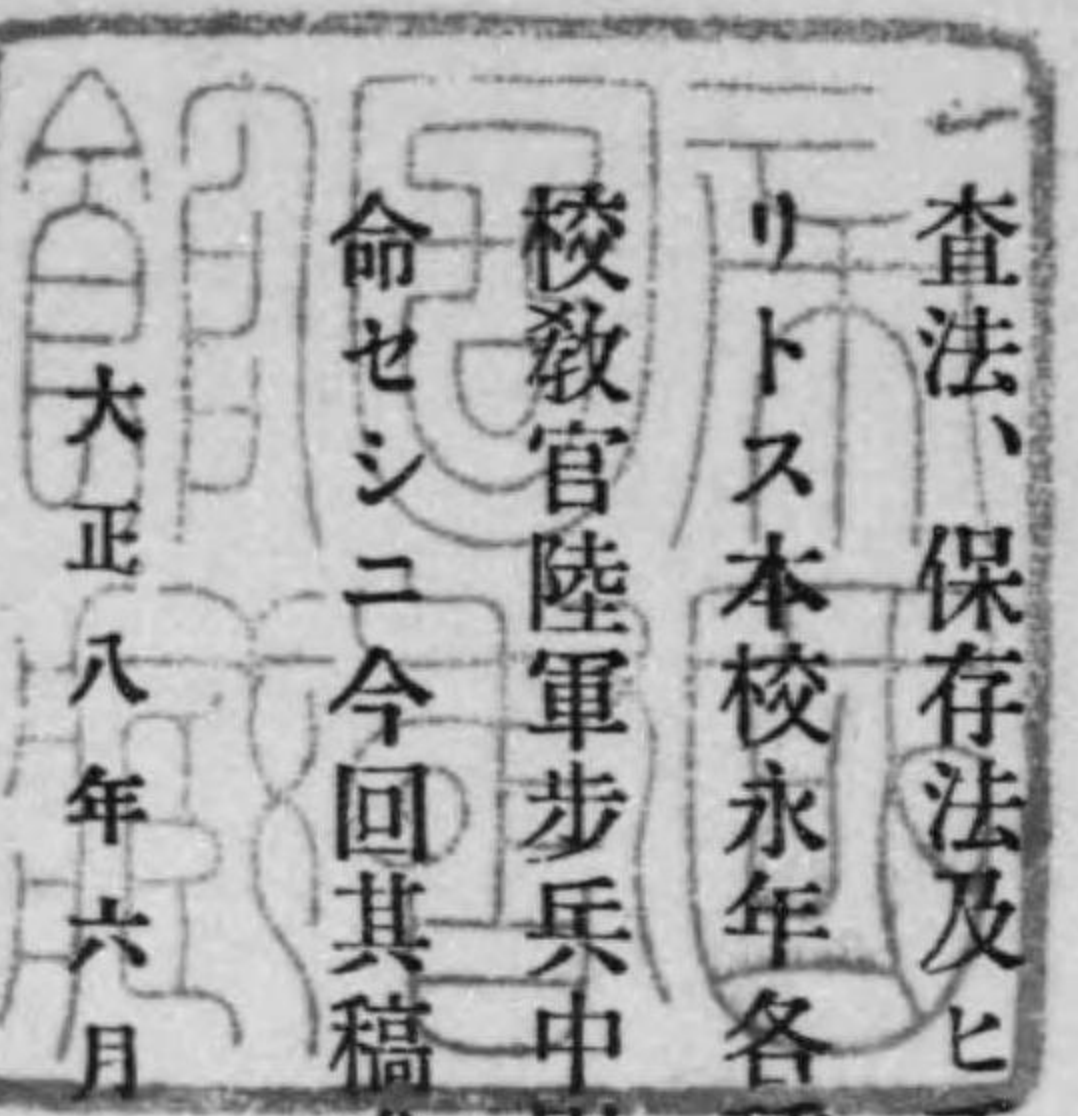
序

現時漸ク劍術ノ隆盛ナラントスル秋ニ當リ之レカ用具ノ構造、檢

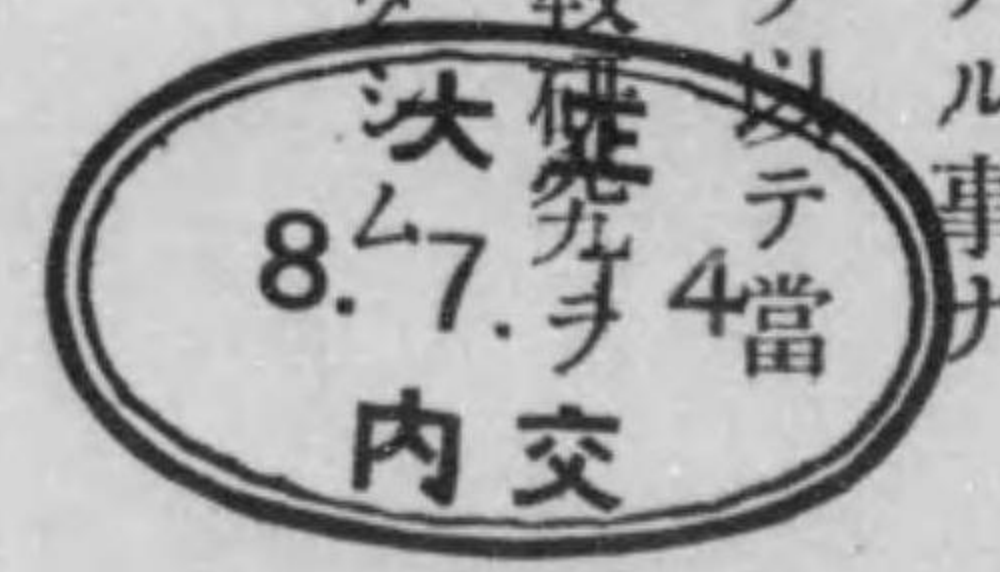
査法、保存法及ヒ手人法等ヲ研究スルコト亦タ甚タ緊要ナル事ナ

リトス本校永年各種ノ用具ヲ使用シ許多ノ實驗ヲ得タルヲ以テ當

校教官陸軍歩兵中尉江口卯吉ヲシテ教育ノ餘暇之レカ比較健先ヲ交  
命セシニ今回其稿成リシヲ以テ梓ニ上シ汎ク希望者ニ頒タ



大正八年六月



陸軍戸山學校長 山田良之助





# 劍術用具ノ研究目次

緒言	一
第一章 劍術用具ノ區分	二
第二章 劍術用具ノ材料及構造法ノ概要	二
第一總說	二
第二面	三
一、面鐵	三
イ、面鐵ノ構造	四
ロ、面鐵ノ塗方及原料	六
1、漆、2、「エナメル」3、「ニス」	六



二

漆、「エナメル」「ニス」ノ鑑定法……………九

同 利 害……………九

二、面蒲團（胴ノ垂、甲手ノ臂廻）……………一〇

麻綿ノ害……………一一

綿及麻綿ノ鑑定法……………一一

イ、紺木綿……………一二

本藍染ト藥品染ノ比較、紺木綿ノ鑑定法……………一三

エ、刺 方……………一四

ハ、面蒲團頭上ノ鞞革……………一五

三、面鋤周圍ノ生革……………一七

四、前 垂（腮）……………一七

五、二重垂（二重腮）……………一七

六、汗 除……………一八

七、内蒲團……………一八

八、腮蒲團……………一八

九、頬蒲團……………一九

一〇、打撃緩和装置……………二〇

打撃緩和装置ノ種類……………二〇

一一、面紐（胴、肩、胸當紐等）……………二一

重打ト元祿打トノ鑑定法……………二一

一二、紐付革ノ革質及結ヒ場所……………二二

一三、紐留革ノ革質及結ヒ方……………二三

第三、胴……………二四

一、竹……………二六

三



四

孟宗竹ト眞竹トノ比較……………二七

イ、竹ノ色合、ロ、竹ノ伐採期、ハ、竹ノ年齢……………二七

ニ、竹ノ検査法、ホ、胴ニ組ミ合セタル時ノ検査法……………二九

二、綴革及綴方……………三〇

三、生 革……………三一

生革ノ比較及検査法……………三一

四、滑 止……………三二

五、胸……………三三

不良ノ材料ヲ使用シ或ハ手ヲ省キタル手段ノ一例……………三四

持出胸ノ種類……………三五

六、乳ノ材料……………三六

第四、胸當及胴ノ裏蒲團……………三六

第五、肩……………三八

一、肩上部ノ革質……………三八

二、腋 下……………四〇

牛鞣革ト馬鞣革トノ比較、立刺ト雲齊……………四一

三、袖廻リ……………四三

第六、甲 手……………四四

一、甲手頭……………四四

鹿革ノ種類、鹿革ノ鑑定法……………四五

二、筒……………四六

三、臂 廻……………四七

四、瘤……………四七

五、綴 紐……………四七



六、甲手ノ検査法	四八
第七、指袋	四九
第八、木銃	五〇
一、材料	五〇
老木ト若木ノ鑑定法、木銃ノ製作法	五二
二、木目	五三
三、調子、重量	五五
四、木銃尖端ノ形状	五五
五、鐵環ノ着方	五五
六、毬毛	五六
1、毬毛革、毬毛革大小ノ利害	五六
2、護謨、護謨ノ鑑定法	五八

護謨ノ大小ノ利害及應急處置	五八
3、毬毛ノ着方	六一
第九、竹刀	六二
一、材料及構造法ノ概要	六二
二、竹刀ノ撰擇法	六三
1、革質、2、削リ方及矯メ方、3、調子、	六三
4、重量、5、形状、6、肉厚、7、腰ノ強弱	六三
三、竹刀ノ乾燥法	六七
四、尖革	六七
五、柄革	六八
六、中結革	六九
七、弦	七〇
弦ノ鑑定法、弦ノ格納法	七〇



八、鑄……………七二

鑄ノ鑑定法……………七二

九、竹刀ノ結束法……………七二

第三章 劍術用具ノ保存取扱法……………七八

第一、總 說……………七八

第二、生革ノ取扱……………八〇

第三、鞣革ノ取扱……………八一

第四、面ノ取扱……………八三

第五、甲手ノ取扱……………八七

第六、胴ノ取扱……………九〇

第七、肩ノ取扱……………九一

第八、演習又ハ防具乾燥ノ際敷物ノ必要……………九二

第九 防具ノ結束法及格納法……………九二

防具結束法ノ一例、防具掛ノ一例、竹刀掛ノ一例……………九三

第四章 劍術用具ノ手入法……………一〇〇

第一 總 說……………一〇〇

第二 修理法 種類及方法……………一〇三

第三 乾燥手入 面内部ノ洗濯法、汗除腮蒲團ノ洗濯……………一一二

第四 消毒手入 種類方法、簡單ナル消毒法ノ一例……………一二六



# 劍術用具ノ研究

## 緒言

劍術用具ノ整否ハ劍術教育ニ影響スルコト大ナリ是レ本研究ヲ必要トスル所以ナリ  
現時劍術攻究ノ氣運盛大トナルニ伴ヒ用具ノ需用ヲ増加シ之レカ材料製作法等多種多  
様ニシテ其選定判別ヲ著シク困難ナラシメタリサレバ用具ヲ直接ニ取リ扱フ者ハ用具  
ノ形状、材料、製作法、修理法、保存手入法、格納法、消毒法、購買法等ヲ充分ニ研究シ廉  
價ニシテ品質形状良好且ツ堅牢ナル用具ヲ購入シ保存ヲ良好ニシ經濟上ハ勿論特ニ教  
育上有利ナラシムル如ク圖ラサルヘカラス然レトモ甚シク價格ノ低廉ナルモノニアリ  
テハ外觀上著シク甲乙ナキカ如シト雖材料粗惡製作亦堅牢ナラスシテ單ニ用具ノ形状  
ヲ備フルニ過キサカ如キモノアリ斯ノ如キモノハ使用久シカラスシテ直ニ破損變形  
シ使用ニ耐ヘサルニ至ル故ニ充分ナル研究ヲ重ヌルノ要アリ以下一般ニ關スル取リ扱



ヒ上ニ於テ參考トナルヘキ諸件ヲ略述セントス

## 第一章 劍術用具ノ區分

劍術用具トハ劍術演習ニ使用スル用具一切ノ謂ヒニシテ防具擊突具ヲ總稱シタルモノナリ

防具ニハ軍刀術用防具、銃劍術用防具、軍刀銃劍兼用防具ノ三種アリ而シテ軍刀術用防具ハ通常 面、胴、(垂)左右甲手、ニシテ之ニ胸當及裏蒲團ヲ加ヘ銃劍術用防具ハ面、肩、左甲手、裏蒲團及指袋ニシテ軍刀銃劍兼用防具ハ面、胴、左右甲手、肩、胸當、裏蒲團及指袋トス

擊突具ハ斬擊、刺突ニ要スル竹刀及刺突ニ要スル木銃トス

## 第二章 劍術用具ノ材料及構造法ノ概要

### 第一 總 說

劍術用具ノ材料及構造ハ操作ノ自由、危險ノ豫防及保存期限ニ大ナル關係アルヲ以テ

材料ノ撰擇ニ深ク注意シ又構造法ニ於テ操作ノ自由ヲ得シメ防護力ト保存トヲ完全ナラシムルヲ要ス

元來防具ハ白兵ノ使用ヲ演練スルニ當リ其操作ノ自由ヲ妨害セサル範圍内ニ於テ人體ヲ防護シテ擊突ノ衝力ヲ緩和シ以テ危險ナカラシメ且ツ所要ノ形狀ヲ破壞スルコトナク可成永ク保存シ得ル如ク製作スヘキモノナリ如何ニ防護完全ナルモ擊突ノ操作自由ナラサルトキハ其効ナク又如何ニ操作自由ナルモ防護薄弱ナルトキハ其効ナキモノトス故ニ能ク擊突部ヲ覆ヒ屈伸ヲ要セサル部分ハ可成之ヲ堅牢ニシ屈伸自在ヲ要スル部分ハ危險ナラサル程度ニ於テ操作ヲ容易ナラシムル如ク構造スルヲ要ス

以上ノ要求ヲ充足スル爲ニハ材料ノ撰擇、構造法ノ研究及保存手入ノ良好ナルヲ要ス

### 第二、面

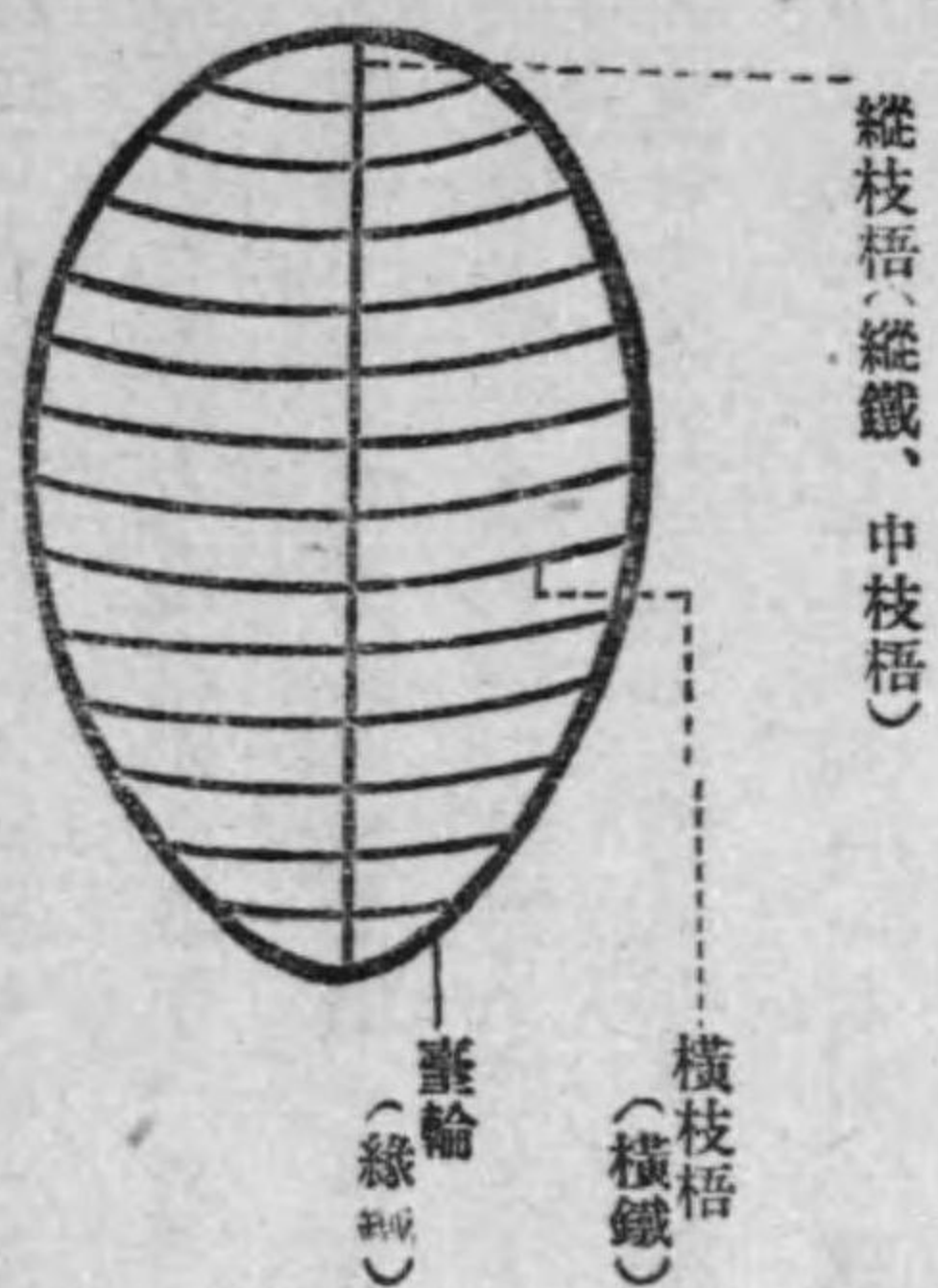
#### 一、面鐵

面鐵ハ硬軟適度ニシテ折レヌ曲ラサルモノナルヲ要ス之カ爲メ鋼ヲ以テ作ルヲ最良



トス鋼ハ他ノ鐵ニ比シ抗力大ナルニヨリ比較的中徑ヲ小ナラシムルコトヲ得隨テ視  
界ヲ擴大シ且重量ヲ輕減シ得ルノ利アリ  
イ、面鐵ノ構造

第一圖

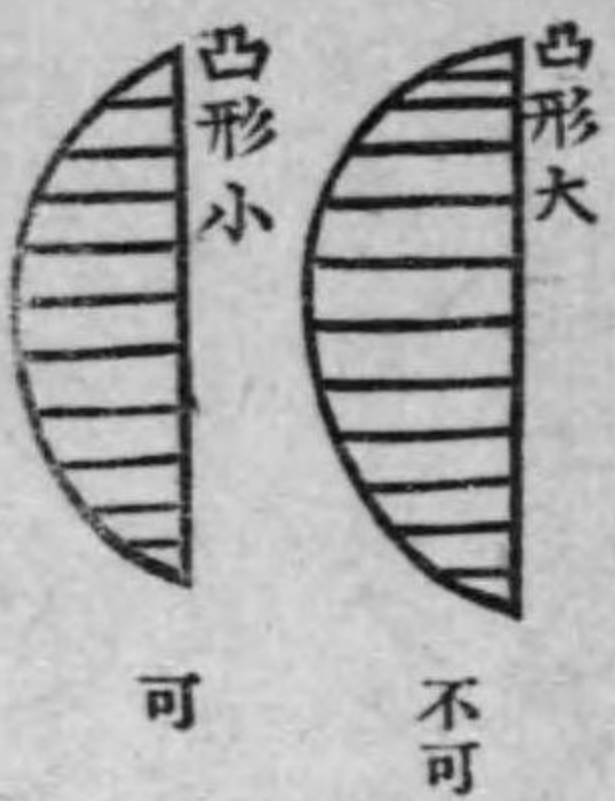


面鐵ノ構造ハ通常一本ノ縦枝梧、十三本乃至  
十四本ノ横枝梧及臺輪トヨリ成リ縦枝梧及臺  
輪ハ健滓ス

横枝梧ノ數ハ一定ノ規定アルモノニアラズ通  
常十四本ナルモ危險ノ顧慮アルニアラサレハ  
其數ヲ減シ以テ視界ノ擴大及重量ノ輕減ヲ圖  
ルヲ可トス而シテ擊突ノ關係ニヨリ兼用面ハ上下各四本銃劍術用面ハ下四本、軍  
刀術用面ハ上四本ノ中徑ヲ大ニスルヲ要ス

縦、横枝梧ノ凸形ハ小ナルヲ要ス凸形大ナルハ軍刀術試合ニ於テ面ノ斬擊ヲシテ

第二圖



不確實ナラシムル不良手段ヨリ來リタルモノニシテ重量ヲ  
増大シ視界ヲ小ニスルヲ以テ不可ナリ然レトモ凸形著シク  
小ナルトキハ面鐵ト顔面トノ間隔ヲ小ナラシメ却ツテ危險  
ヲ生スルノミナラス透視亦困難ナルノ不利アリ故ニ凸形ハ  
適度ナラシメサルヘカラズ

縦枝梧ノ外部ノ角ハ圓削シ置クヲ要ス是レ竹刀殊ニ中結革ノ破損ヲ防カンカ爲メ  
ナリ

兩手軍刀術用面ニ「ニッケル」洋銀、眞鍮等ヲ用ヒタルモノアルモ價格高クシテ抗  
力弱ク防錆ト體裁宜シキノミニシテ軍隊ニハ不適當ナリ

臺輪ハ汗ノ爲メ他ノ鐵部ヨリ比較的腐蝕シ易キモノナルヲ以テ此害ヲ避ケンカ爲  
メ眞鍮、銅等ヲ用ヒタルモノアルモ抗力鐵ニ比シテ弱ク却ツテ破損シ易シ故ニ鐵  
ヲ用ヒ防腐ノ爲メ「エナメル」ヲ塗布スルヲ可トス



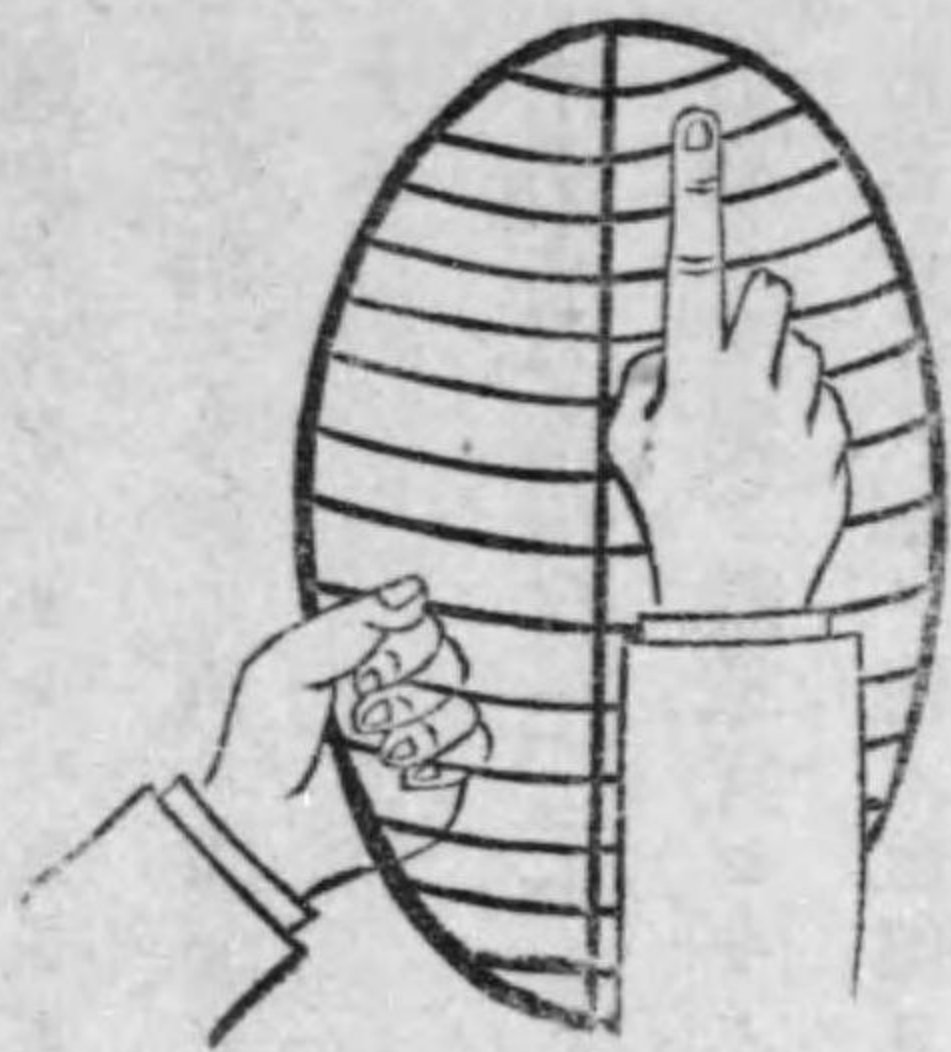
縦、横枝梧ノ結合及縦、横兩枝梧ト臺輪トノ結合ハ確實ナルヲ要ス之ヲ検査スルニハ上圖ノ如ク指ヲ以テ横枝梧ヲ一々強ク撫スルカ或ハ手ヲ以テ横枝梧ヲ輕打ス

ルヲ要ス斯ノ如クシテカラ／＼ト云フカ如キ音ヲ發スルハ結合不確實ナル證據ナリ

臺輪ノ形狀ニハ卵形、桃形等アリ横枝梧ノ上方ヨリ五六本目ノ所廣ク七八本目ノ所ヨリ急ニ狭キハ装着ノ際頰ノ部分概ネ窮屈ヲ感シ不可ナリ

ロ、面鐵ノ塗方及原料

圖 三 第



防錆ニ用フル原料ニ漆、エナメル、ニスノ三種アリ

1 漆ハ最モ良好ナルモ價格高キタメ用フルコト少ク其原料ハ薄黑色ニシテ鹿鞣革ノ如キ嗅アルモ塗布後ハ無嗅ニシテ光澤ヲ有シ保存最良好ナリ

之ヲ塗ルニハ所要ノ色素ト混シテ用ヒ乾燥セシムルニハ塗布後濕氣ヲ含メル地

下室或ハ室内ニ入レ之ヲ密閉シテ約一日ノ後出ス故ニ構造ノ當初ニ於テ之ヲ塗布スルハ容易ナルモ修理ニ當リ面蒲團ヲ附着セシモノニアリテハ面鐵ト面蒲團トヲ連結セル生革及前垂等ノ革質ヲ變シ之ヲ毀損スルノ虞アルヲ以テ他ノ部分ノ保存上修理法トシテハ採用シ難シ

漆ハ一回ノ塗布ニテ著シク光輝ヲ發スルハ漆質ノ不良ナルモノニシテ數回ノ塗布ニテ奥底敷光輝ヲ發スルモノヲ最良トス近時日本漆ノ原料不足ニシテ且ツ高價ナルヲ以テ支那漆ヲ多量ニ混シテ使用シアリ（日本漆ト支那漆混合ノ比ハ漆間屋ニテ混合スルヲ以テ確實ナラサレトモ概ネ三ト七ナリト云フ）

不良品ニシテ膠ニ油煙墨ヲ混シテ塗リ其上ニ生漆ヲ塗リテ平カナラシメ其上ヲ更ニ「トクサ」ニテ磨キ之ニ花漆（光澤アレトモ弱ク保存期限短シ）ヲ塗リタルモノアリ此等不良品ノ鑑定ハ塗漆部ヲ小刀ニテ削リ熱湯ヲ注ケハ膠ノ溶解スルヲ見ルヘシ



2 「エナメル」ハ松脂ヨリ製シタルモノニシテ最初黑色ヲ帶ヒ光澤アルモ漸次消滅ス

之ヲ面鐵ニ塗ルニハ「エナメル」ヲ塗布シタル後爐ノ中ニ於テ百度以上ニ熱シ燒キ附クルモノナリ故ニ漆ト同シク最初ニ於ケル面鐵塗布原料トシテハ適當ナルモ面蒲團ヲ附着セル儘面鐵塗布ノ修理用ニハ此方法ヲ採用スルヲ得ス現今最初ニ於ケル面鐵塗布ノ原料トシテハ通常之ヲ用フ

3 「ニス」ハ其種類甚タ多ク價格低廉ニシテ塗ルニ手數ヲ要セス塗布後數時間ニテ乾燥スルモ濕氣ニ對シ弱クシテ剝脫シ易ク且ツ光澤ナクボツ／＼セル叢アリテ保存短シ故ニ低廉ナル品ノ塗料ニ用フ

「ニス」ヲ面鐵ノ内面ニ塗布スルニハ通常朱ヲ混シテ使用シ上圖ノ如ク其六分ヲ塗り外面ノ四分ハ「エナメル」ヲ塗ルカ或ハ鐵ニ磨キヲ掛クルヲ通常トスルモ近時「ニス」ニ丹殼ヲ混シテ内面ノ

圖 四 第



ハ塗料ヲ施シタル部分ヲ示ス

約四分ヲ塗ルカ如キ不良手段ヲ取ルモノアリ斯ノ如クスル時ハ著シク費用ヲ省キ得ルヲ以テナリ而シテ此種ノモノハ兼用面ニ少ク主トシテ軍刀術用面ニ多シ漆「エナメル」「ニス」ノ鑑定法

- 1 漆光澤ニヨリ或ハ構造ノ初メニアリテハ其香ニヨリテ判断スルコトヲ得ヘシ
- 2 「エナメル」光澤ニヨリ判断スルコトヲ得
- 3 「ニス」光澤ニヨリ或ハ構造ノ初メニアリテハ「ニス」ノ香ニ依リテ判断スルコトヲ得ヘク又熱湯或ハ揮發油等ヲ注クトキハ其質柔軟トナルヲ以テ之ヲ判定スルコトヲ得ベシ「エナメル」ハ熱湯ヲ注クモ其質變スルコトナシ

漆「エナメル」「ニス」ノ利害概ネ左ノ如シ

種類	利害	利	害
漆	保存良好ナリ	一、價高シ 二、修理法トシテ採用スルコト困難ナリ 三、塗布ニ手數ヲ要ス	

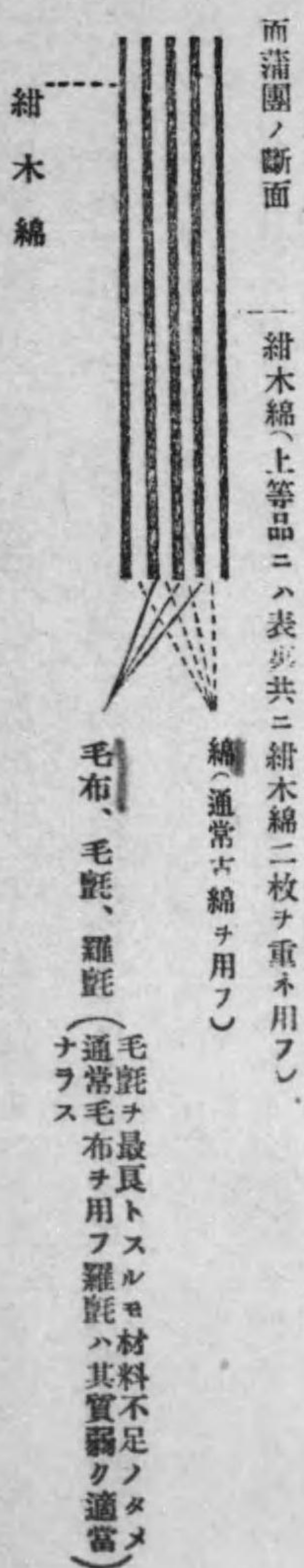


「エナメル」	一、漆ニ比シ價廉ナリ 二、保存良好ナリ	一、修理法トシテ採用スル コト困難ナリ 二、塗布ニ手數ヲ要ス 保存良好ナラズ
「ニス」	一、價甚廉ナリ 二、修理法トシテ採用スル ヲ得 三、塗布ニ手數ヲ要セス	

二、面蒲團(垂、甲手ノ臂廻)

面蒲團ハ内容品ニ古綿及毛氈(毛布、羅氈)ヲ用ヒ通常紺木綿ヲ以テ之ヲ覆ヒ之ヲ基盤刺トナシタルモノニシテ面蒲團頭上ニ鞣革ヲ張リタルハ保存ヲ良好ニセンカ爲ナリ

第五圖



下等ノ面蒲團ニハ内容品ニ古綿ノミヲ用ヒ表裏共紺木綿一枚ニテ覆ヒシモノアリ此等ニハ紺木綿ノ光澤ヲ保タシメ且ツ縫工ヲ容易ナラシムルため紺木綿ノ下ニ紺紙ヲ敷キタルモノアリ

綿ニ麻綿ヲ代用シタルモノアリ麻綿ハ南京袋ヲ細截シテ作りタルモノニシテ製作容易價格亦低廉ニシテ外見緊縮シテ良好ナルカ如キモ左ノ害アリ

- 1 彈性ニ乏シク打撃ニ對シ痛ミヲ感スルコト大ナリ
  - 2 保存良好ナラス
  - 3 綿ニ比シ重量大ナリ
  - 4 粘着力少ク移動シテ固リ易シ
- 綿及麻綿ノ鑑定法

綿ハ纖維密ニシテ其色白ク彈性ニ富ミ粘着力ヲ有スレトモ麻綿ハ纖維粗ニシテ茶褐色ヲ帯ヒ彈性ニ乏シク且ツ粘着力少ク其重量綿ニ比シ大ナルヲ以テ一見シ



テ之ヲ判別スルコトヲ得レトモ既ニ面蒲團ヲ面鐵ニ縫着シ或ハ垂又ハ甲手トシテ完成シタル上ハ手障リニヨリテ之ヲ識別スルカ或ハ其一部ヲ切開シテ検査スルニアラサレハ判別困難ナリトス

近時切開シテ検査ヲ受クルコトアルモ尙其不良手段ノ發見ヲ免カレンカ爲メ左圖ノ如キ手段ヲ採リシモノアリ其他古綿ニ麻綿ヲ混シテ用ヒ或ハ麻綿ノ外部ヲ薄キ古綿ヲ以テ覆ヒタルモノ等アリ甚シキニ至リテハ古綿、麻綿等ヲ用ヒス古毛布或ハ古羅紗ノミヲ用ヒタルモノアリ

不良面蒲團ノ内容(切開サレ易キ部分ニノミ古綿ヲ用フ)

圖六第



イ 紺木綿

紺木綿ハ同一地質ノ白木綿ニ比シ其保存良好ナルモ其染料ノ種類ニ依リ保存ニ著シク長短ヲ生ス而シテ其染料ニ植物性染料(藍)ト礦物性染料(藥品色料)トアリ左ニ本藍染及藥品染ノ比較ヲ擧ケン

本 藍 染

- 1 高價ナリ
- 2 愈々地質ヲ強クス從ツテ保存良好ナリ
- 3 一見美麗ナラサルモ褪色遅ク褪色後白色トナル

藥 品 染

- 1 本藍染ニ比シ價甚タ廉ナリ
- 2 藥品ノ爲メ地質ヲ害シ保存良好ナラス
- 3 一見美麗ナルモ褪色シ易ク褪色後薄赤色トナル

以上ノ外「ビージャ」(獨逸藍)及混合染アリ「ビージャ」ハ元來礦物性染料ナルモ其効果植物性染料ト大差ナク其染法モ亦植物性染法ト略同一ナリ然レトモ稍地質ヲ脆弱ナラシムルノ嫌アリ混合染ハ縦糸横糸ノ一ヲ本藍染トシ他ヲ藥品染トナシタルモ



ノナリ

### 紺木綿ノ鑑定法

此ノ鑑定法ハ日光ニ照シ其色合ヒニ依ツテ判定スルノ外左ノ方法アリ

1 白布或ハ白キ鹿革等ノ如キ白色ノ物品ヲ水ニ浸シ紺木綿ノ面上ヲ數回摩擦スルトキハ本藍染ハ綠青色ヲ藥品染ハ海老茶色(黒赤色)ヲ摩擦物ニ附着ス

2 硝酸ニ浸セハ本藍染ハ白色ニ藥品染ハ赤色ニ變ス

3 嗅ニ依ツテ判定スルコトヲ得即チ本藍染ハ藍固有ノ嗅ヲ發ス

### 地質ニ就テ

地質ハ糸細キモ緊張セルモノヲ可トス糸目織方ノ粗大ナルハ不可ナリ即チ一平方寸度内ニ於テ糸目數ノ多キヲ可トス近時糊ヲ以テ地質ノ堅牢ナルカ如ク装ヘルモノアリ注意ヲ要ス

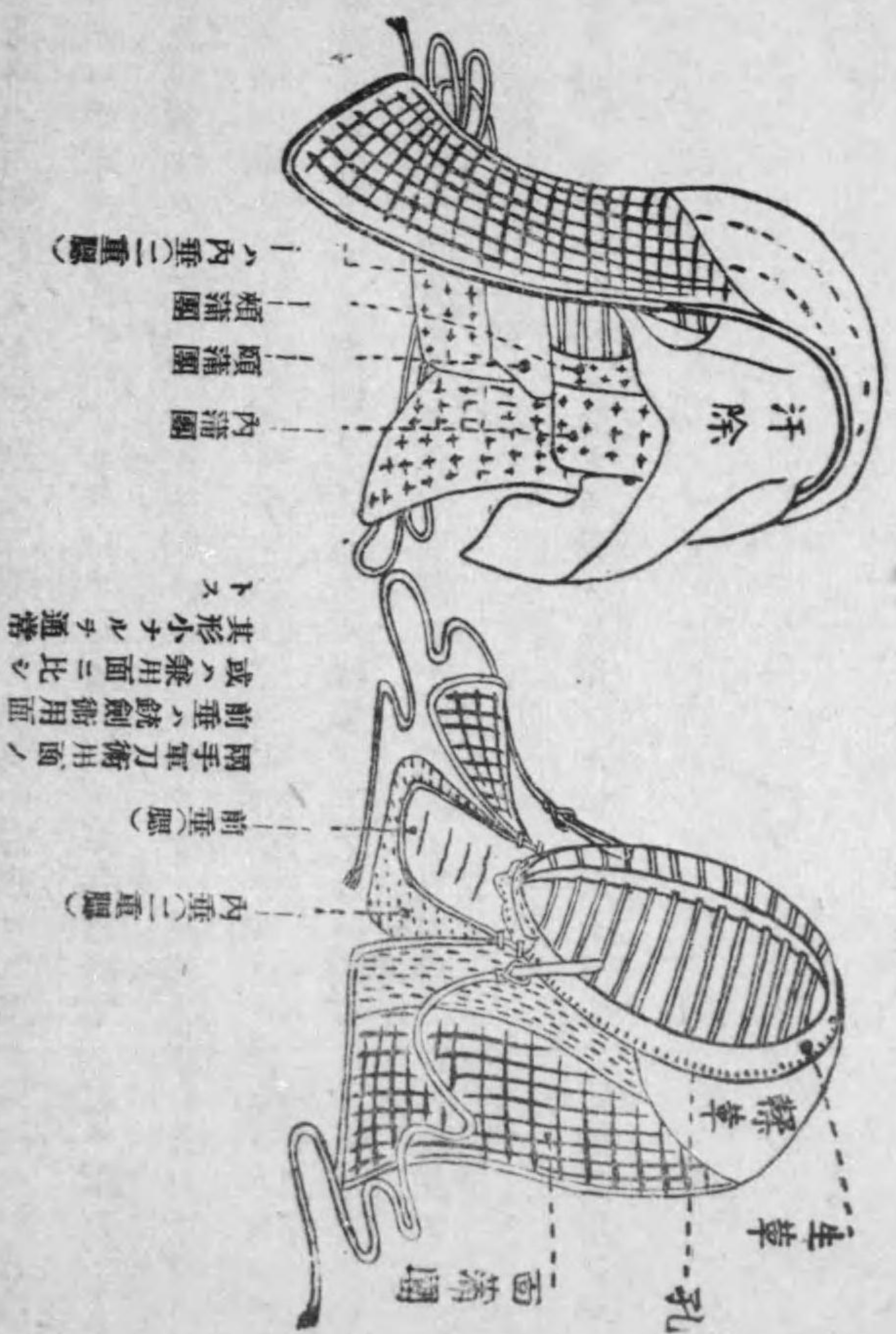
### ロ、刺方

刺方ニハ手刺及「ミシン」刺ノ二種アリ手刺ハ古來ヨリ多ク採用セシ方法ニシテ合セ糸ニテ太キモノヲ用フルヲ以テ充分ニ縮リ保存良好ナリ之ニ反シ「ミシン」刺ハ外見美麗ナルモ之ニ用フル糸細ク充分ニ縮ラサルヲ以テ保存良好ナラス手刺ニモ碁盤目ニ刺ス法ト五ノ目ニ刺ス法トアリ碁盤目ニ刺スヲ通常トスルモ面蒲團ノ縁及頬ノ部以下、甲手臂廻ノ縁、垂レノ縁等ヲ五ノ目ニ刺シタルモノアリ斯ノ如クス時ルハ緊縮ノ度大ニシテ保存良好ナルモ價高ク且ツ綿ノ彈力ヲ減スルノ不利アリ

### ハ、面蒲團頭上ノ鞣革

面蒲團ノ保存ヲ良好ニセンカ爲メニ用フルモノニシテ牛ノ鞣革ヲ用フルヲ可トス





三、面鐵周圍ノ生草

面鐵ト面蒲團トノ接續ノ用ヲナスモノニシテ牛ノ生草ヲ用フ其幅過大ニシテ皺ヲ生シ或ハ厚薄アリテ其厚サノ不平均ナルハ宜シカラス又面蒲團ニ縫着スルタメ之ニ穿チタル穴ノ過大ナルモ不可ナリ穴ノ幅ト之ヲ縫フ革紐トノ幅ハ適合シアラサルヘカラス

四、前垂(腮)

外部ノ革ハ牛ノ鞣革ニシテ内容品ニハ古綿ヲ用フ外部ニ劣等ナル牛ノ鞣革或ハ馬ノ鞣革ヲ用ヒ内容品ニ「ボロ」紙及麻綿ヲ用ヒタル不良品アリ斯ノ如キモノハ保存最モ不良ナリ

前垂ハ特ニ其縫着ニ注意スルヲ要ス

五、二重垂(内垂或ハ二重腮トモ云フ)

兼用面及銃劍術用面ノ内垂ニハ通常淺黄木綿ヲ用フレトモ兩手軍刀術用面ノ内垂ニ



ハ紺木綿ヲ用フ往々紺天鷲絨ヲ用ヒタルモノアリ何レモ其内容品ハ綿ニシテ之ニ五ノ目刺ヲ施シタルモノナリ

淺黃木綿ニハ藥品染ナキモ白木綿ニ丹殼ニニカラヲ塗り之ヲ薄キ藍ニテ染メ光澤ヲ保タシメタル不良品アリ

六、汗除

面ノ内部ヲ不潔ナラシメサルタメニ用フルモノニシテ通常淺黃木綿ヲ用フ

七、内蒲團

打撃力ヲ緩和スルタメ用フルモノニシテ通常淺黃木綿ヲ用ヒ之ニ綿ヲ入レ碁盤刺ヲ施シ綿ノ彈力ヲ利用センカ爲メ其刺目ヲ比較的大ニシタルモノナリ碁盤目ヲ小ニスルトキハ保存良好ナルモ價高キト打撃力ヲ緩和スルノ効力ヲ減シ却ツテ不利ナリ

八、願蒲團

衝突力ヲ和ケ且ツ面ノ願部ヲ不潔ナラシメサルタメ設ケタルモノニシテ淺黃木綿ヲ

梯形ニ縫ヒ其中ニ綿ヲ入レタルモノナリ

九、頬蒲團

兼用面及銃劍術用面ニハ通常淺黃木綿ヲ用フレトモ兩手軍刀術用面ニハ紺木綿ヲ用フルヲ通常トス然レトモ上等品ニハ紺天鷲絨ヲ用ヒタルモノアリ何レモ其内容品ハ綿ナリ

天鷲絨ヲ用ヒタルモノハ装着ノ當初心地良キモ汗ノ乾燥木綿ニ比シテ遅ク之カ爲メ面鐵ト面蒲團トノ縫着部殊ニ腮ノ部ヲ腐蝕セシムルコト大ナリ

頬蒲團ハ其外部ノ面蒲團ノ内面ニ接着シアルヲ要ス然ラスシテ頬蒲團ト面蒲團トノ間ニ隙隙ノ生スルハ構造法ノ拙ナルカ或ハ頬蒲團ノ寸度ヲ節約セシニ依ルモノナリ腮ノ入ルヘキ部分ノ形狀ニ注意スルヲ要ス其断面「U」ノ如ク腮ニ適合スルハ可ナレトモ「V」ノ如キ形ヲ呈スルハ演習中往々面ノ上方ニ滑走スル虞アリ

内蒲團、汗除、願蒲團ニハ紺木綿ヲ用フルモノアレトモ價高ク又白木綿ハ價格廉



ナルモ不潔ニ陥リ易ク常ニ洗濯セサルヘカラス故ニ衛生上良好ナルモ洗濯ノ度ヲ重ヌルニ從ヒ漸次地質ヲ弱クシ保存良好ナラス却ツテ不經濟ナリ故ニ淺黄木綿ヲ使用スルヲ可トス

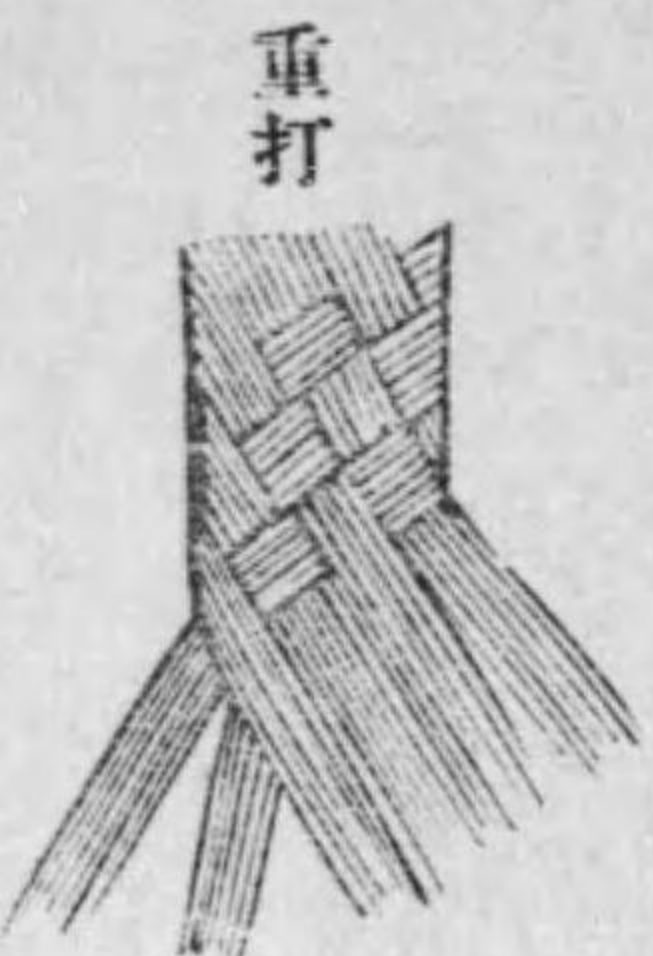
一〇、打撃緩和装置

打撃緩和装置ノ種類概ネ左ノ如シ

- 1 面蒲團ノ下ニ内蒲團ヲ重ネタルモノ
  - 2 護謨球ヲ排列セルモノ
  - 3 割竹(三條)ヲ縫着セルモノ(劍術教範制定ノモノ)
  - 4 割竹及眞田紐或ハ革ヲ以テ面蒲團ト内蒲團トノ間ニ空隙ヲ構成シ衝力ヲ分解シ以テ疼痛ヲ和クル如クセルモノ(梅田號四三式第一號第二號)
- 第一第二ノ裝置ハ防痛ノ効少キモ第三ノ方法ハ稍効力アリ第四ノ方法ハ疼痛ヲ感スルコト最モ少ナリ

第九圖(其一)

一一、面紐(胴及肩胸當ノ紐等)  
 面紐ノ原料ハ木綿糸ニシテ稀ニ小町糸ヲ用ヒタルモノアリ而シテ其打方ニハ重打及元祿打ノ別アリ前者ハ保存良好ナルモ後者ハ良好ナラス  
 重打ト元祿打トノ鑑定法



一束十二本九束ニテ打ツ



一束十三本乃至十五本五束ニテ打ツ

重打ハ木綿糸ヲ以テ製スルモノニシテ細糸十二本ヲ一束トシ九束ニテ打チタルモノ(第九圖其一)ナルヲ以テ保存良好ナリ  
 元祿打ハ紡績ノ飛綿ヲ以テ製シタル糸ニテ打チタルモノ(第九圖其二)ナリ  
 飛綿ハ元來毛ノ足短ク從ツテ切斷シ易ク又細糸十二本乃至十五本ヲ一束トシ五束ニテ製スル等重打ニ比シ原料頗ル粗惡ニシテ保存良好ナラス



一二、紐附革ノ革質及結ヒ場所

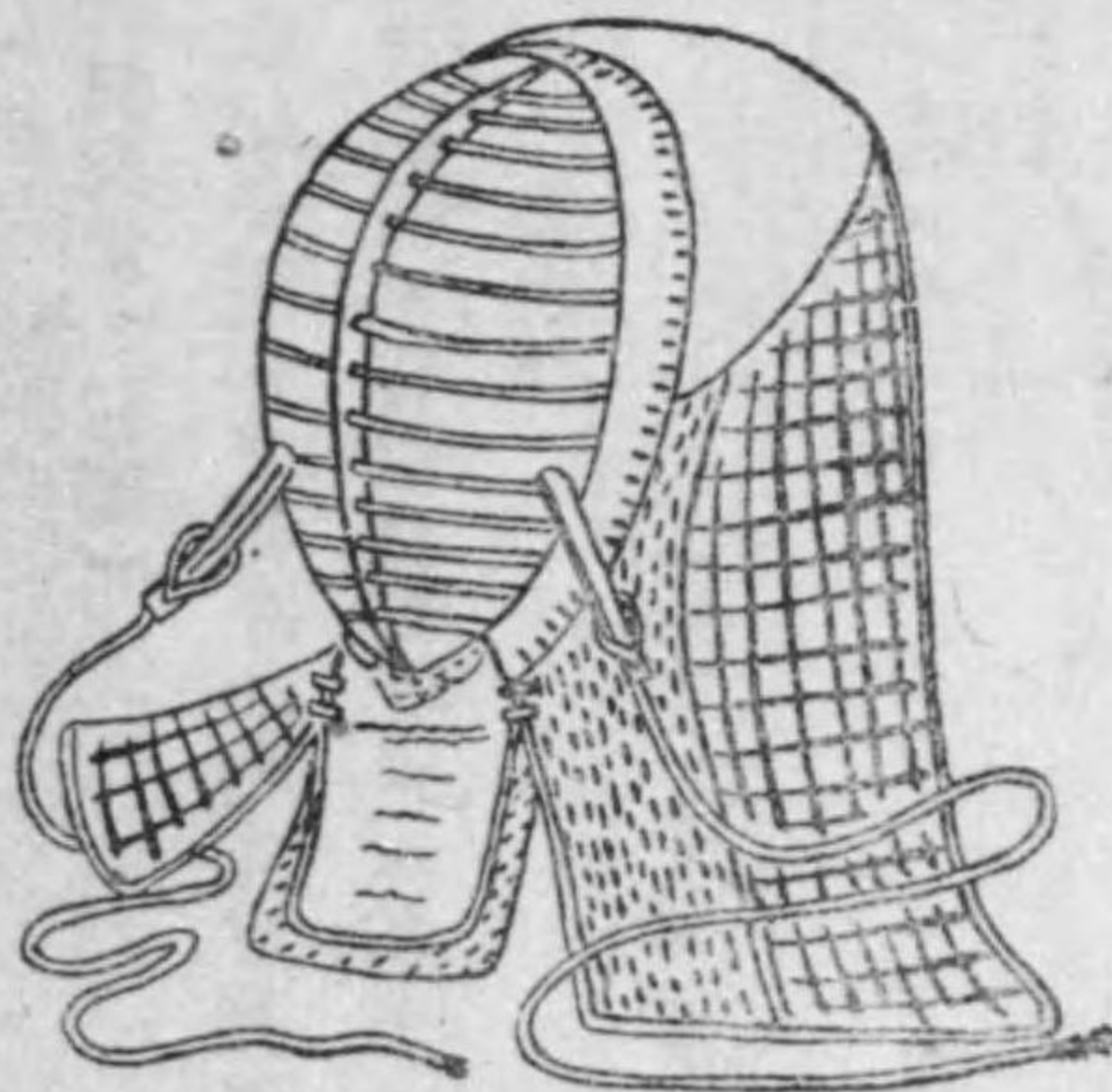
紐附革ハ洞ニ於ケル乳ト同一効用ヲ有スルモノニシテ若シ紐附革ヲ使用セシテ直ニ面ノ枝梧ニ結ヒ附クル時ハ紐ノ附着端ハ常ニ屈伸動搖スルノ外錆等ノ爲メ切損シ易キノミナラス着装ノ確實ヲ缺クニ至ル

之ニ用フル革ハ牛ノ鞣革ヲ可トス結ヒ場所ハ縦枝梧ノ上端(第十一圖其一、其二)或ハ横枝梧ノ下方ヨリ五、六本目ヲ可トス(十圖)之ヨリ以下ノ横枝梧ニ結着スルト

キハ頸部ヲ縮メ頭部ノ血行ヲ妨クルノミナラス頸部窮屈ニシテ頭ノ運動自在ナラス且ツ面蒲團ノ爲メ肩ノ窮屈ヲ感ス縦枝梧ノ上端ニ結着スルトキハ以上ノ害ヲ除キ且紐止革ノ代用ヲナスノ利アリ但シ紐ノ長サヲ増スノ不利アリ

第十圖

横枝梧ノ下ヨリ五本目ニ結着セシモノ



第十圖

其一

縦枝梧ノ上端ニ結着シタル一例



第十圖

其二

同上



第十一圖其一其二ノ結ヒ方ハ其利害大差ナキモ其二ノ如ク結フトキハ紐止ノ効確實ナルノ利アリ

一三、紐留革ノ革質及結ヒ方

紐留革ハ装着ノ際面紐ノ滑走ヲ防キ安定ヲ確實ナラシメタルモノニシテ上方ニ結フニ從ヒ透視容易ナルモ面紐滑走シ易ク且ツ打撃セララル、コト多キヲ以テ切損シ易シ下方ニ至ルニ從ヒ其憂ナク装着確實ナルモ透視不便ナリ故ニ以上ノコトヲ顧慮シテ



結束スルヲ要ス

之ニ用フル革ハ牛ノ鞣革ニシテ其結ヒ方ニ種々アル左ニ其一ニノ例ヲ圖示セン

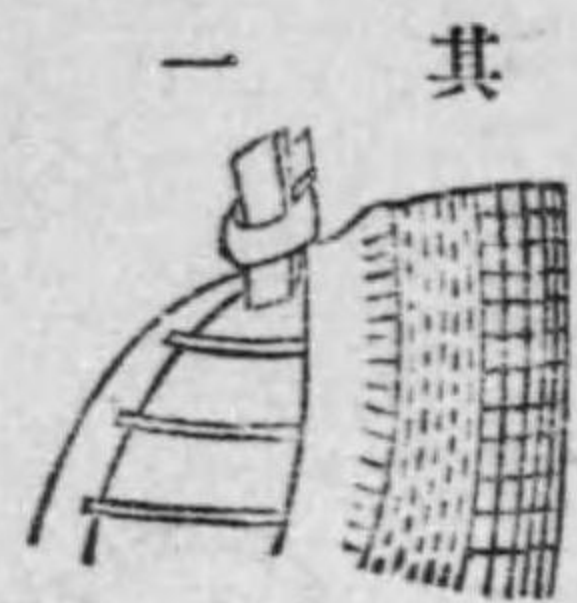
縦枝梧ノ上端ニ  
結ヒシモノ

同上

第三縦枝梧ト縦枝梧トノ結合部  
ニ結ヒシモノ

第三横枝梧

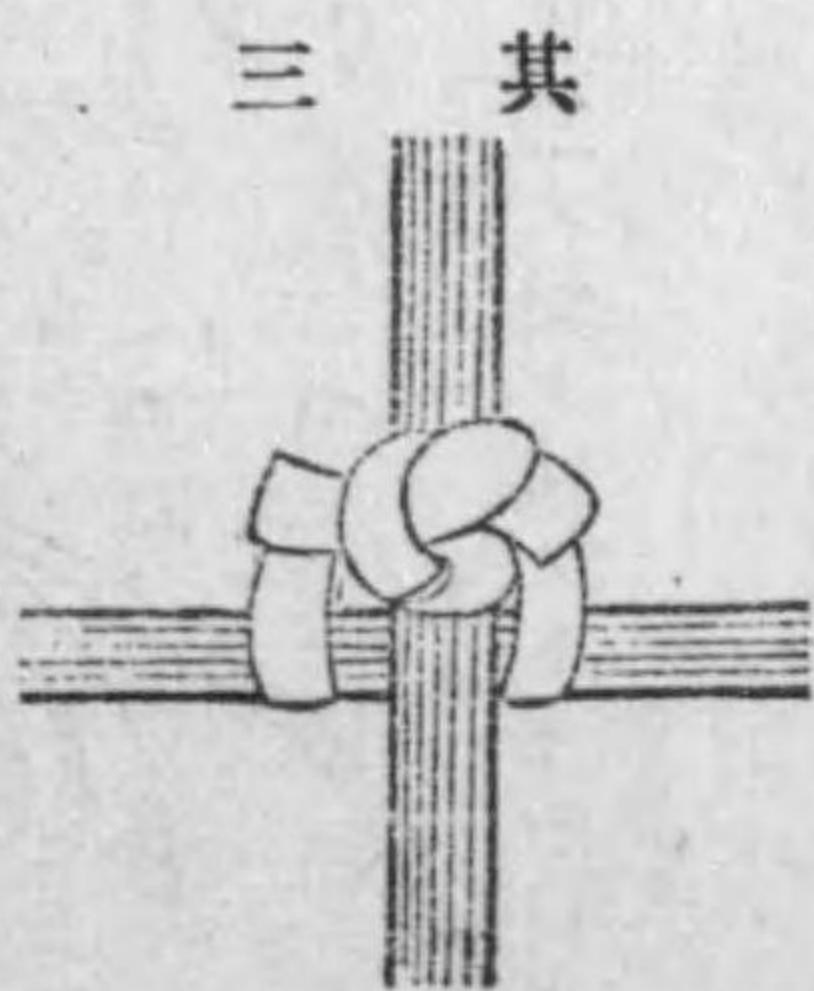
第二十圖



其一



其二



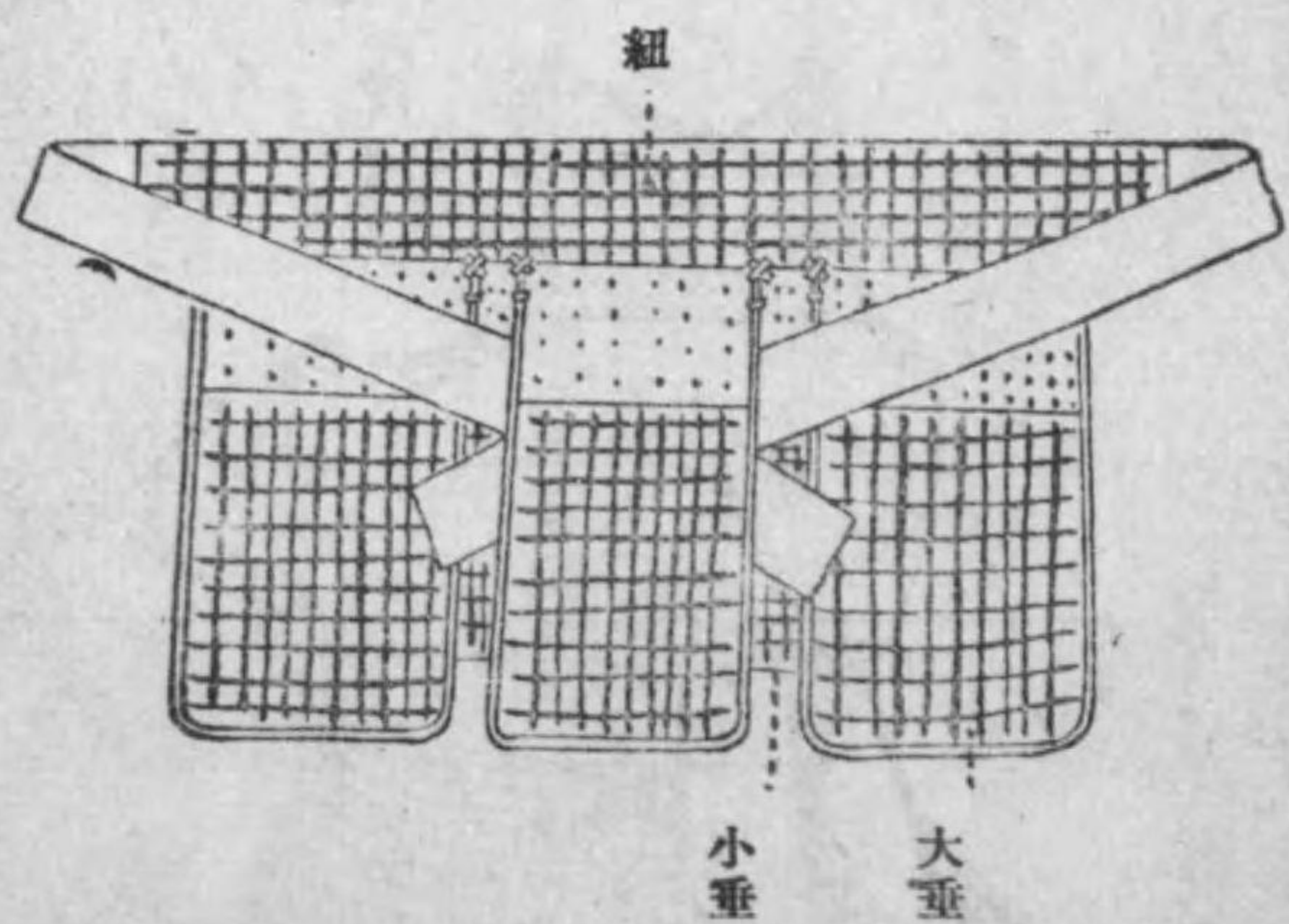
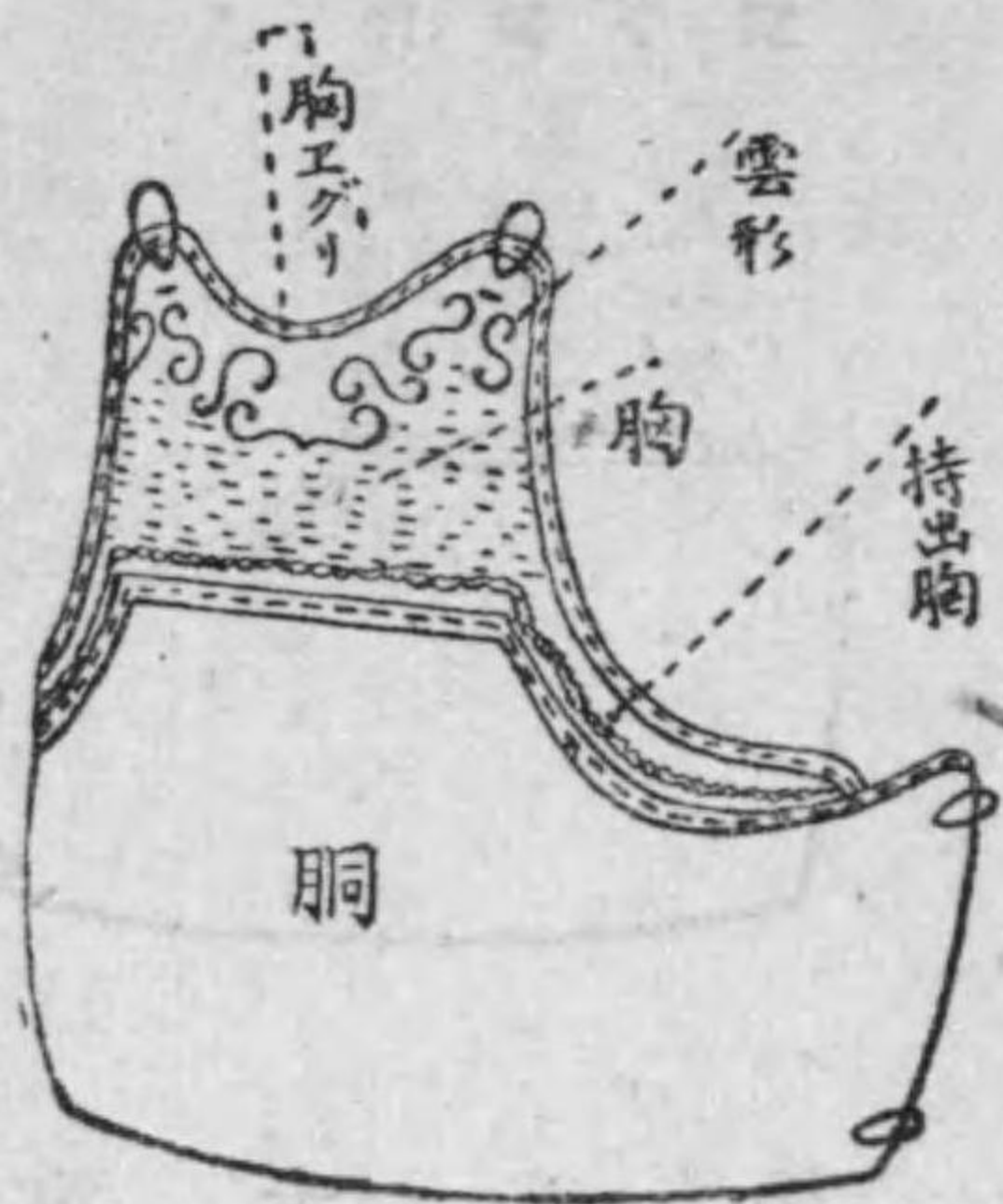
其三

其一、其二ノ結ヒ方ハ其三ノ結ビ方ニ比シ面紐ノ保存上稍々良好ナルモ其他大差ナシ

第三 胴

胴ハ一枚ノ生革ニテ製シタルモノ、竹ノミヲ以テ製シタルモノ、竹ヲ以テ製シ其上ニ  
生革ヲ張りタルモノ、又ハ兼用胴ノ如ク竹ヲ以テ製シ其一部ニ生革ヲ張りタルモノ其  
他一閉張ノ胴等數種アリ而シテ軍刀術用胴ハ通常胴ト垂トラ分離シ銃劍術用胴及兼用

第三十圖



胴ハ危險豫防ノタメ通常胴ト垂トラ連結ス  
何レノ胴ニ於テモ其形狀特ニ縦横ノ曲度ニ注意スルヲ要ス曲徑ナキ胴ヲ平胴ト云フ



圖 四 十 第

胴 平 製 竹

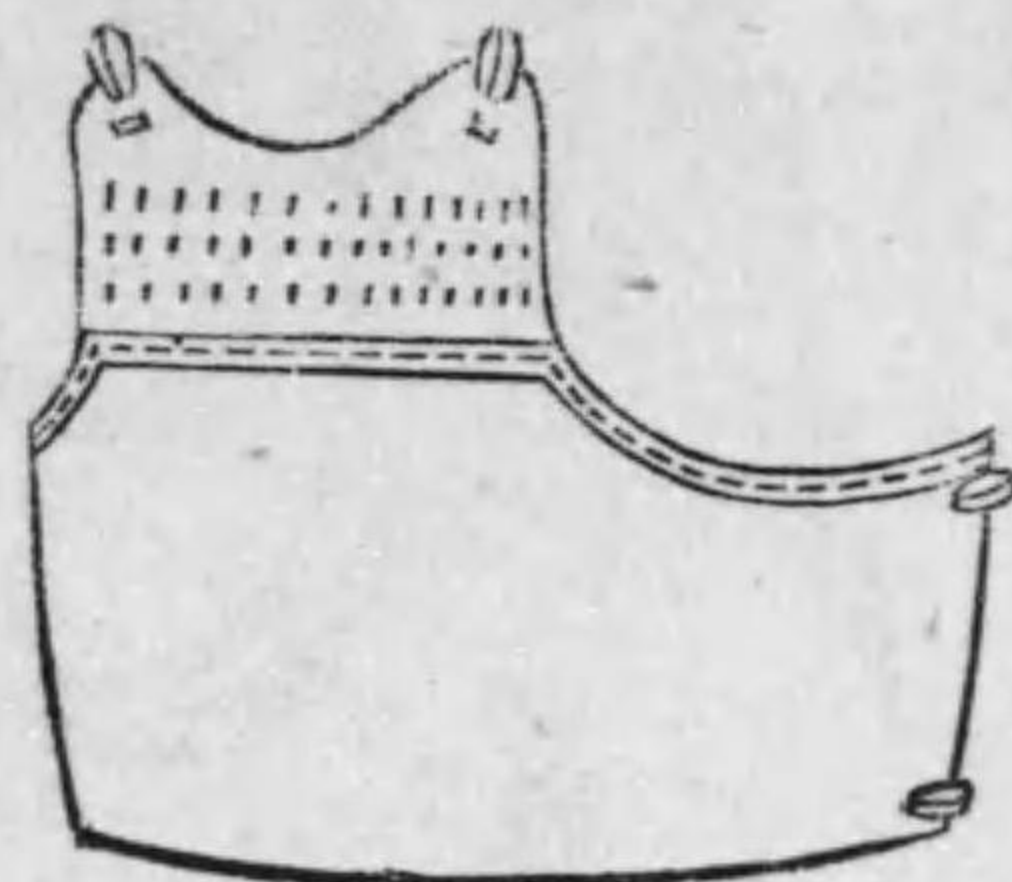
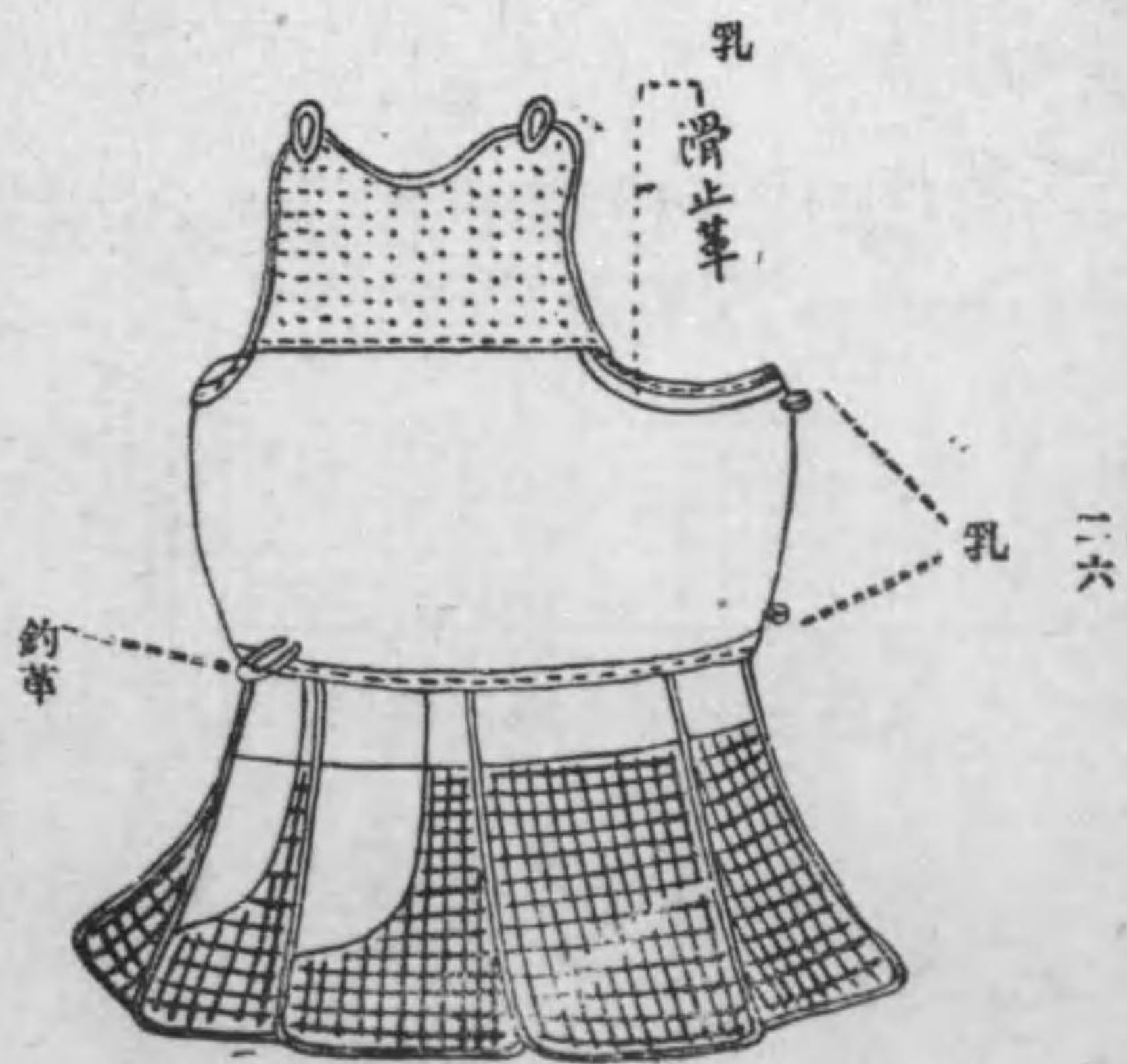


圖 五 十 第

胴 用 兼



一、竹

胴ニハ通常孟宗竹ヲ用フ眞竹ハ竹質良好ナルモ中徑小ニシテ肉薄ク適當ノ幅ヲ得難キヲ以テ使用スルコト稀ナリ

孟宗竹



眞竹



孟宗竹及眞竹ノ比較ヲ舉クレハ左ノ如シ

孟宗竹

- 1 表面粗ナリ
- 2 纖維粗ナリ
- 3 節ノ幅大ニシテ節間小ナリ
- 4 肉厚シ
- 5 太シ
- 6 質堅牢ナラス

眞竹

- 1 表面緻密ナリ
- 2 纖維密ナリ
- 3 節ノ幅小ニシテ節間大ナリ
- 4 肉薄シ
- 5 細シ
- 6 質堅牢ナリ

イ、竹ノ色合



飴色ニシテ光澤アルヲ可トス青色ヲ帯ヒ光澤ナキモノ（乾燥不十分ナルモノハ此限ニアラス）ハ不可ナリ

竹ヲ乾燥スルニ際シ青味ノ取ル、時期ハ光澤ナキモノナリ

ロ、竹ノ伐採時期

竹ハ其伐採時期ニヨリテ著シク強弱ニ關係スルモノナルヲ以テ胴ノ如ク永ク保存スヘキモノニアリテハ特ニ適當ナル時期ニ伐採シタルモノヲ以テ製作スルコトニ注意セサルヘカラス若シ伐採ノ時期適當ナラサルトキハ害蟲發生シテ竹ノ内部ハ悉ク蟲糞ト化スルニ至ル故ニ時々撃突部ニ於ケル竹部ヲ検査シ危險ナカラシムルコトニ注意スルヲ要ス

俚言ニ木ハ六月竹八月（舊曆）ト云フ即チ通常十月頃ヨリ翌年三月頃迄ノ間ニ於テ伐採シタルモノヲ可トシ四五月頃ニ切リシモノ、土用切、雪折等ハ不可ナリ

ハ、竹ノ年齢

凡テ竹ハ老竹ヲ可トスルモ極端ニ古ク年老ヒタル竹ハ却テ不可ナリ通常三四年生ニシテ中徑七八寸以上ノモノヲ可トス又一本ノ竹ニテ云フトキハ根本ヲ可トス

ニ、竹質ノ検査法

- 1 断面ノ粗密、密ナルヲ可トス
- 2 重サ及厚サ、重ク厚キヲ可トス又薄キモ重キヲ可トス
- 3 折リタルトキ纖維ト直角ニ折ル、ハ不可ナリ
- 4 爪ニテ傷クハ軟質ナリ、柔カナルハ不可ナリ

ホ、胴ニ組ミ合セタル時ノ検査法

- 1 竹ハ胴ニ組ミ合セタル際節一致シ曲度厚サ同一ナルヲ要ス
- 2 竹ノ蟲入りナキコトニ注意スヘシ應々蟲穴ヲ木ニテ埋メタルモノアリ
- 3 竹ノヒビ裂目アルモノアリ矯メ方ノ不良ナル結果ヨリ生シタルモノニシテ小ナルハ大ナル害ナシ



4 垂ト縁革トヲ縫着スヘキ穴ノ著シク竹縁ニ近キハ不可ナリ

5 竹ノ裏皮(裏面)ノ殘レルハ竹ノ薄キ證據ナリ

6 半革張り胴ニハ竹ノ部ト生革ヲ張りクル部トノ接合部ニ階段ヲナスモノアリ

注意ヲ要ス

7 生革ヲ張りタル部分ノ竹ト生革トノ間ニ著シク間隙アルハ不可ナリ

8 生革ヲ張りタル部分ハ各竹片ノ接合ヲ強固ナラシムルタメ通常横ニ三筋ノ弦

ヲ通シアリ線鐵ヲ通シタルモノアルモ錆ヲ生シ折レ易キヲ以テ不可ナリ又外部

ヨリ見ユル兩端ノミ弦ヲ通シタル如ク裝ヘルモノアリ注意ヲ要ス

### 二、綴革及綴方

綴革ハ牛ノ鞣革ニシテ毛並ニ截斷シタルモノヲ用フルヲ可トス然ラサルトキハ伸ヒ易ク表皮切レ破損ヲ速カナラシム

竹ノ綴合ハ充分ニ緊縮シアルヲ要ス而シテ其綴方ハ  ヲ可トシ  ハ破綻ヲ來シ

### 易シ

### 三、生革

胴ニ用フル革ハ牛ノ生革ヲ最良トス豚ノ生革ヲ用フルモノアルモ堅牢ノ度牛革ニ及ハス左ニ牛、豚、馬ノ生革ヲ比較説明シ且ツ之カ鑑定法ヲ述ヘシ

區別	說明	鑑定法
牛生革	牛ノ生革ハ其質堅牢ニシテ保存良好ナリ價格亦高カラス	毛孔不規則ニシテ其色半透明ナリ 色ヲナスヲ最良トス毛アルモノ 血液ノ除去シアラサルモノ厚サ不 同ナルモノハ不可ナリ
豚生革	價格低廉ナルモ其質堅牢ナラス保存ハ牛生革ノ二分ノ一ニ過キス且ツ脂氣多ク不潔ニ陥リ易シ	毛孔深ク三本宛不齊一ニ生シアル モ猪ニ比シ毛孔淺シ其色不透明ニ シテ牛生革ニ比シ白色ヲ帶ブ
馬生革	保存ハ豚ニ優ルモ牛ニ劣ル普通カバン等ヲ造ルニ用フ	表面滑澤ニシテ美麗ナリ

以上ノ外水牛、野猪等アリ水牛ハ其質堅キモ彈力ニ乏シク胴或ハ肩ノ壺ニ使用スル



コトアルモ龜裂ヲ生シ易シ野猪ハ甚タ良好ナルモ價甚タ高ク僅ニ鍔ヲ造ルニ用フ  
 生革ニ漆ノ如キ塗料ヲ施スハ革ノ保存ヲ良好ニセンカ爲メナリ蓋シ生革ハ水分ノ交  
 感ヲ受ケ易ク又乾燥甚シキ時ハ變形シ易ケレハナリ故ニ漆ヲ塗ルトキハ水分ノ交感  
 ヲ減少シ又日光ノ直射ニ對シ變質スルコトナク且ツ打撃ニ對シ堅牢ナルヲ以テナリ  
 生革ハ梅雨ノ候ニアリテハ水ニテ一時間以内ニ軟化スト云フ堅固ニ見ユレトモ水ニ  
 ヨリ軟化變形シ易キモノナレハ水分アル地上等ニ置クコトナク又雨等ニ濡レサル様  
 注意スルコト肝要ナリ若シ濕氣ヲ帶ヒタル時ハ變形セサル様其格納ニ注意スルヲ要  
 ス殊ニ生革ニ塗油スルカ如キハ最モ戒メサルヘカラス

四、滑止

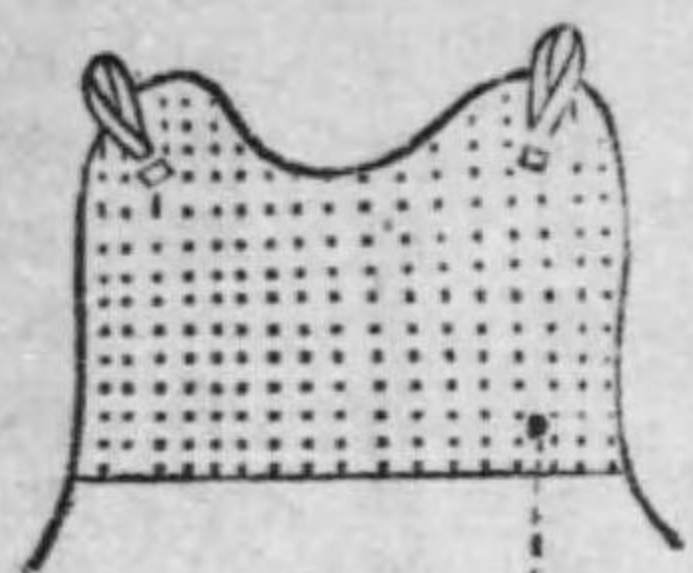
刺突ニ當リ劍尖滑走シテ腋下ヲ刺突スルコトアルヲ以テ此變ヲ防カンカ爲メニ設ケ  
 タルモノニシテ麻繩ヲ内容品トシ牛鞣革ヲ以テ外部ヲ被ヒタルモノナリ  
 滑止ハ小ニシテ其用ヲナササルモノアリ又太キニ過クルモ不可ナリ要ハ肩ヲ装着ス

ルモ窮屈ヲ感スルコトナク且ツ十分ニ防護シ得ルヲ要ス

五、胸

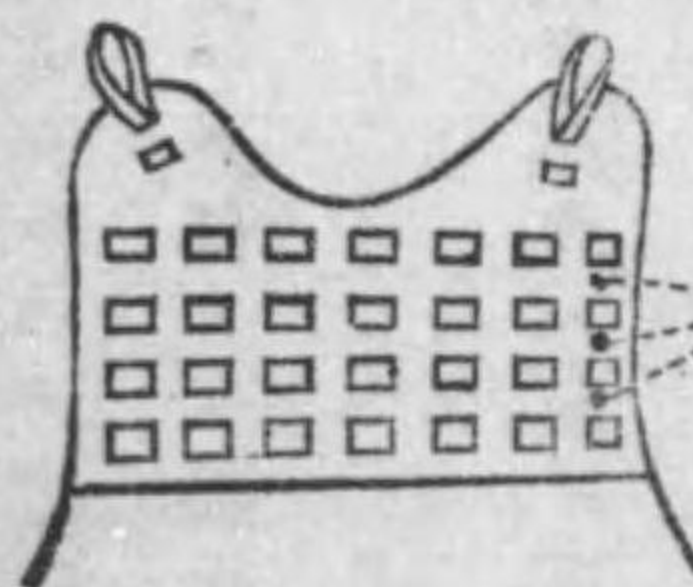
胸ハ胸部ヲ防護スル爲極メテ緊要ナル部分ナルヲ以テ努メテ堅固ナルヲ要ス柔軟ナ  
 ルトキハ破損變形シ易ク保存良好ナラサルノミナラス撃突ニ對シ疼痛ヲ感スルコト  
 大ニシテ防護ノ用ヲナササルニ至ル胸ノ構造ハ大別シテ二種アリ内容品ニ毛布或ハ  
 毛氈ヲ用ヒ牛ノ鞣革ヲ以テ外部ヲ覆ヒ表面ノ革ト内部ノ毛布或ハ毛氈トヲ碁盤目ニ  
 刺シ詰メタルモノ(第十六圖其一)及ヒ表裏兩部ノ革ヲ第十六圖其二ノ如ク革紐ヲ以

第十六圖 其一



毛布或ハ毛氈ヲ入  
 レテ刺シタルモノ

其二



此ノ間ニ藁或ハ綿ヲ挿入ス



ヲ數段ニ縫ヒ其縫ヒタル各間隙ニ藁或ハ綿ヲ挿入シタルモノ之ナリ前者ハ防護力十分ナルモ後者ハ不十分ナリ殊ニ此部分ハ完成ノ上ハ外部ヨリ其正否ヲ検査スルコト困難ナルヲ以テ特ニ注意セサルヘカラス

不良ノ材料ヲ使用シ或ハ手ヲ省キタル手段ノ一例ヲ示セハ左ノ如シ

外部ノ革ニ馬革或ハ調革ノ截チ屑ヲ使用スルモノアリ馬革ハ一見牛革ノ如クナルモ價廉ニシテ保存良好ナラス調革ノ截チ屑ハ價甚タ廉ニシテ厚サ薄カラサルモ保存良好ナラス調革ハ通常革ノ中央部即チ背ノ部分ニテ製スルヲ以テ此ノ截チ屑ハ腹部ニシテ皺ナシ故ニ胸ニ使用スルニ當リテハ縦横ニ揉ミテ皺ヲ造リ且ツ作業中皺ノ伸ハサル如ク其裏面ニボロ紙ヲ張りテ使用スト云フ然レトモ縦横ニ揉ム結果多少其面積ヲ減少シ材料ノ損失ヲ來シ且ツ手數ヲ要スルヲ以テ資本小ナル者ハ此方法ヲ採用スルコト却ツテ少シ又内容品ハ通常毛布或ハ毛氈五六枚ヲ重ネ之ヲ表面ノ革ト共ニ堅ク刺シ詰ムルモノナレトモ毛布或ハ毛氈ノ數ヲ減シテ二枚或ハ三

圖七十第

一 其



二 其



枚ヲ表面ノ革ト共ニ刺シ詰メ之ニ他ノ一枚或ハ二枚ノ刺ササル毛布或ハ毛氈ヲ貼附シ以テ材料及手數ヲ省キタルモノアリ又五六枚ヲ刺シ詰メタル厚サト二、三枚ヲ刺シ詰メ其上ニ刺ササル一枚或ハ二枚ヲ貼附シタル厚サハ大差ナク其判別大ニ困難ナリ

軍刀術専用胸ニ持出胸(小胸トモ云フ)ヲ附ケタルモノアリ持出胸ハ明治廿五六年頃ヨリ製作セラレシモノニシテ其形狀種々アレトモ要ハ腋下ノ防護ニアリ



圖七十第

三 其



四 其



二六

六、乳ノ材料

乳ニハ牛ノ鞣革ヲ用フ兩縁ヲ縫合シタルモノト然ラサルモノトアリ前者ハ保存上良好ナリ  
兼用胴ノ肩紐ヲ結着スヘキ乳ハ肩ノ装着ヲシテ確實ナラシムルモノナルヲ以テ常に完全ナラシムルヲ要ス

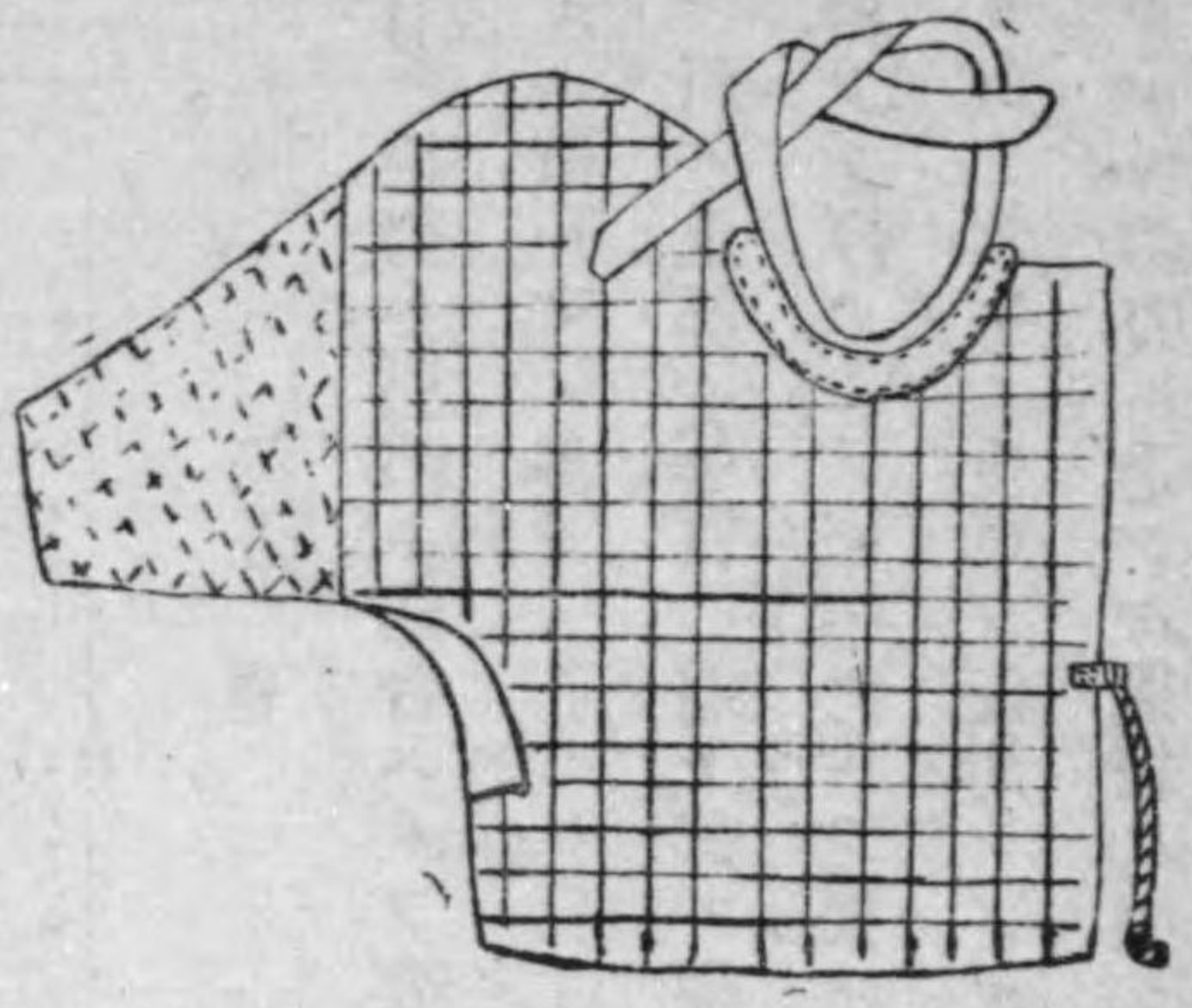
第四 胸當及胴ノ裏蒲團

胸當及胴ノ裏蒲團ハ綿ヲ被フニ前者ハ紺木綿後者ハ白木綿ヲ以テシ共ニ碁盤刺トナスモノトス而シテ碁盤目ハ一般ニ廣キヲ良トス是レ綿ノ彈力ヲ利用センカ爲メナリ

綿ニ代フルニ麻綿ヲ以テシタルモノハ其害面蒲團ニ同シク又麻綿ヲ被フニ綿ヲ以テシ一見綿ヲ入レタルカ如ク装フモノアリ此ノ如キハ撃突ノ衝力ヲ和クヘキ効力少キノミナラス保存上亦良好ナラス

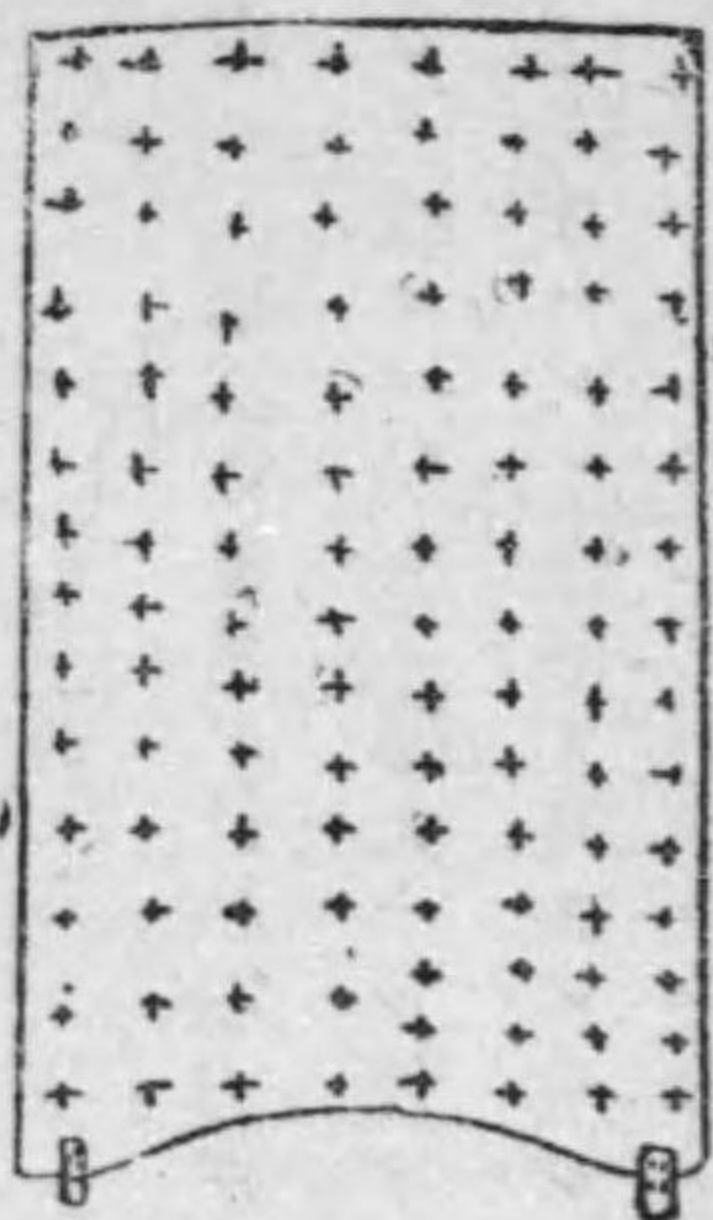
麻綿ハ元來其重量重ク且粘着力ニ乏シク碁盤刺ノ目ハ廣キヲ以テ漸次下方ニ離散移動シテ或ル一局部ニ厚大ナル塊ヲ生ス之カ爲一部ニ空虚ナル場所ヲ生シ撃突ニ對スル抵抗力ナク其効用ヲ失フニ至ルノミナラス又重量ノ不平均ヨリ生スル摩擦ノ關係上容易ニ破損スルニ至ルモノナリ

圖八十第





圖九十第

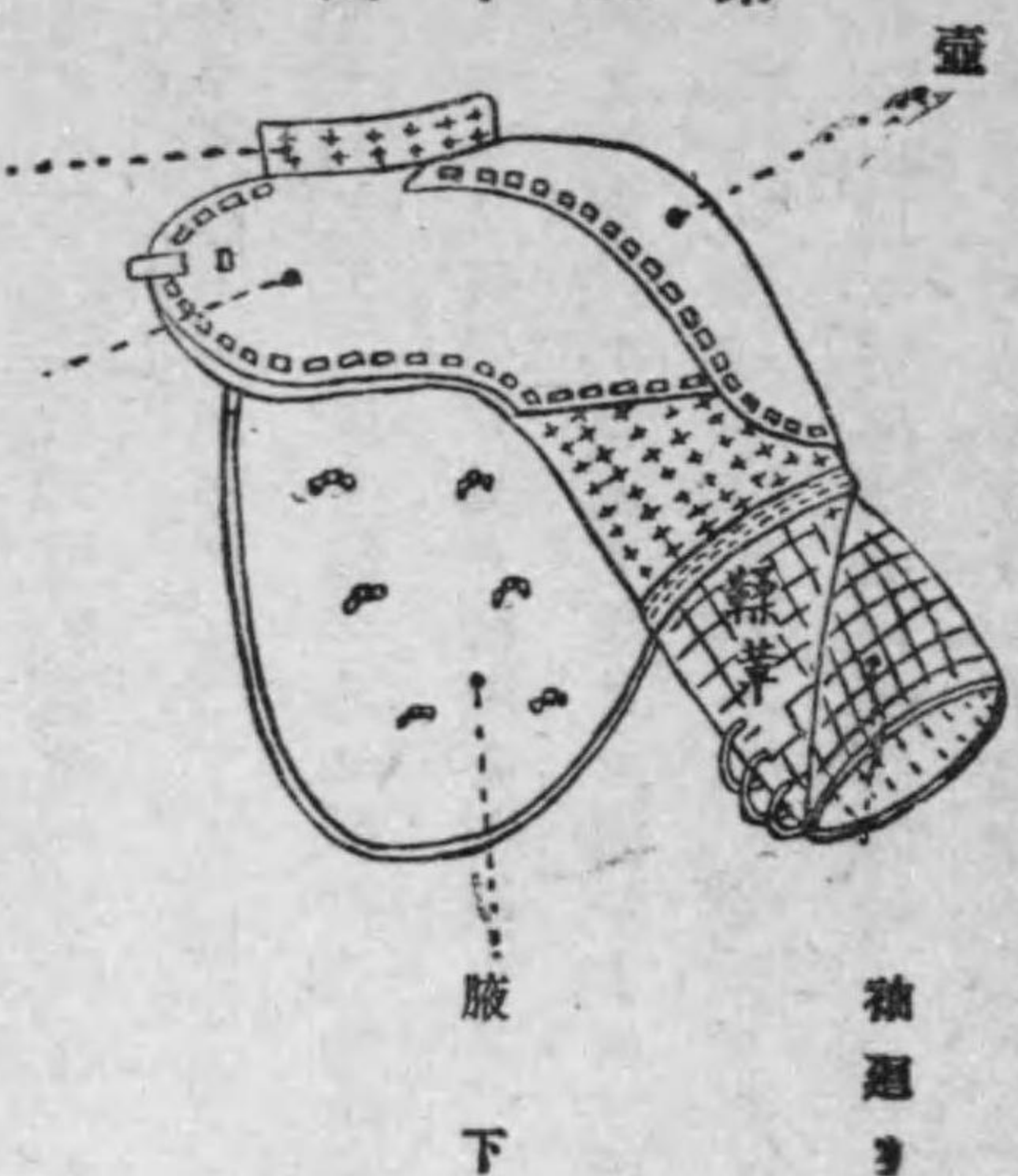


碁盤刺ニ用フル糸ハ一般ニ弱ク刺方モ亦粗雜ナルアリ注意ヲ要ス此外木綿ノ良否各部縫着ノ確否特ニ注意ヲ要ス而シテ内容品ノ良否ハ手障リ或ハ一部ヲ切開シテ検査スルニアラサレハ判別困難ナリ

第五肩

肩ハ絶對ニ肩部ニ適合スルヲ要ス其不具合ナルモノハ主トシテ腋下ノ附着法不可ナルニ依ルモノ多シ  
一、肩ノ上部ノ革質 肩上部ノ硬革ハ牛ノ生革ニシテ壺、大羽根(前羽根、控革)等ノ名稱アリ厚クシテ堅牢ナルヲ要ス近時牛ノ生革ニハ適當ノ厚サヲ有スルモノヲ得難キヲ以テ水牛ノ生革ヲ使用シタルモノアリ水牛ノ生革ハ既ニ述ヘタルカ如ク其質堅固ナルモ彈力ニ乏シク龜裂ヲ生シ易シ

圖十二第



前羽根 大羽根或ハ控革トモ云フ

壺ハ水牛或ハ牛ノ生革ヲ水ニ濕シ型ニヨリテ形狀ヲ與ヘタルモノニシテ控革ハ槌ニテ鍛ヘ形狀僅ニ凸形ヲナスヲ可トス壺及控革ノ形狀不良ナルトキハ多クハ肩ノ不具合トナルヲ以テ検査ニ當リテハ特ニ其狀形ニ注意スルヲ要ス而シテ之ヲ塗リタル漆



ハ既ニ述ヘタル如ク一回ノ塗布ニテ光輝ヲ發スルハ不可ナリ斯ノ如キハ花漆トテ存  
保上最モ不良ナルモノヲ使用シタルモノナリ數回ノ塗布ニテ奥床敷光澤アルヲ可ト  
ス又漆ノ濃厚ナルモノハ龜裂ヲ生シ易ク斑アルモノモ亦不可ナリ

二、腋下

腋下ハ牛ノ鞣革ヲ用ヒ裏面ニ雲齊或ハ立刺ヲ用ヒテ中ニ鹿毛或ハ鹿毛ト馬毛トノ混  
毛ヲ充填シタルモノ(第二十二圖參照)ニシテ一重ニ製シタルモノト二重ニ製シタル  
モノトアリ二重ニ製シタルモノハ危險豫防上多少ノ効力アレトモ痛ミヲ感スルコト  
大ニシテ破損シ易ク修理亦困難ナリ

腋下ハ著シク刺突ヲ受クル部分ナルヲ以テ牛ノ鞣革ヲ用フルヲ可トス而シテ特ニ其  
製作法ニ注意スルヲ要ス牛ノ鞣革ニ代フルニ馬ノ鞣革ヲ用ヒタルモノアレトモ牛ノ  
鞣革ニ比シ價格廉ナルモ其質粗惡ニシテ堅牢ナラス從ツテ其保存不良ナリ  
牛ノ鞣革ト馬ノ鞣革トノ比較ヲ舉クレハ左ノ如シ

牛 鞣 革

1 其質良好ナルモ表面ニ微細ナル

皺アリテ比較的粗ナルカ如シ

2 裏面密ナリ

3 強シ

4 價高シ

馬 鞣 革

1 表面滑澤ニシテ比較的密ナリ然レ

トモ其質堅牢ナラス

2 裏面粗ナリ

3 弱シ

4 價安シ

牛ノ鞣革ト雖表面粗ニ過キ皺ノ大ナルハ良シカラス又一枚ノ革ニテ厚薄不平均ナル  
ハ可ナラス斯ノ如キハ多クハ薄キ部分ヲ後ニ廻シテ使用シアリ

牛ノ鞣革ニモ其種類多ク内地産ノ牛革及朝鮮産ノ牛革ヲ第一トスレトモ此等良好ナ  
ル牛革ハ多クハ靴鞆等ヲ造ルニ用ヒ防具製作ニ使用スルハ上海、廣東、蒙古、印度地  
方ニ産スル牛鞣革ナリ此等ノ牛鞣革ハ品質粗惡ニシテ保存上前者ニ劣ルコト遠シ又  
近時工業ノ進歩發達セル結果機械ノ力ニヨリテ一枚ノ革ヲ數枚ニ剝ギ表面ノ革ハ靴

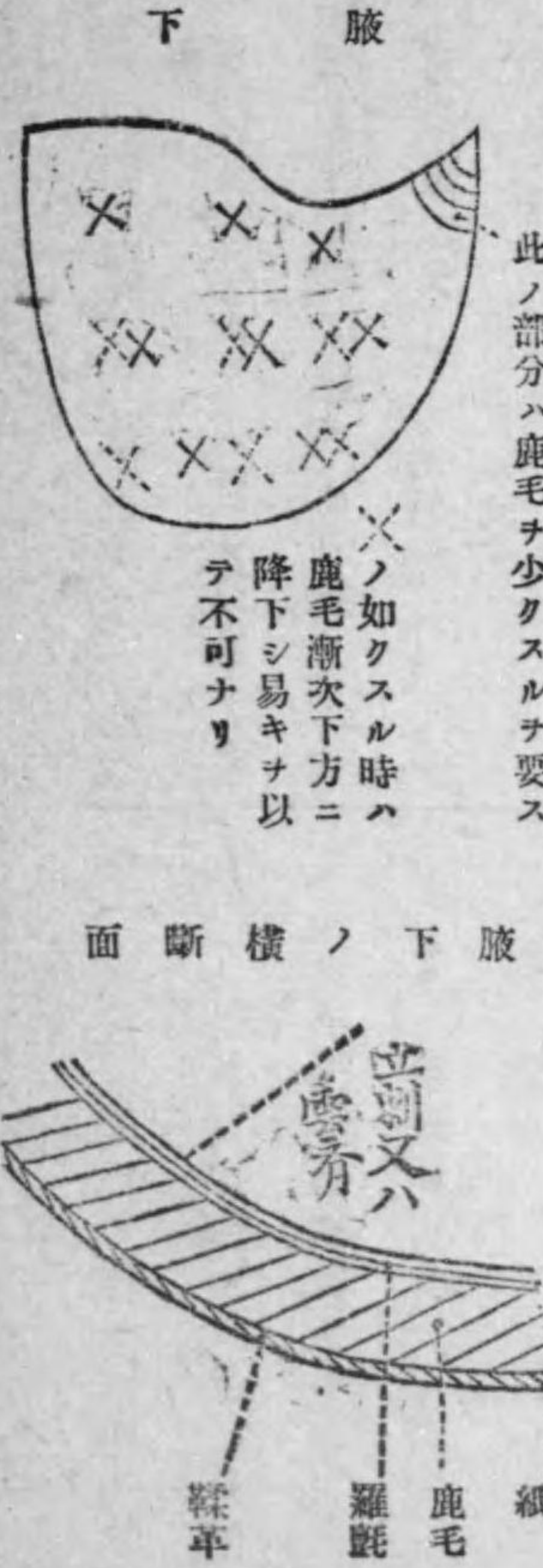


或ハ靴等ヲ造ルニ用ヒ第二第三層ノ革ハ化學作用ニヨリテ表皮ヲ造リ防具或ハ他ノ商品等ヲ作ルニ用フルコトアリ  
 漆ハ腋下ニ用フル革ヲ裁斷スル以前ニ於テ一回塗布シ製作後更ニ塗布スルモノトヌ  
 漆ノ濃厚ナルハ前述ノ如ク龜裂ヲ生シ易シ  
 腋下ノ裏面ニ用フル材料ハ立刺ヲ可トシ雲齊ハ保存良好ナラス

圖一十二第



圖二十二第



鹿毛ハ薄茶色ヲ帶フヲ可トシ白色ヲ帶フハ腹部ノ毛ニシテ良好ナラス故ニ白毛ヲ混スルハ不良ノ鹿毛カ或ハ混毛ナリ  
 鹿毛ノ外山羊、馬毛、牛毛等ヲ使用スルモノアルモ皆不良ナリ又鹿毛ト犬毛或ハ牛毛又ハ野羊ノ毛等ヲ混同セシモノアリ甚シキニ至リテハ豚ノ毛ヲ用ヒ其上ヲ綿ニテ被ヒタルモノアリ

三袖廻リ

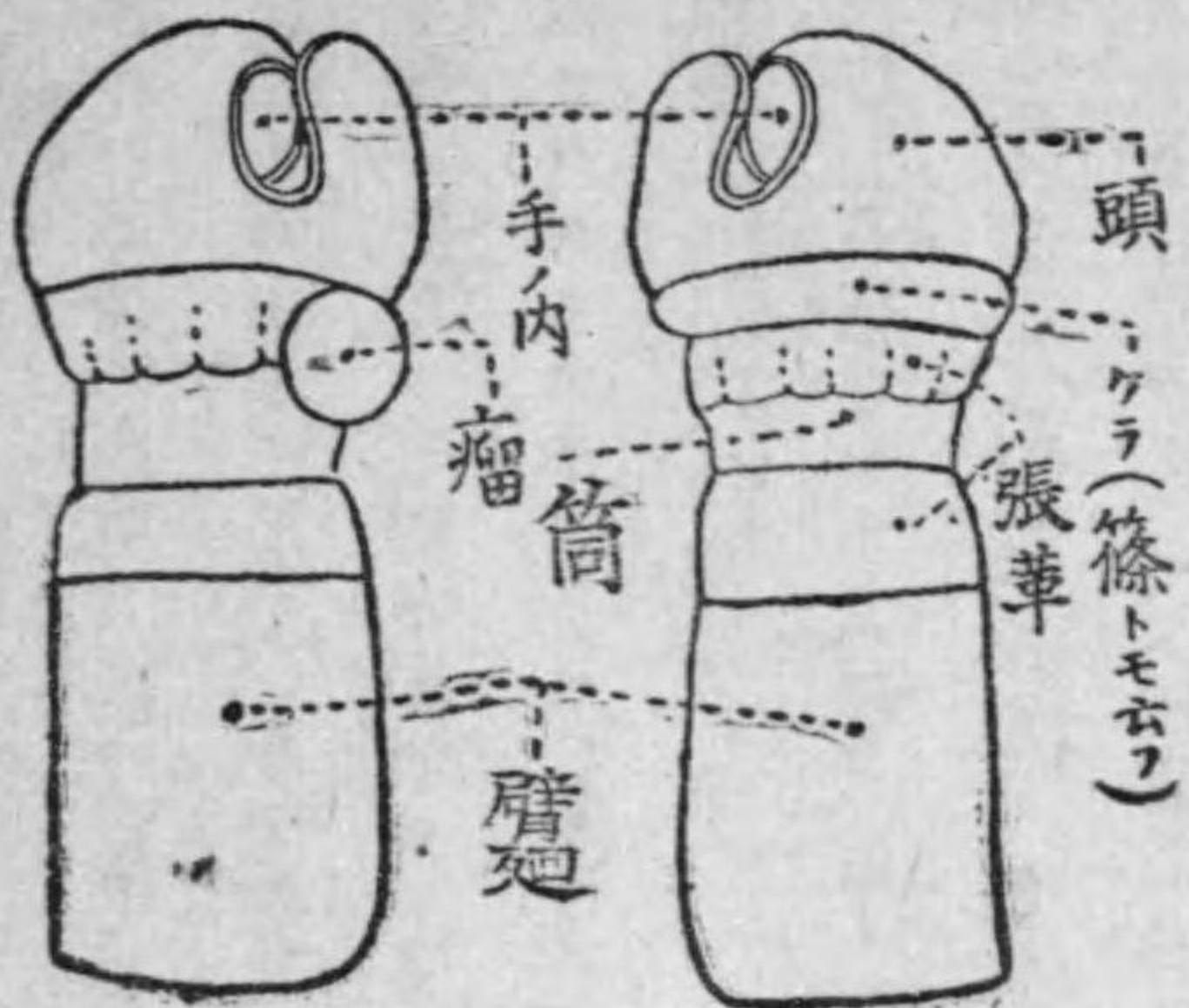
内容品ハ綿ニシテ表面ヲ紺木綿裏面ヲ淺黄木綿ヲ以テ被ヒ其盤刺トナシタルモノナリ不良品ニハ内容品ニ麻綿ヲ用ヒタルモノ或ハ紺木綿ヲ藥品染トナシタルモノアリ注意ヲ要ス又検査ニ方リテハ肩トノ縫着確實ナルヤ否ヤニ注意スルヲ要ス  
 袖廻リノ綴紐ハ袖廻リノ装着ヲ安定ニシ被覆ヲ確實ナラシムルモノニシテ圓打紐ヲ用フ其原料ハ木綿糸ナリ特ニ染方ニ注意スルヲ要ス



壺及控草ノ下部ニ當ル軟部ハ毛布、毛氈、或ハ羅紗羅氈等ヲ數枚重ネ之ヲ五ノ目ニ荒ク刺シタルモノニシテ裏面ニハ淺黃木綿ヲ用フ

第六 甲手

圖三十二第



一、甲手頭(手ノ内、ケラ)

甲手ノ頭、手ノ内、並ニ「ケラ」ハ通常鹿ノ鞣革ニテ製スルモ兩手軍刀術專用ノ甲手頭ニハ刺地ヲ用ヒタルモノアリ刺地ニテ製シタルモノハ使用上障害ナキノミナテ價格モ亦廉ナルノ利アレトモ其保存ハ鹿ノ鞣革ニテ製シタルモノニ比シ稍々劣ルノ不利アリ鹿ノ鞣革ニモ亦白色ノモノ紺色或ハ藍色アリ又燻ベタルモノアリ紺革、藍革、燻革ハ白色ノ鹿革ニ比

シ價高キモ保存良好ナリ

鹿革ニハ大唐、中唐、小唐三種アリテ各々其保存ニ長短アリ

大唐……………下……………大鹿(生來)

中唐……………中……………中鹿(右同)

小唐……………上……………小鹿(右同)

鹿革ノ鑑定法

之カ鑑定法ノ最モ簡單ナルモノハ革面緻密ノ度伸縮ノ多少ニ依ルヲ可トス

1、小唐ハ革面最モ緻密ニシテ伸縮少ク爲メニ縫工困難ナリ又修理ノ際針ノ貫徹殆ント不可能ナルヲ以テ多クハ甲等ニ用フルコトナシ

2、中唐ハ前者ニ比シ革面稍緻密ナラス伸縮ノ度モ亦比較的大ナリ甲等及指袋等ハ此革ヲ以テ製スルヲ通常トス

3、大唐ハ中唐ニ比シ一層緻密ナラス伸縮ノ度モ亦大ナリ從ツテ品質良好ナラス劣



等品ニハ一枚ノ大唐ヲ數枚ニ剝キテ使用シタルモノアリ注意ヲ要ス

甲手頭ニ刺地ヲ用ヒタルモノハ比較的破損シ易キ部分即チ鏝ニ接觸スル部分各指頭等ニ鹿鞣革ヲ縫着スルヲ可トス

甲手頭ノ裏面ニハ厚織木綿ヲ用フルヲ通常トス天鷲絨ヲ用ヒタルモノアレトモ汗ノ乾燥遅ク保存上良好ナラス然レトモ使用上ニ於テハ厚織木綿ニ比シ良好ナリ

甲手頭ノ内容品ニハ鹿毛ヲ用フ往々鹿毛ナキ地方或ハ修理ノ爲メ綿ヲ使用シタルモノアレトモ保存上及使用上共ニ良好ナラス

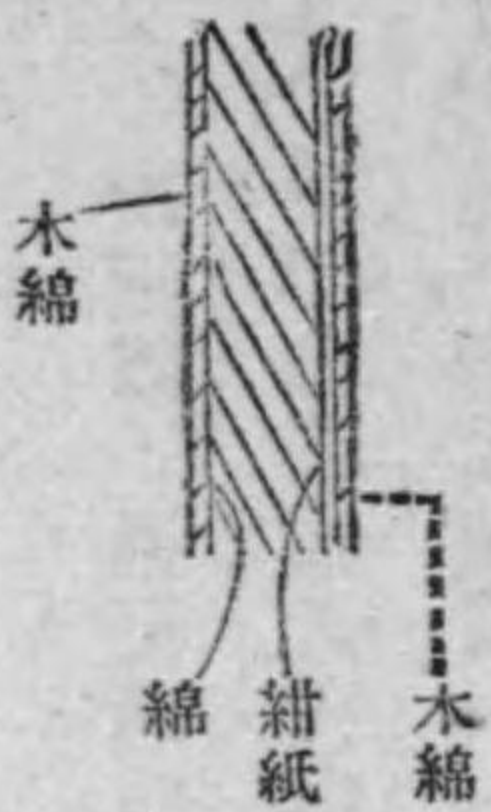
「ケラ」(篠)ハ手ノ甲ヲ防護シ且指ノ屈伸ヲ自在ナラシムルモノニシテ其構造甲手頭ト同一ナリ

### 二、筒

外部ハ通常紺木綿ヲ用ヒ保存上張革ヲ以テ之ヲ被フ而シテ張革ハ鹿鞣革ニシテ内容品ハ鹿毛ヲ用フ劣等品ニハ張革ニ牛ノ鞣革ヲ用ヒタルモノアリ

### 三、臂廻

其構造面蒲團ニ同シキモ劣等品ニハ左圖ノ如ク綿ノミヲ入レ木綿ノ光澤ヲ保タシム



ル爲メ其下ニ紺紙ヲ入レテ之ヲ基盤目ニ刺シタルモノアリ  
張革ニハ鹿ノ鞣革ヲ用フ又軍刀術用甲手ニハ廻臂ノ縁ヲ五ノ目ニ刺シタルモノアリ

### 四、瘤

瘤ニハ外部ヨリ縫着セシモノ内部ヨリ縫着セシモノ及張革ト瘤革ト連絡セルモノ等アリ何レモ鹿鞣革ヲ用ヒ其内容品ハ鹿毛ナリ此部ハ手ヲ防護スルニ最モ肝要ニシテ比較的打撃ヲ受ケ易キ部分ナルヲ以テ鹿毛ハ十分ニ充填シアルヲ要ス

、綴紐

甲手装着ニ於ケル安定ト被覆ヲ確實ナラシムルモノニシテ其綴方ハ左圖ノ如シ



圖四十二第



六、甲手ノ検査法

- 1、手ヲ入レテ内部ノ具合ヲ検査スル  
コト必要ナリ殊ニ小指ノ方ノ形状  
ニ注意セサレハ装着シテ窮屈ヲ感

シ操作容易ナラサルノミナラス破綻ヲ來シ易シ

圖五廿第

小指ノ方ノ形チ

一 其



可 二 其

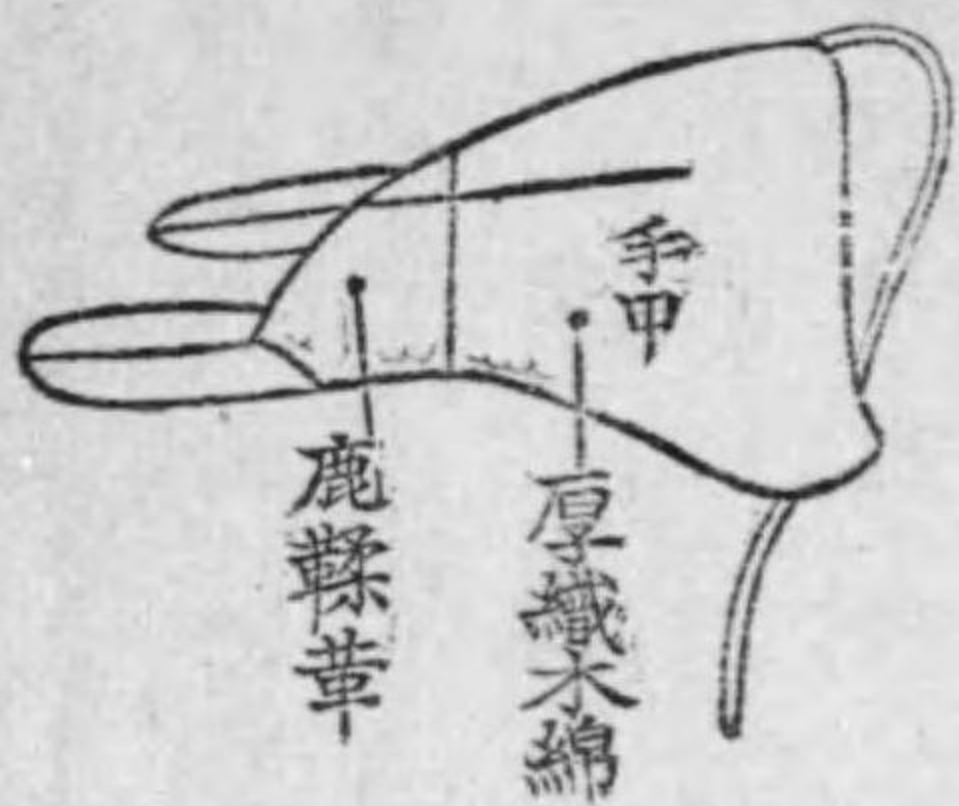


不可

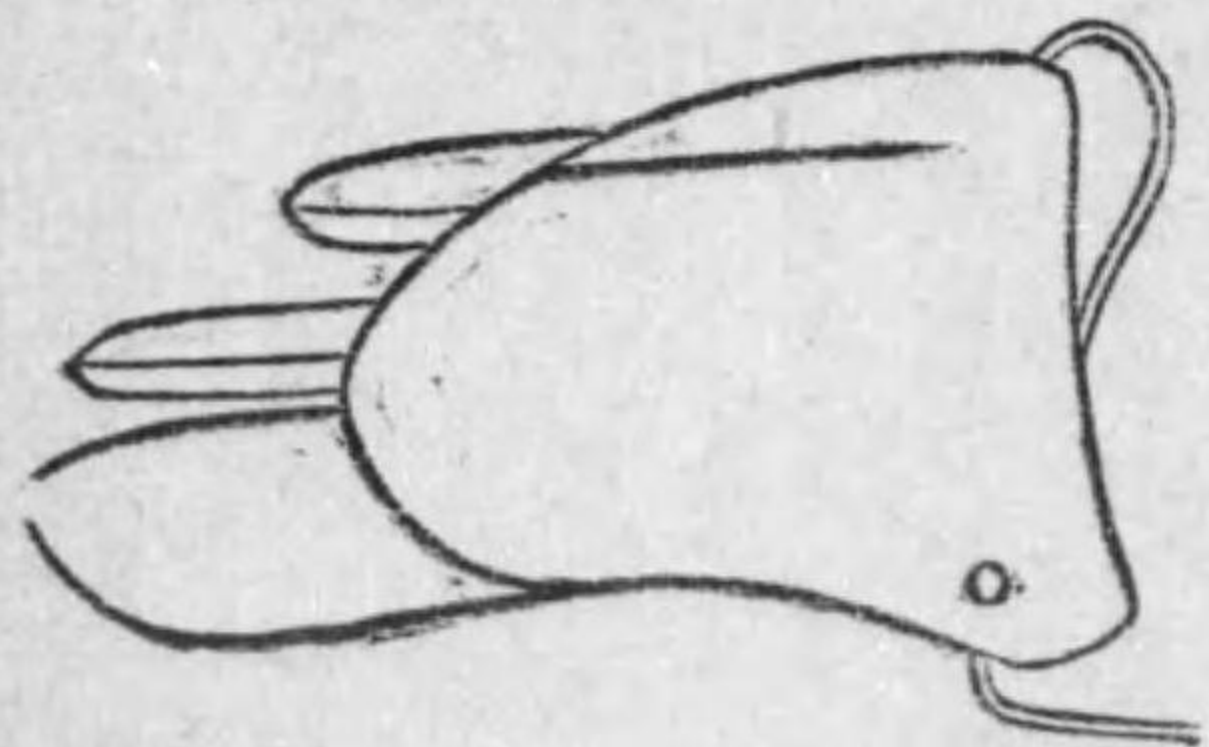
- 2、拇指部ノ過長過短ハ共ニ不可ナリ
- 3、甲手頭及瘤ノ内容品ハ十分ニ充填シアルヲ要ス
- 4、筒ハ縫着確實ニシテ柔軟ナルヲ要ス殊ニ其ノ張革ニ牛或ハ馬ノ鞣革ヲ用ヒタル  
モノアルヲ以テ注意ヲ要ス
- 5、瘤及手ノ内革ノ縫目ハ綻ヒ易キヲ以テ注意スルヲ要ス

圖六十二第

ノモシセ作製ク如フ掩ヲ指拇指食



ノモシセ作製ク如フ掩ヲ部全指



第七 指袋

- 6、手ノ内革ハ厚サ一様ナルヲ要ス日光ニ透視スルトキハ其判別容易ナリ
- 7、綴紐ノ原料、染方、綴方、及端末ノ止メ方ニ注意スルヲ要ス鹿革ハ劣等品ニ  
ナルニ從ヒ「シミ」或ハ鏽傷等多ク其傷所ハ紙ノ如ク薄ク上等品ニハ此等ノ傷ヲ  
除キ使用スレトモ劣等品ニハ其儘使用シ或ハ其内部ニ他ノ鹿革ヲ張り付ケテ使  
用シタル者アリ且價格低廉ナル鹿革ハ伸ヒ易キ爲メ甲手ノ形状變化シ易ク加之  
其伸ヒタル部分ハ著シク厚サヲ減スルタメ破損ヲ速カナラシム

指袋ハ通常鹿ノ鞣革ヲ以テ  
製ス指ヲ防護スルモノニシ  
テ拇指及食指ヲ掩フ如ク製  
作スルヲ通常トスレトモ指  
全部ヲ掩フ如ク製作セシモ  
ノアリ又手甲以下ヲ厚織木  
綿ヲ以テ製作セシモノト全



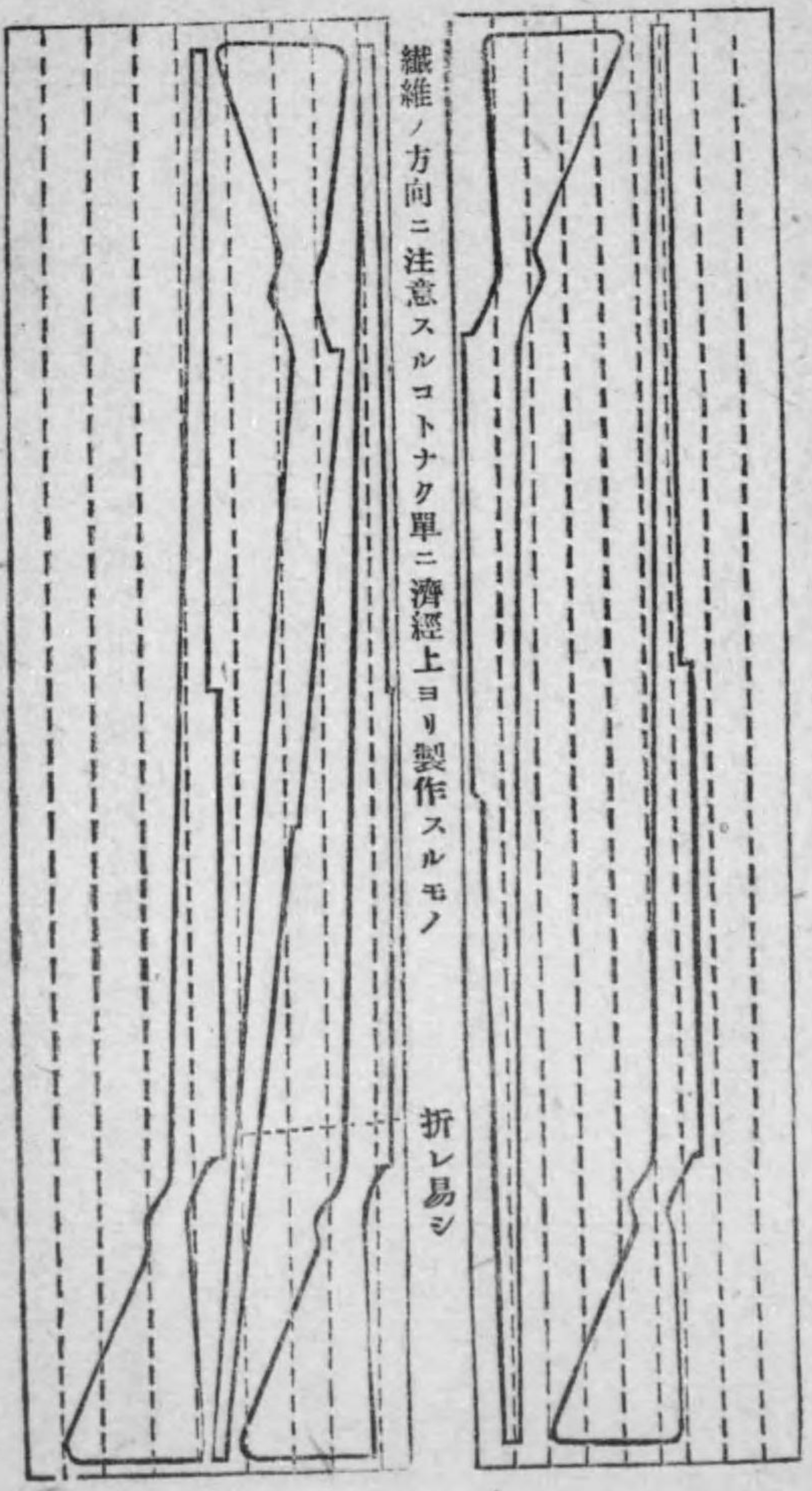
部ヲ刺地ニテ製シタルモノトアリ前者ハ使用上障害ナク價格亦廉ナル人利アレトモ後  
者ハ廉價ナルモ刺突ノ際右手滑走スル患アリ何レモ拇指ト食指トノ間ノ構造ニ注意  
スルヲ要ス

第八 木銃

一、材料

木銃ハ樫材ヲ以テ製ス樫ニハ櫓樫(赤樫)白樫ノ別アリ何レモ其老樹ノ材ニテ製シタ  
ルモノハ折損又ハ彎曲スルコト少キモ若木ノ材ニテ製スルトキハ外觀美ナルモ折損  
又ハ彎曲シ易シ又樹木ノ纖維ノ方向ニ注意セサルトキハ折損シ易ク乾燥十分ナラザ  
ルトキハ彎曲シテ使用ニ堪ヘサルニ至ルモノトス  
木銃ハ老樹ニテ十分ニ乾燥シ且ツ樹木ノ纖維ノ方向ニ注意スルノ外板ノ厚サ削リ方  
及形狀等ニ注意スヘシ動モスレハ銃把ノ方向ニ所要ノ傾度ヲ有セシメスシテ殆ント  
直線ニ近キ形狀ヲ保タシメ以テ板ヲ節約シテ價格ヲ安値ナラシムル如ク製作スルモ

第七十二 第



ノアリ甚シキニ至リテハ直線ニ近ク削リ之ヲ矯メテ所要ノ傾度ヲ與ヘタルモノアリ  
其他埋木セルモノ節アルモノアリ共ニ注意ヲ要ス  
纖維ノ方向ニ注意シテ製作スルモノ(點線ハ樹木ノ纖維ヲ示ス)



老木ト若木トノ鑑定法

此鑑定ハ既ニ木銃ニ製作セシ上ハ判別極メテ困難ナルモノナルモ左ニ其標準ヲ示シテ參考ニ資セントス

老木及若木ハ其纖維ノ粗密ニヨリテ判断スヘシ即チ老木ハ一般ニ纖維明瞭ニシテ充分ニ削リ上ケタル後ト雖纖維粗ナルカ如ク其凹凸判然現ハル、ヲ常トス若木ハ之ニ反シ一般ニ纖維緻密ニシテ充分削リタルトキハ老木ニ比シ光澤ヲ有シ美ニシテ且ツ滑ナリ

木銃ノ製作法

檜板ヲ木銃ノ粗形ニ截チ之レヲ蒸汽竈ニヨリテ約四時間蒸シテ「アク」(木澁)ヲ去リ以テ重量ノ輕減ト保存及使用上彎曲又ハ折損ノ患ヲ少クシ此作業間彎曲又ハ龜裂ヲ生シタルモノハ廢品トナシ眞直ナルモノノミヲ選定シテ荒削ヲナシ更ニ水分ヲ除去スルタメ約四ヶ月乃至六ヶ月間蔭干シテ乾燥ス此間彎曲又ハ龜裂ヲ生シタ

ルモノハ又廢品トナシ更ニ眞直ナルモノノミヲ選ミ仕上作業ニ移リ精削スルモノトス

二、木目ニ就テ

圖八十二第



可右上左下ニ板目カ出ル  
可上下ニ板目カ出ル  
不可兩側面ニ板目カ出ル



板目トナル

床尾飯ノ方ヨリ見テ



及



ハ可ナルモ



ハ不可ナリ

即チ柁目カ左上方及右下方ニ在ルモノヲ最良トス

元來木銃ハ其全般カ堅固ナルヲ要スルモ下帶ヨリ上方ハ特ニ堅固ナラサルヘカラス而シテ尤モ多ク打撃スル部位ハ右下方及左上方ノ兩面ニシテ之ニ次クハ側面ナリ然



ルニ此等ノ部位ニ板目アルトキハ板ノ性質上折損シ易シ故ニ此等ノ部位ニハ板目ノ位置スル如ク製作スルヲ要ス此ノ如キ注意ヲ以テ製作シタル木銃ハ板目カ右上方及左下方或ハ上方及下方ニ出ツルモノトス

板目カ前述ノ如ク右上方及左下方或ハ上方及下方ニアルモノハ銃把附近ニ於テモ同位置ニ出ツルヲ通常トス然ルトキハ木銃ノ構造上上圖ニ點線ヲ以テ示スカ如ク銃把及其附近折損シ易キ患アルモ此ノ如キ事ハ例外ニシテ木銃ノ取扱ヲ亂暴ニシ床尾鉸ヲ強ク地ニ撞着スルカ或ハ強ク落スカ如キ時ニアラサレハ此等ノ事ナカ

ルヘシ故ニ木銃選定ニ當リテハ此兩方面ニ注意スルハ勿論特ニ下帶ヨリ上方ニ注意シ木目通りタル木銃ヲ選フヲ要ス



圖九廿第



三、調子及重量

調子ハ各々人ニ依リテ異ナレトモ著シク輕カラサルヲ要ス近時勝負ヲ爭フ結果細身ニテ著シク輕キ木銃ヲ使用スルノ傾向アルハ大ニ忌ムヘキ事ナリトス蓋シ實際ニ遠カルコト甚シケレハナリ要スルニ重量四百匁内外ニシテ重心ノ位置ハ兩手ノ中央附近ニアルヲ適當トス

四、木銃尖端ノ形狀




圖十三第

木銃ノ尖端ハ護謨ノ内面ト適當ニ吻合スルヲ要ス尙適當ニ吻合スル場合ニ於テモ木銃ノ尖端ハ圓削シ置クコト必要ナリ之レ衝突ノ際護謨ノ内面ト木銃ノ尖端トノ撞着ニ依ツテ生スル内部ノ磨滅ヲ防カンカ爲メナリ

五、鐵環ノ着方

鐵環ハ護謨ノ保存ヲ良好ニセンカ爲メニ附着スルモノナレハ努メテ堅確ニ附着スルヲ要ス之カ爲メ通常ニケ所或ハ三ケ所ヲ釘着ス

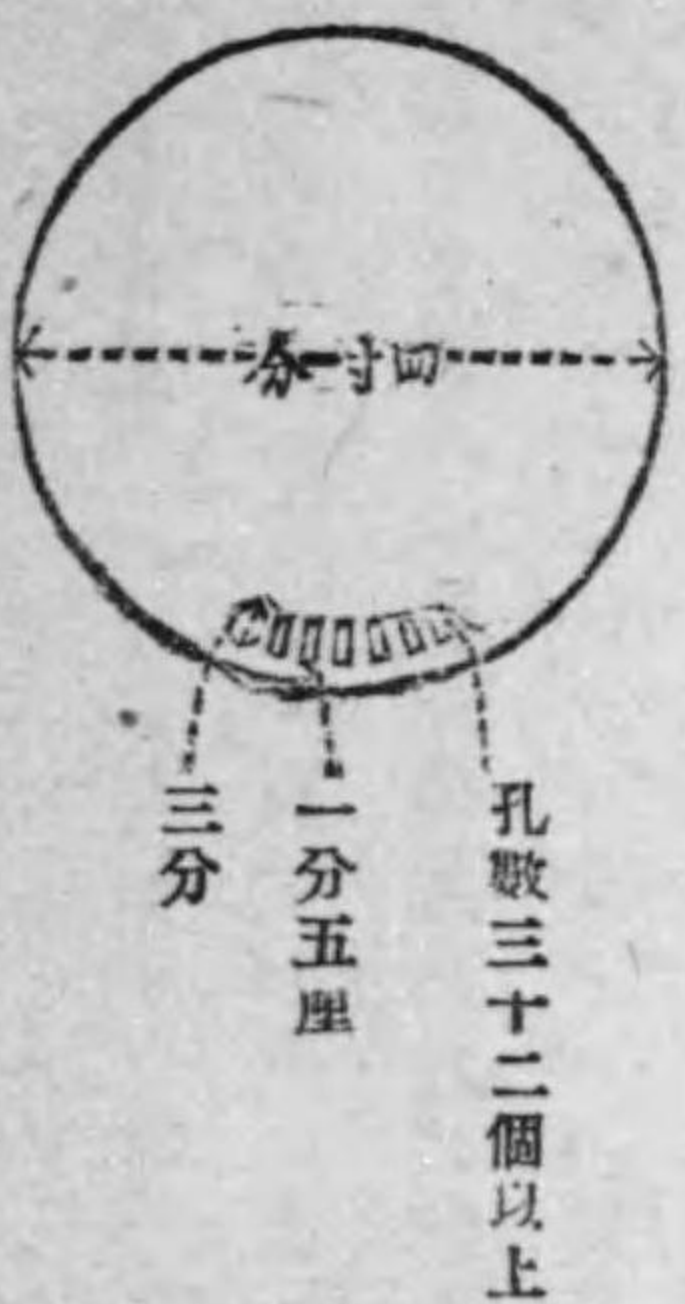


鐵鑲動搖スル時ハ鐵鑲ノ附着部ハ  ノ如ク變形シ使用ニ際シ此部分折損シ危険ヲ生スルコトアリ

六、毬毛

毬毛ハ鞣革ヲ外被トシ内ニ護謨ヲ用フルモノトス昔時組麻又ハ生革ヲ外被トシ内ニ鹿毛或ハ古綿等ヲ填實シタルモノアリシモ此等ハ前者ニ比シ衝突力烈シク防具ノ保存ニ影響スルノミナラス身體局部ニ感スル苦痛大ニシテ衛生上宜シカラサルノミナラス劍術厭忌ノ念ヲ起サシムルノ害アリ

1、毬毛革



孔數三十二個以上  
一分五厘  
三分  
孔數ハ革ノ厚薄ニヨリテ多少アリ通常厚キトキハ多シ

毬毛革ハ護謨ヲ防護スルモノニシテ牛ノ鞣革ヲ用ヒ一重ニ製シタルモノト二重ニ製シタルモノトアリ其厚サ適當ナルヲ要ス過厚過薄ハ共ニ不可ナリ

圖一十三第

一重ニテ製シタル毬毛革ハ二重ニ製シタルモノニ比シ破損速カナルモ價格廉ニシテ使用上何等ノ障害ナキ利アリ  
二重ニ製シタルモノハ上層ノ革破損スルコトアルモ尙使用シ得ルノ利アレトモ使用中上層ノ革ノ縁端引キ懸リテ却ツテ其縫着部ヨリ破綻シ易キト高價ナルトノ不利アリ  
之ヲ要スルニ最初ヨリ二重製ノ毬毛革ヲ用フルノ必要ナク修理ニ際シ二重ニスルヲ可トセン

毬毛革大小ノ利害

毬毛革ハ適宜ノ中經ヲ有セサルヘカラス若シ大ナルトキハ毬毛ノ堅着ヲ害シ又小ナル時ハ堅着確實ナラス加之直ニ堅着用弦ヲシテ切損シ易カラシム故ニ毬毛革ハ鐵鑲ノ下端ニ於テ緊縮適度ナル如キ中經ヲ有セサルヘカラス毬毛革ノ中經ヲ一分短クスルトキハ若干廉價ナラシムルコトヲ得ト云フ



2、護謨

護謨ハ其質緻密ニシテ十分弾力性ニ富ムヲ要ス護謨ニ他ノ混合物ヲ混和シテ製シタルモノハ其質粗惡ニシテ緻密ナラス又弾力性ニ乏シク從ツテ其効益少ナキミナラス直ニ破損シ易シ

護謨ノ鑑定法

手ヲ以テ壓スカ或ハ板面上ニ抛ケ其弾力ノ強弱ニヨリテ概ネ判斷スルコトヲ得ヘク又實質ヲ引キ裂キ或ハ齒ニテ齧ミ又ハ錐ニテ通シ或ハ爪ニテ搔クトキハ其粘着力ノ強弱弾力ノ大小及其面ノ緻密ノ程度ニヨリテ混合物ノ有無等ヲ概ネ察スルヲ得ヘシ一般ニ良好ナルモノハ弾力ヲ有シ柔軟ナリ之ニ反シ硬固ナルモノハ不良ナル一徵候ナリ

護謨ノ大小ノ利害及應急處置



圖二十三第

一、木銃ノ尖端半球形ヲナササルトキハ護謨ノ内面ト適合セス從ツテ内部ニ間隙ヲ生シ衝突ノ際内面ト尖端ト撞着ノ爲メ直ニ内部

摩擦シ且ツ尖端ノ角ノ爲メ一層護謨ノ破損ヲ速カナラシム

應急處置、斯ノ如キ場合ニアリテハ木銃ノ尖端ヲ敝皮又ハ銃ニテ擦リ角ヲ圓削スル

ヲ要ス

二、護謨ノ内部大ナルカ或ハ木銃ノ尖端小ナルトキハ間隙ノタメ護

謨ノ内面直ニ磨滅シ使用ニ堪ヘ難キニ至ル

圖三十三第



應急處置

斯ノ如キ場合ニアリテハ革ニテ尖端ノ周圍ヲ卷クカ革袋様ノモノヲ作り之ヲ補フカ或ハ護謨ノ内部小ナルモノヲ選ヒ取り換フルヲ要ス

三、護謨ノ内部小ナルカ或ハ木銃ノ尖端大ナルトキハ之カタメ護謨ノ内部ハ木銃ノ尖端ニヨリ絶ヘス壓迫ヲ受クルヲ以テ弾力ヲ失シ或ハ磨滅シ或ハ龜裂ヲ生ス

圖四十三第



應急處置

右ノ場合ニアリテハ木銃ノ尖端ヲ削ルカ或ハ護謨ノ内部大ナルモノヲ選フヘシ



圖五十三第



四、護謨ノ内部深キト木銃ノ尖端短キトキハ内部ノ間隙衝突ノ際内  
面ト尖端撞着ノ爲メ直ニ内部磨滅シ護謨ヲ貫通スルニ至ル

應急處置

此場合ハ木銃ノ尖端ニ所要ノ厚サヲ有スル革ヲ挿入スヘシ然ラサレハ鐵  
環ヲ適當ナル場所ニ移動スヘシ

五、護謨ノ内部淺キト木銃ノ尖端長キトキハ護謨ノ端末鐵環ノ上面

ニ接着セサル爲メ護謨ノ内部ハ絶ヘス衝突ヲ受ケ直ニ護謨ハ尖端

ニヨリテ貫通スルニ至ル

圖六十三第



應急處置

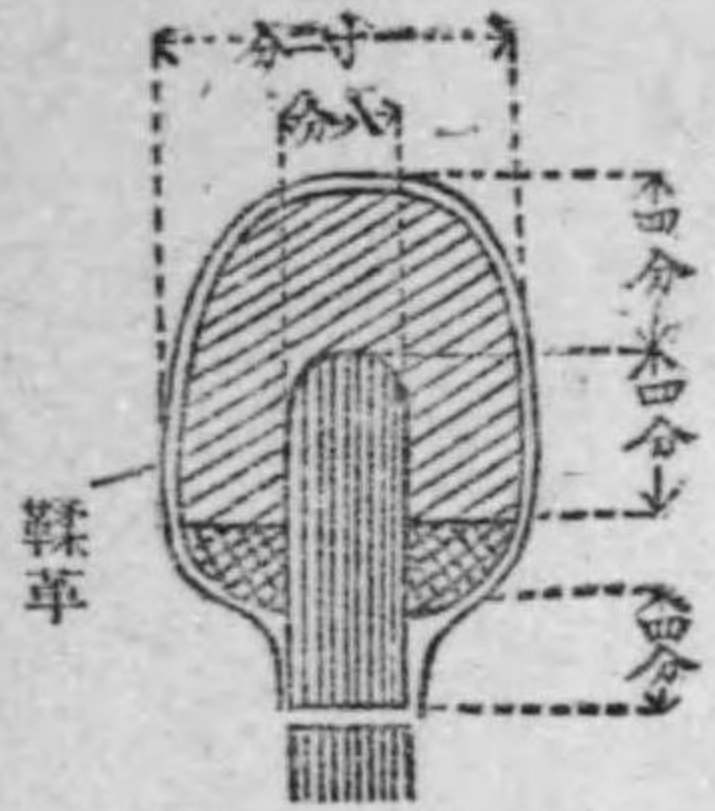
此ノ如キ場合ニアリテハ所要ノ厚サヲ有スル革ニテ製セル環又ハ他ノモ  
ノニテ製セル環ヲ以テ補フカ或ハ鐵環ヲ上方ニ移動スルヲ要ス

護謨ノ内部ト木銃ノ尖端トカ適當ニ吻合スル場合ニ於テモ  
木銃ノ尖端ハ角張ラサル如ク圓削シ置クヲ要ス

護謨ノ内面ニ革ヲ附着スレハ保存良好ナルハ當校教官ノ發

明經驗セシ處ナリ

圖七十三第



3、毬毛ノ着方

毬毛ハ動かカサル如ク十分緊着シアルヲ要ス若シ動クトキハ刺突ノ際護謨ノ内部ハ  
著シク磨滅シ或ハ其形狀ヲ失ヒ或ハ龜裂ヲ生スルニ至ルモノトス又毬毛革ノ革面  
磨滅スルトキハ漸次緊着ノ度ヲ失フニ至ル故ニ時々之ヲ検査シ其緊着ヲ保チ毬毛  
革ハ必要ニ應シ直ニ交換スルヲ要ス

I 充分ニ引キ締メテ  
一重ニ結ブ

2 一重ニ結ヒタル兩端末ヲ  
鐵環ノ下ニアル孔ニ通ス

3 孔ニ通シタル端末ヲ圖ノ如ク反對  
側ノ毬毛革ニ通シタル弦ニ通ス

第三



十四

4 反對側ニテ弦ニ通シタル端末ヲ再ヒ孔ニ通ス  
5 孔ニ通シタル端末ヲ更ニ最初一重ニ結ヒタル部分ノ弦ニ通シ其端末ヲ三度孔ニ通ス  
6 三度孔ニ通シタル端末ヲ各反對方  
向ニ廻シテ卷キ着ク其端末ヲ結ブ

圖八





毬毛ヲ附着スルニ當リ毬毛革ヲ湯水ニ浸ストキハ附着容易ナリト雖水分ノ爲メ革質ヲ變シ破損ヲ速カナラシムルノ慮レアリ故ニ革ノ厚度適當ナルモノヲ選ヒテ附着スルヲ要ス若シ附着困難ナルトキハ革ノ縁端ノミ水分ヲ含マシムレハ革質ヲ著シク變スルコトナク其附着容易ナリ

第九 竹刀

一、材料及構造法ノ概要

竹刀ニハ眞竹ヲ用フ一本ノ竹ヲ所要ノ長サ(三尺九寸、三尺八寸等)ニ切り節ヲ削リ之ヲ六乃至十二ニ割リテ荒削ヲナシ火ニ焙リテ竹ノ油ヲ採ルト同時ニ矯メ木ニ依リテ矯メテ直線狀トナシ日光ニ依リテ乾燥シ本削リニ移ルカ或ハ急ヲ要スルトキハ直ニ本削リニ移リ其四本ヲ組ミ合セタルモノニシテ稀ニ五本ヲ組ミ合セタルモノアリ通常鍔元太ク兩端細キ管狀ニ製スルモノトス其長サハ各流派ニヨリテ一定セサレトモ一般ニ三尺八寸ヲ使用スルモノ多ク劍術教範規定ノ長サモ亦三尺八寸ナリ

竹ノ色合、伐採時期、検査等ハ胴ノ部ニ於テ既ニ述ヘシカ如シト雖竹刀ニ用フル竹ハ特ニ伐採ノ時期適當ナラサレハ保存良好ナラス又若竹ニテ造リタル竹刀ハ折レ或ハ割レ易ク且ツ腰弱シ故ニ三四年生ノ竹ニテ造ルヲ可トス

二、竹刀ノ選擇法

竹刀ハ各々人ニ依リテ太サ、重量、調子、格好等ヲ異ニスルヲ以テ次ニ示ス諸件ヲ顧慮シ各自ノ意圖ニ合シタルモノヲ選定スルヲ要ス竹刀ノ良否ハ劍術ノ進歩ニ大ナル影響ヲ與フルモノトス

1、竹質

竹質ノ良否ハ竹刀ノ保存ニ大ナル關係ヲ有スルヲ以テ十分ノ注意ヲ拂ハサルヘカラス之ヲ検査スルニハ竹刀兩端ノ切り口ヲ見テ其纖維ノ粗密ニヨリ概ネ判斷スルコトヲ得ルモ尙表皮ト眞皮トノ境界及竹ノ色合等ニ注意スルトキハ一層確實ナリトス即チ眞皮ト表皮トノ境界ニ於テ纖維緻密ニシテ其色濃厚ナル飴色ヲ呈スル者



ハ一般ニ良好ナリ然レトモ往々竹ノ内側ノ蒸レシモノアリ斯ノ如キモノハ折損速  
カナルヲ以テ特ニ注意スルヲ要ス

此ノ部分ニ薄黒ノ線アリ



竹片ノ断面ニシテ蒸レシモノヲ圖示セリ

圖九十三第

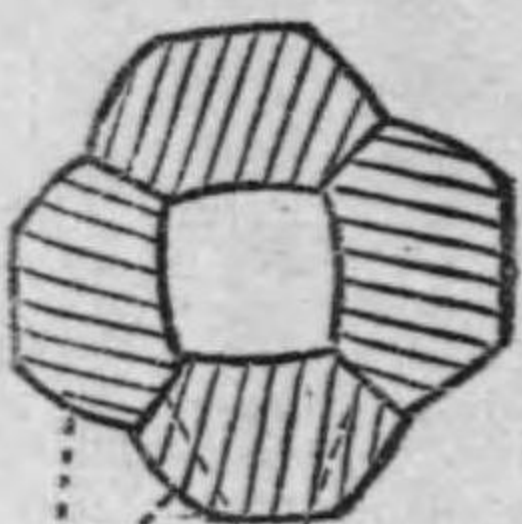
2、削リ方及矯メ方

削リ方ハ竹刀師ニヨリテ各一長一短アリ特ニ矯メ方ニハ著シキ優劣アリテ保存上  
大ナル關係ヲ有ス即チ矯メ方良好ナルモノハ竹ノ自然ヲ害セサルヲ以テ使用スル  
ニ從ヒ益々堅實トナリ比較的破損セサルモ矯メ方不良ノ者ハ使用スルニ從ヒ矯メ  
返リテ彎曲シ或ハ竹片ト竹片トノ間ニ間隙ヲ生シ使用スルニ嫌忌ノ念ヲ生シ遂ニ  
使用久シカラスシテ放棄シ或ハ破損スルニ至ルモノナリ又削リ方不良ノ者モ前述  
ノ害ヲ生シ且ツ使用中竹片中ニ入りテ舊形ニ復セス爲メニ破損ヲ速カナラシム一  
般ニ合セ目深ク切り込ミ淺キモノハ概ネ良好ナリ

3、調子

圖十四第

竹刀ノ断面



合セ目

切り込ミ

調子ハ各々人ニ依リテ異ナルモノニシテ先  
キノ重キヲ好ムモノ輕キヲ好ムモノ或ハ裏  
ノ重キヲ好ムモノ表ノ重キヲ好ムモノ等種々アリテ断定シ難キモ表裏重キヲ異ニ  
スルモノハ例ヘ他ノ部分良好ナルモ避クルヲ可トス一般ニ重心カ鑄元ヨリ五六寸  
上方ノ所ニアルモノハ概ネ良好ナリ

4、重量

重量モ亦人ニ依ツテ異ナルモノニシテ重カラス輕カラス各自ノ腕力ニヨリ適當ノ  
モノヲ選定スルヲ要ス稽古ノ時ハ重キヲ可トシ試合ニハ輕キ竹刀ヲ用フルヲ可ト  
スト云フカ如キハ最モ不可ナリ常ニ自己ノ腕力ニ相當シタルモノヲ使用スルヲ可  
トス近頃一般ニ輕キ竹刀ヲ好ムノ傾向アルモ斯ノ如キ竹刀ハ肉薄ク然ラサルモノ  
ハ竹質粗ニシテ宜シカラス過重ニ失スルモ亦不可ナリ百五十匁内外ヲ適當トス



### 5、形状

形状モ亦人ニヨリテ各々好キ嫌ヒアルモ鏑元ノ太サヨリ切尖ノ太サ大ナルトキハ刀尖ノ重量ヲ増シ又鏑元ノ上方三四寸ノ附近著シク大ナルモノハ手元ノ重量ヲ増スヲ以テ良シカラス要ハ各部ノ釣合ヒ適當ナルヲ要ス各部ノ釣合適當ナルモノハ調子モ亦多クハ良好ナリ

### 6、肉厚

肉過厚ナル竹ハ重量過大ニシテ肉厚キモ輕キハ竹質粗惡ナリ又肉薄キ竹ハ折レ又ハ割レ易ク竹刀ノ腰薄弱ナリ故ニ以上ノ事ヲ顧慮シ厚度適當ナルモノヲ選フヘシ

### 7、腰ノ強弱

腰ノ強弱ハ使術ニ關係スルヲ以テ十分ニ吟味セサルヘカラス腰ハ須ラク強キヲ要ス腰弱キ時ハ斬撃刺突共ニ十分ナラサルノミナラス敵ノ體ヲ捏ネルカ如キ動作ヲナスコト不可能ニシテ意外ノ不覺ヲ取ルコトアリ尙柄ノ強弱ニモ注意スルヲ要ス

以上ノ外矯メ方拙ナキ爲メ矯メ折レ、矯メ割レ等アルヲ以テ竹表面ノミナラス裏面ニモ亦意ヲ注キ検査スルヲ要ス後家竹ハ止ムヲ得サレトモ著シク節間ノ差アルモノ及厚サ不同ナルモノハ良シカラス

### 三、竹刀ノ乾燥法

製作後二ヶ月以上ヲ經過シタル後使用スルコトヲ得之ヲ乾燥セシムルニハ蔭乾ヲ最モ可トスルモ乾燥ニ長時日ヲ要スルヲ以テ直接日光ニ照シテ乾燥スルヲ可トス暖爐等ニ直接ニ焙リテ乾燥スルトキハ火熱ノタメ竹ニ龜裂ヲ生シ易ク竹質ヲ害スルヲ以テ大ニ戒メサルヘカラス

### 四、尖革

尖革ハ牛ノ鞣革ニテ製スルヲ可トス生革ニテ製シタルモノアレトモ竹刀ノ尖端ニ不適合ニシテ外傷ノ原因ヲナスノミナラス防具ヲ傷クルノ恐アリ其種類ニハ一重ニ製シタルモノト二重ニ製シタルモノトアリ一重尖革ハ二重尖革ニ比シ價安ク使用亦容



易ナルモ二重尖革ヨリ破損速カナリ二重尖革ハ一重尖革ヨリ高價ナルモ破損遅ク上層ノ革破損スルコトアルモ尙使用シ得ルノ利アリ然レトモ竹刀ノ調子ヲ變シ易ク重苦シキ感アリ

圖一十四第



一重尖革



二重尖革

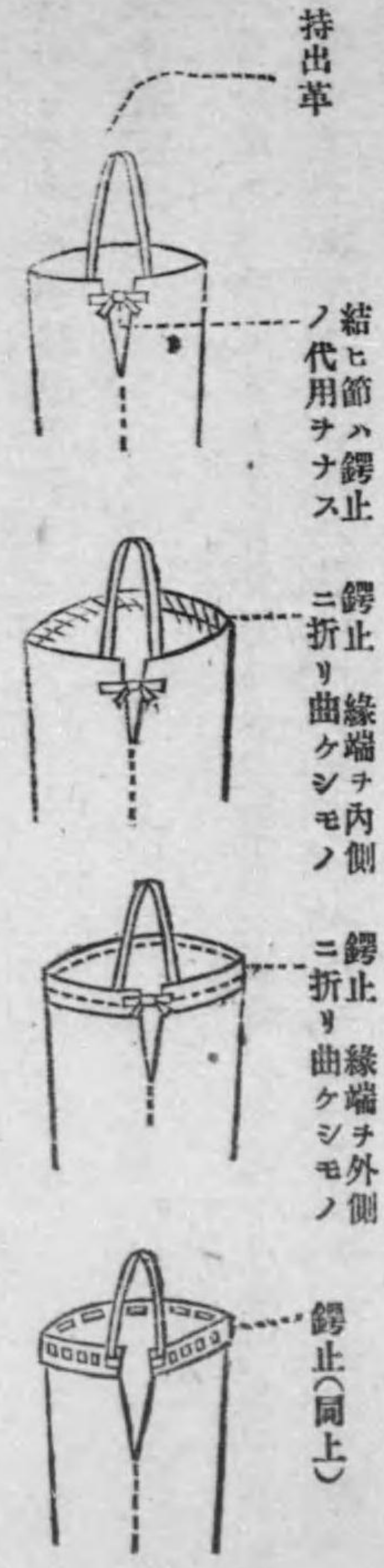
二重尖革ニモ亦上ニ鞣革ヲ下ニ生革ヲ用ヒタルモノ或ハ之ニ反スルモノ等アリ此等ハ保存稍良好ナルモ價高ク且ツ前者ハ竹刀ノ尖端ト不適合ニシテ後者ハ外傷ノ原因ヲナシ且ツ防具ヲ傷クルノ不利アリ何レノ尖革ニ於テモ革質及縫ヒ方特ニ縫革ノ端未ノ止メ方ニ注意スルヲ要ス

五、柄革

柄革ニハ牛ノ鞣革ヲ用ヒ薄キヲ可トス厚キハ破損ノ患ヒ少キモ使用不便ナリ又馬ノ鞣革或ハ厚キ牛鞣革ヲ薄ク鋤キテ用ヒタルモノアルモ弱クシテ破損シ易ク保存良好

ナラス其縫ヒ方ニハ内縫及外縫アリ外縫ハ破綻ヲ來シ易ク保存良好ナラス加之甲手ノ手ノ内革ノ保存ニ影響スルコト大ナリ  
柄革ノ検査ニ於テハ革質及其厚度、縫ヒ方及糸ノ端末ノ止メ方柄頭ノ締メ方等ニ注意スルヲ要ス

圖二十四第



六、中結革

胴ノ綴革ノ部ニ於テ既ニ述ヘシカ如ク牛ノ鞣革ニテ毛並ニ截斷シタルモノヲ用フルヲ可トス横ニ截チタルモノハ伸ヒ易ク且ツ切損シ易シ之ヲ検査スルニ當リ引キ伸ハシテ表皮ノ切ル、カ如キハ不可ナリ之ヲ使用スルニ當リテモ亦十分ニ引キ伸ハシテ



使用スルヲ可トス

### 七、弦

弦ハ鯨又ハ牛ノ腺ニ澁ヲ掛ケ「ニベ」ヲ塗リテ製スルモノトス其腺ハ長キヲ可トシ鯨ノ腺ニテ製シタルモノヲ可トスルモ保存ノ程度ニ於テハ著シキ差異ナシ近時麻糸ヲ中心トシタル不良品アリ

### 弦ノ鑑定法

弦ハ飴色ヲ帯ヒ透明ナルヲ可トス又條質ハ其太サ平均シテ太細等ノ斑ナク濕氣ヲ帯ヒタル如キ狀ヲ呈シテ柔軟ナルヲ可トス之ニ反シ濃厚ナル飴色ヲ帯ヒ且ツ太サ平均セス太細ノ斑アリテ澁一樣ナラサルモノハ不良ナリトス弦ヲ若干時間水ニ浸シ置ク時ハ不良品ノ鑑定容易ナリ

### 弦ノ格納法

弦ハ空氣ニ晒ス時ハ直ニ濃厚色ノ飴色ニ變シ不透明トナルヘシ又屈折スルトキハ

脆ク白色ノ龜裂ヲ生スルニ至ル之ヲ格納スルニハ紙袋ニ入レ箆筒ノ抽出シ等ニ藏シ置キ其所要ノ時使用ノ分ノミ出ス如クスルヲ可トス

### 八、鐳

鐳ハ其重量過大ナルトキハ竹刀ノ調子ヲ變ス故ニ其太サ及厚サ適當ナラサルヘカラス過厚過薄ハ共ニ不可ナリ近時鐳ノ中徑過小ニシテ其要ヲナササルモノアリ注意ヲ要ス

鐳ニ用フル革ノ種類ニハ野猪、水牛、豚、牛、等アリ稀ニ象皮ヲ用ヒタルモノアリ左ニ其各々ニ就キ利害ヲ述ヘン

- 1、野猪ハ革質最モ堅固ニシテ縁端打撃ヲ受クルモ容易ニ彎曲スルコトナク保存上頗ル良好ナルモ價高ク現今ハ容易ニ得難シ象モ亦略之ト同等ノ價値アリ
- 2、水牛ハ野猪ニ次テ革質堅牢ナルモ保存上ニ於テハ遠ク野猪ニ及ハス
- 3、豚ハ革ノ厚サ大ナルモノアリ然レトモ革質柔軟ニシテ脂肪ニ富ミ多クハ不潔ト



ナリ易シ

4、牛ノ生革ハ革質透明ニシテ美麗ナルモ軟カニシテ縁端打撃ヲ受クルト時曲リ易ク又使用中往々變形シテ平遍狀ヲナササルニ至ル殊ニ水氣ヲ帶フル時ハ更ニ甚シク鑿ノ鑑定法

種類	革	色	硬	度	革	面
野猪	灰白色不透明	堅	固	毛孔深ク整然トシテ三本ノ毛孔アリ		
水牛	飴色透明	稍堅	固	透視スルトキハ薄キ毛孔點々一本宛見ルヘシ		
豚	灰白色不透明油質	右	同	毛孔野猪ニ比シ淺ク二本宛アルモ一般ニ亂レテ整然ナラス		
牛	飴色透明美麗	堅固ナラス		透明ナルモ毛孔ナシ		

九、竹刀ノ結束法

I、竹刀假束ノ糸ヲ斷チ之ヲ手拭又ハ清潔ナル拭巾等ノ如キモノヲ以テ拭淨シ塵又ハ微等ヲ落ス

2、拭淨シタル竹片ヲ内面ノ標記ヲ換ユルコトナク束ヌ然ルトキハ組ミ合セ正シク保持確實ナリ

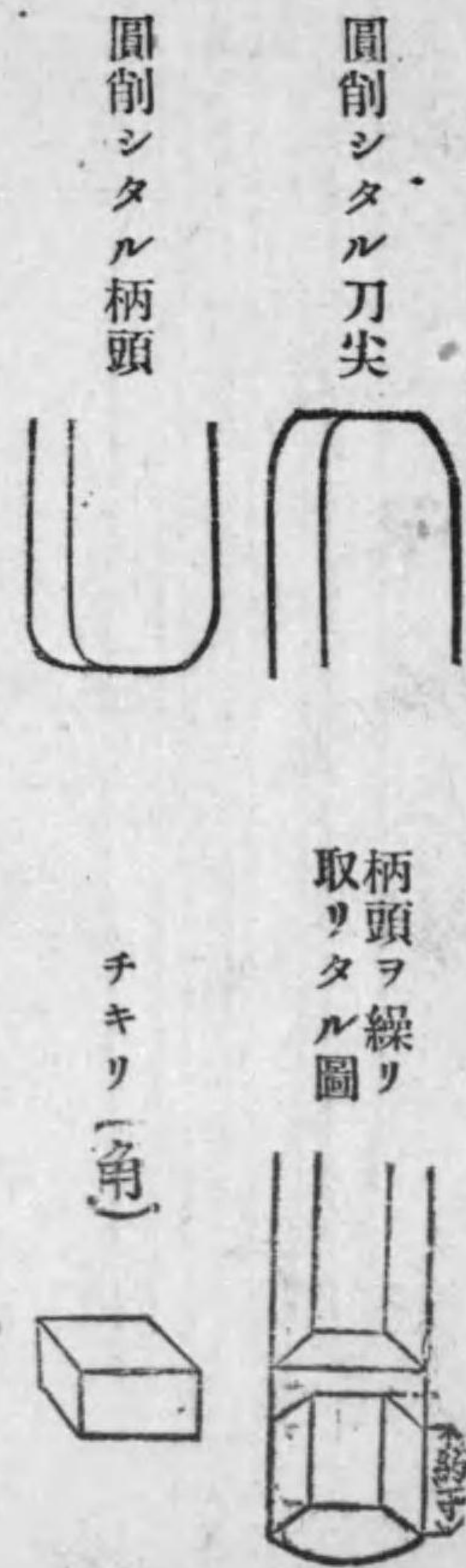
拭淨シタル竹片ノ柄頭ニ近キ部分ヲ第四十三圖ノ如ク繰リ取リ竹或ハ木ヲ同形ニ切リテ之ヲ入レ或ハ鋸ニテ淺ク切リテ方形ノ鐵板ヲ入レテ束ネ更ニ上下兩端ヲ圓削スルトキハ使用容易ニシテ尖革及柄革ノ保存上良好ナルノミナラス試合中切尖或ハ柄頭ヲ劍術場ノ板ノ間等ニ強突シテ竹片ノ出入ヲ正スカ如キ不體裁ヲ避クルヲ得ヘシ

圖三十四第





圖三十四第

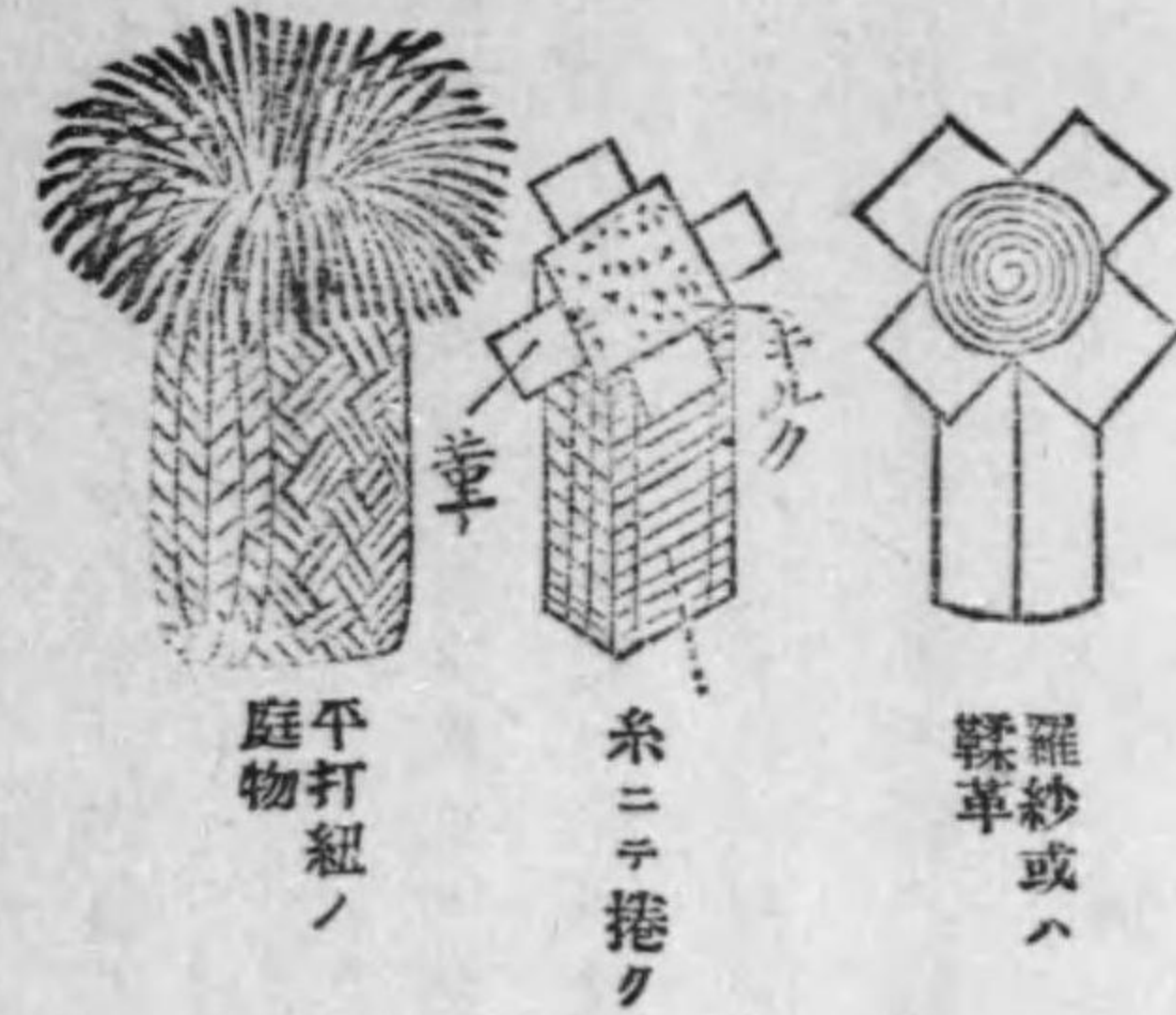


柄頭ヲ繰リ  
取リタル圖

チキリ(角)

七四

圖四十四第



糸ニテ捲ク

平打紐ノ  
庭物

3、柄革ハ柄ニ適合シ十分緊着確實ナルヲ要ス柄革

若シ柄ノ太サヨリモ大ナル時ハ使用上障害アルノ

ミナラス柄革ノ保存上良好ナラス

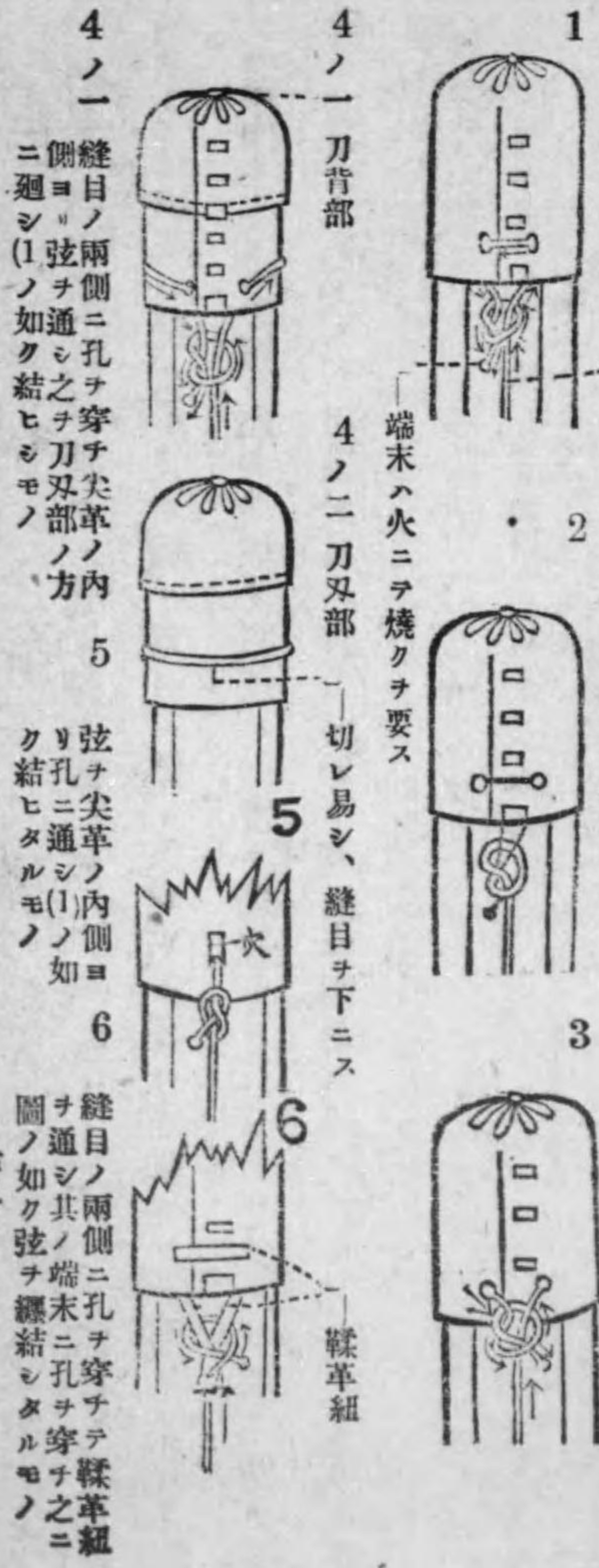
4、柄革ヲ柄ニ嵌合セハ弦ヲ附着シタル刀尖ニ尖革

ヲ挿入ス此際刀尖ノ中ニ「キルケ」或ハ鞆革又ハ

面紐等ノ廢品ヲ上圖ノ如ク構成シテ入ル、時ハ斬

撃時一ノ竹片他ノ竹片中ニ喰ヒ込ミ遍平トナルカ

圖五十四第



如キコトナク使用上及保存上共ニ良好ナリ而シテ尖革ハ刀尖ニ適合スルヲ可トス  
ルモ過度ニ緊實ナルトキハ竹刀及尖革ノ保存上良好ナラス又太キニ過クルトキハ  
尖革ハ廻轉シ易ク竹刀及尖革ノ保存上良好ナラサルノミナラス危険ヲ感スルコト  
大ナリ故ニ緊緩相半スルヲ可トス  
弦ノ附着法ヲ圖示セハ左ノ如シ  
1 小ハ弦ヲ通ス方向 2 縫目ノ兩側ニ孔ヲ穿テ弦ヲ通シ其長短兩端末ヲ共  
テ示ス(以下同シ) 3 尖革ノ外側ヨリ弦ヲ通  
シテ(1)如ク結ヒシモノ  
弦ハ一竹片ノ中央ニ位置セシムルヲ可トス 此ノ如ク結フトキハ切レ易シ

4ノ一 刀背部

末端ハ火ニテ焼クヲ要ス

4ノ二 刀刃部

切レ易シ、縫目ヲ下ニス

鞆革紐

4ノ一

縫目ノ兩側ニ孔ヲ穿テ尖革ノ内  
側ヨリ弦ヲ通シ之ヲ刀刃部ノ方  
ニ廻シ(1)ノ如ク結ヒシモノ

5

弦ヲ尖革ノ内側ヨリ  
孔ニ通シ(1)ノ如  
ク結ヒタルモノ

6

縫目ノ兩側ニ孔ヲ穿テ鞆革紐  
ヲ通シ其ノ端末ニ孔ヲ穿テ之ニ  
圖ノ如ク弦ヲ纏結シタルモノ

七五



5、柄革ノ持出革(乳)ニ於ケル弦ノ結ヒ方

柄革ノ持出革ニ於ケル弦ノ結ヒ方ニハ種々アレトモ要ハ簡單ニシテ解ケサルヲ尙  
フ(第四十六圖參照)而シテ弦ノ張度ハ過度ニ緊張セス又緩ナラサルヲ要ス即チ過  
度ニ緊張スルトキハ切損シ易ク緩ナルトキハ柄革後退シ易ク且ツ刀尖ノ尖革ヨリ  
脱スルコトアリ

十四第

1 尖革ニ付ケタル弦ノ長キ端末ヲ柄革ノ  
上方適當ノ所ニテ引キ解キ結ヒニ結フ

2 結ヒタル端末ヲ柄革ノ持出革ニ通ス

3 ノ一 持出革ニ通シタル端末ヲ引キ解キ結  
ヒニシタル輪ニ通シ更ニ持出革ニ通  
ス持出革ノ切損スル患ヒアリ

4 ノ一 再ヒ持出革ニ通シタル端末ヲ逐次上方ニ卷  
キ上ケ引キ解キ結ヒノ結ヒ目附近ニテ止ム  
端末ヲ焼クマシ

六第

3 ノ一 如ク引キ解キ結ヒノ輪ニ通シタル后持出  
革ニ通スコトナク持出革ノ結着部ニ通ス  
ノニ緊確ニシテ可ナリ

4 ノ一 持出革ノ結着部ニ通シタル端末  
ヲ逐次持出革ニ卷キ其端末ヲ持  
出革ノ上端附近ニテ止ム

6、中結革ノ位置及結ヒ方

中結革ハ刀尖ヨリ〇米二〇乃至〇米二五ノ所ニ於テ甚シク緊縮セサル如ク約三卷  
ニ結束スルヲ可トス緊縮スルトキハ竹刀破損シ易ク中結革モ亦切損シ易シ之ニ反  
シ過緩ナルトキハ竹片中ニ入りテ扁平状トナルコトアリ或ハ過ツテ敵ノ刀尖ヲ斬  
撃シタル際敵ノ竹刀我竹刀ノ中ニ挟マルコトアリ其ノ他斬撃縮ラス或ハ竹刀ノ腰  
ヲ弱クシ竹片尖革ヨリ脱シ危険ヲ生スル等使用上障害アリ

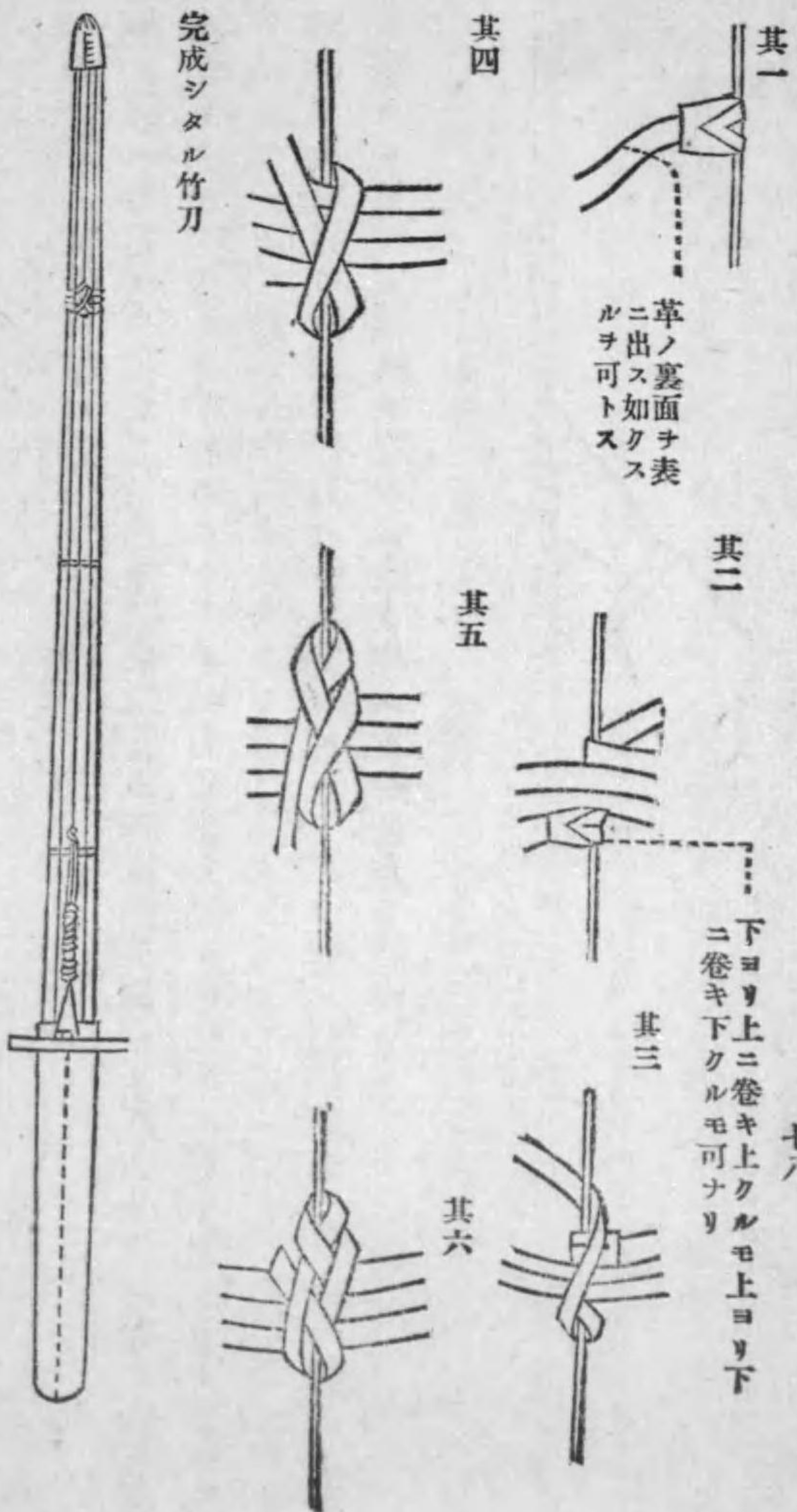
圖七十四第



尖革ヨリ約〇米二〇附近ニ結フヲ可トス



第四十七圖



第三章 劍術用具ノ保存取扱法

第一總說

劍術用具ノ取扱ヲ鄭重ニシ保存法適當ナルトキハ永ク其堅牢ヲ保持シ得ヘシト雖否ラサレハ容易ニ破損或ハ變形ヲ來シ且之ニ對スル尊重心ヲ失ヒ併セテ劍術ノ嗜好心ヲ減スルニ至ルモノトス

劍術用具ノ保存取扱ヲ確守セシムルニハ保存及取扱ノ方法ヲ教フルノミナラス如何ナル理由ニヨリテ其取扱ヲ鄭重ニシ何故ニ保存ノ方法ニ注意セサルヘカラサルカノ理ヲ知ラシムルト共ニ一面ニハ精神教育ト相俟ツテ行フヲ必要トス竹刀、木銃ハ敵ヲ撃突スヘキ武器ノ代用物ナリ眞ノ武器同様ニ取扱ヒヲ要スヘキモノナリ防具及假標等ハ使用ノ方法ヲ演練スル所ノモノニシテ武器同様ノ取扱ヲナスヘキナリ之ヲ知リテ初メテ取扱ヲ鄭重ニシ之カ保存法ニ注意ヲ拂フニ至ルヘク之ニ依リテ永ク其堅牢ヲ保持シ得ヘシ如何ニ良好ナル防具ト雖若シ其取扱ヲ粗略ニシ保存法ニ缺クル所アルトキハ速ニ破損或ハ變形シ永ク使用シ得サルニ至ルコト必セリ加之カ爲メ自然的ニ其尊重心ヲ失ヒ取扱ヲ粗略ニシ保存法ヲ守ラサルニ至ル從ツテ防具ハ不潔トナリ之ヨリ生スル惡



臭ハ面ヲ冠ルサヘ惡氣ヲ生セシムルニ至リ或ハ防護力ヲ失ヒ之カタメ感スル所ノ疼痛ハ嗜好心ヲ失フノミナラス著シク劍術ヲ厭忌シ或ハ甚シキ外傷ヲ生スルコトナシトセサルナリ

### 第二 生革ノ取扱

生革（硬革）ハ屈伸又ハ伸縮ヲ要セサル部位ニ用ヒアリテ十分ナル打撃又ハ衝突ヲ受クルモ其力ヲ減殺シ得ル如ク所要ノ形状ヲ有セシメアリ故ニ其形状ヲ失フトキハ其力ヲ減殺スルコト能ハスシテ衛生上不良ナルノミナラス遂ニ使用ニ堪ヘサルニ至ルモノトス

製作ノ際生革ヲシテ所要ノ形状ヲ保タシムルニハ先ツ生革ヲ水ニ浸シテ軟化シ然ル後之ヲ模型或ハ材料上ニ緊張シ又ハ槌ニテ鍛ヒテ所要ノ形状ヲ與ヘ之ヲ乾カシ硬固トナルヲ待ツテ製作スルモノナルヲ以テ若シ水分ヲ含マシメ或ハ乾燥度ニ過クル時ハ所要ノ形状ヲ失フニ至ルヘシ

生革殊ニ漆ヲ塗ラサル部分ハ水分ヲ帯ヒ易シ故ニ若シ之ニ水ヲ撒布シ或ハ格納中濕氣ヲ含マシメ或ハ雨雪天ノ時之ヲ使用シテ濕氣ヲ帯ハシメ或ハ演習中飲用水ヲ撒布シ又ハ着脱ノ際地上ニ置キテ濕氣ヲ含マシムル等ノコトアルトキハ之レカ爲メ所要ノ形状ヲ失フニ至ル又一部分ノ濕氣ト雖局部ノ變形ヲ來サシムルヲ以テ此ノ如キコトナキ様注意スヘシ又消毒ノタメ絶ヘス日光ニ直射セシメテ乾燥セシムルカ如キハ却ツテ革ノ油分ヲ發散セシメ革質ヲ變セシムルト共ニ其ノ所要ノ形状ヲ失ハシムルニ至ルモノナリ

### 第三 鞣革ノ取扱

鞣革ハ生革ト其用所ヲ異ニシ屈伸自在伸縮微妙ヲ要スル所ニ用フルモノトス故ニ其柔軟ヲ保持セシメサルヘカラス

鞣革ニ水分ヲ含マシムルトキハ直ニ硬質ニ變シ伸縮ノ自由ヲ失シ手ノ内革等ハ竹刀、木銃ノ緊握ヲ妨クルノミナラス摩擦ノ爲メ水泡腫ヲ生スルニ至ルヘシ又油分ヲ含マシ



ムル時ハ革質ヲ變シ腐融シ直ニ裂ケ易キモノトス其微ヲ生セシメ或ハ地上ニ置キ土氣ヲ含マシムルモ亦同シ

鞣革ニ微ヲ生セシメ或ハ油又ハ土氣ヲ含マシムル時ハ保存期限ヲシテ少クモ三分ノ一ヲ減少シ甚シキハ二分ノ一以下ニ減少スルニ至ル  
 一般革具ノ手入法ハ塗油ヲ以テ其方法トスルヲ通常トスト雖之ニ模倣シテ鞣革ニ塗油スルトキハ直ニ革質ヲ變シ腐融シ裂ケ易キ脆キ性トナリ保存期限ヲ短縮セシムルニ至ル是レ特ニ手入上了解セシムヘキ點ナリトス  
 防具ハ汗ニ滲ミ不潔ニ陥リ易シ故ニ適當ナル注意ト方法（例令ハ面ニアリテハ其内部ヲ清潔ナラシムルタメ手拭ヲ使用セシメ時々日光ニテ乾燥スルカ如キ）トニ依リ之ヲ豫防セハ微ノ發生ヲ防クヲ得ヘシ微ノ發生ハ濕潤ナル天候特ニ梅雨期ニ於テ甚シ故ニ此等ノ時期ニ際シテハ一層其保存手入ニ注意シ微ノ發生ヲ豫防スルヲ要ス  
 土氣ハ水、微ト同シク革質ヲ變化シ保存期限ヲ短縮セシム而シテ土氣ハ水分ト共ニ

附着スルコト多シト雖又乾燥セル地上ニ置クトキハ土氣ノ塵埃ト共ニ革面ニ附着スルコト少シトセス然ルトキハ革質ヲ變シ保存期限ヲ短縮スルコト甚シキモノトス甲手ニ於ケル手ノ内革ハ塵埃ノ爲メ漸次黒色ヲ呈スルニ至ル其濃淡ノ程度ハ防具手入保存ノ十分ナルト否トヲ察知シ得ヘキ一ノ兆候ナリトス

#### 第四 面ノ取扱

1、面ノ内部ハ汗除及腮蒲團アルモ發汗ノ爲メ甚シク其部ヲ不潔ナラシムルニ至ルヲ以テ面ヲ冠ル際ニハ必ス手拭ヲ使用スルヲ要ス  
 手拭ヲ使用スルトキハ左ノ利益アリ  
 イ、發汗ノ眼中ニ流レ入ルヲ防ク  
 ロ、面ノ附着ヲシテ頭及顔ニ緊着ナラシム  
 ハ、面ノ内部ヲ不潔ナラシメス  
 ニ、後頭部ヲ打撃セラル、コトアルモ外傷ヲ免カル



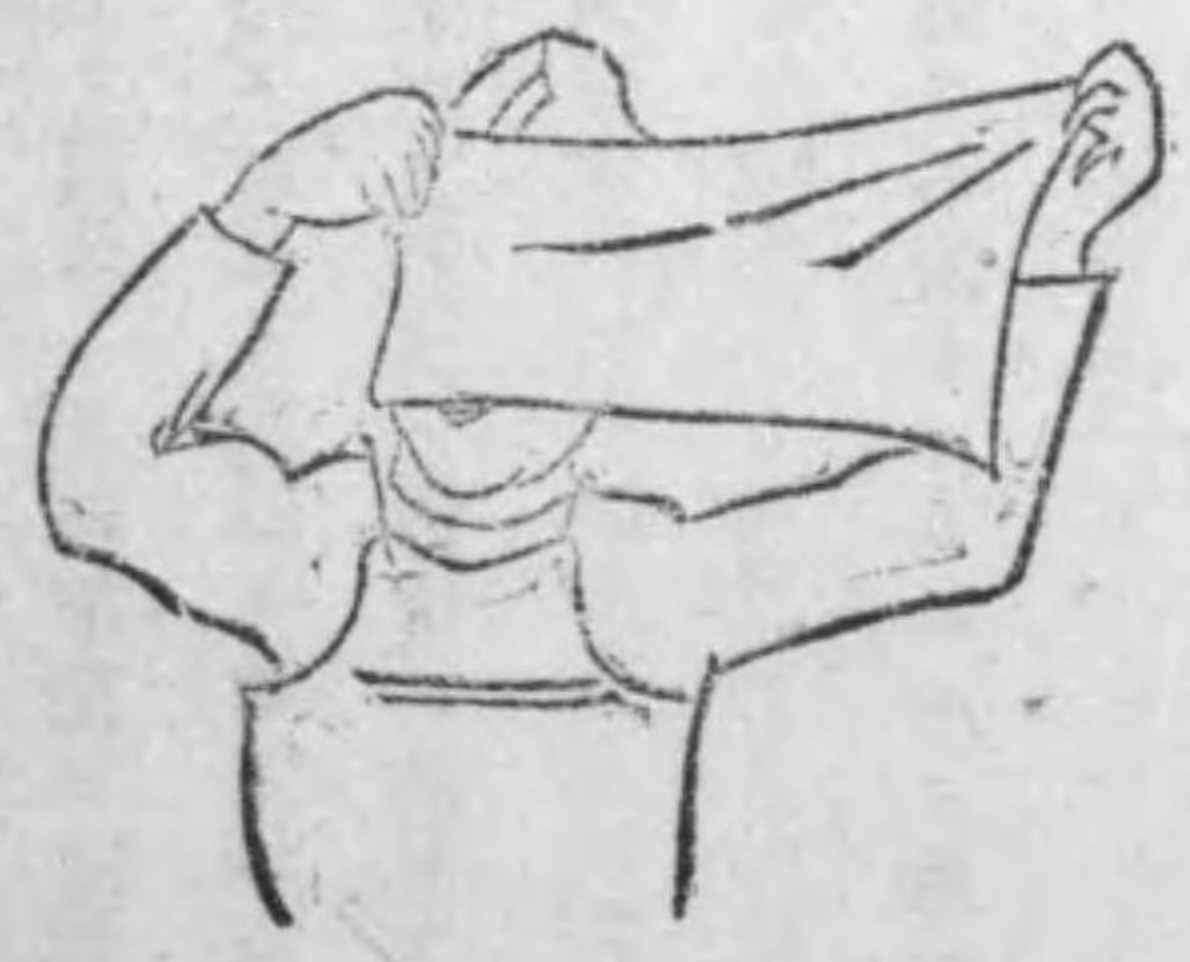
第四

ホ、鼓膜ノ破ル、ヲ防ク  
 ヘ、皮膚病ノ傳染ヲ豫防ス  
 手拭ノ被リ方

イ、上ケ手拭（ねーさん冠り）  
 上ケ手拭ノ被リ方ヲ圖示セハ左ノ如シ  
 1、



2、



第十八圖

ロ、鉢卷（手拭ヲ三ツ或ハ四ツ折ニシテ頭ニ卷キ附ク）  
 鉢卷ノ圖示左ノ如シ

3、



4、





圖九十四第



1、



2、

八六

2、面ヲ冠ル時ハ腮ヨリ入レ脱スルトキハ紐ヲ解キテ脱スハシ  
 面ヲ冠ルニ頭ノ方ヨリ入ル、時ハ腮ヲ受クル部分ノ形状ヲ變シ易ク且ツ見透シ不具  
 合トナリ又紐ヲ結ヒタル儘前垂或ハ面蒲團ヲ握リテ脱スルカ如キコトアルトキハ前  
 垂ノ附着部殊ニ面蒲團ト前垂ノ連結部ヲ破損シ易ク保存上良好ナラサルノミナラス  
 腮ヲ受クル部分ノ形状ヲ變シ演習中往々面カ顔ノ上方ニ滑走スルカ如キ不體裁ヲ生  
 スルニ至ル

3、直接地上ニ置クヘカラス

直接地上ニ置クトキハ地上濕潤ナルトキハ勿論縦ヒ乾燥セル場合ニ在リテモ土砂ノ  
 爲メ不潔トナリ加之自然ニ浸潤スル土氣ノ爲メ面鐵ハ錆ヲ生シ生革及鞣革ハ革質ヲ  
 變シ破損ヲ連カナラシムルノ患アリ

4、面ノ着脱及ヒ運搬等ノ際地上ニ投擲スルカ如キハ最モ戒メサルヘカラス

面鐵ハ共構造上縦横兩枝梧共ニ弧形ヲナスヲ以テ之ヲ投擲スル時ハ面鐵彎曲シ保存  
 良好ナラス加之大ナル危険ヲ醸スコトナシトセス

5、面ヲ冠リテ唾液ヲ吐クヘカラス

面ヲ冠リテ唾液ヲ吐クトキハ防錆ノタメ面鐵ニ施シタル塗料ハ剝脱シ遂ニ錆ヲ生ス  
 ルニ至リ保存上良好ナラサルノミナラス衛生上最不良ニシテ且ツ威嚴ヲ損ス

第五 甲手ノ取扱

1、手ノ内革ハ最モ濕潤シ易ク又磨滅シ易シ而シテ之ヲ濕潤ナラシムルハ發汗ナリ發

八七



汗性ノ人ハ使用中手ノ内革ニ濕氣ヲ帶フニ至ルハ免カレサルモ然ラサルモノハ多クハ使用中ニ濕氣ヲ含マシムルコト少ク却ツテ使用後若干時ノ休憩中ニ於ケル發汗ニヨリテ濕サシムルコト多シ故ニ使用後ハ直ニ甲手ヲ脱キ汗ニ依リテ甲手ノ内部ヲ濕ササルコトニ注意スルヲ要ス

2、手ノ内ニハ決シテ唾液ヲ吐クヘカラス

手ノ内ニ唾液ヲ吐クハ衛生上不良ナルノミナラス威嚴ヲ損シ鞣革ノ保存上水分ヲ撒スルト同様ノ不利アリ

甲手ヲ使用スルニ當リ手ノ内ニ水分ヲ帶ハシムルトキハ使用上ニ於テ竹刀緊握ニ便ナルモ使用後放乾スルトキハ甚シク硬固トナリ次ニ使用スル時ハ更ニ水分ヲ含マシメ柔軟トナルヲ待チテ初メテ使用セサルヘカラサルノ不便アルヘシ斯クノ如クスルトキハ緊握ニ便ナルヲ主張スルモノアルモ保存上良好ナラス

3、甲手ヲ脱ク時ハ頭ノ頭部及拇指部ヲ握リテ引キ脱ク等ノコトアルヘカラス

甲手ヲ脱クニモ粗略ニスルトキハ破損ヲ速カナラシム例ヘハ頭ノ頭部ヲ握リテ引クトキハ該部ノ形狀ヲ變シ裝著ニ窮屈ヲ感シ操用困難トナルニ至ル又拇指部ヲ握リテ引クトキハ甲手頭ト筒ノ縫着部ヲ破綻セシム殊ニ發汗甚シキ時ニ於テ然リトス故ニ梅雨期ヨリ夏期ニ於ケル演習並ニ發汗性ノ人ハ大ニ注意セサルヘカラス之ヲ脱スルニハ腋下ニ筒ノ部ヲ挟ミ或ハ筒ノ部ヲ上ヨリ掴ミテ脱クヲ可トス

4、甲手ノ手ノ内革ハ使用後其皺ヲ伸ハシ置クヲ要ス

甲手ノ手ノ内革ハ使用後其皺ヲ伸ハシ置クトキハ保存上良好ナルノミナラス次回ノ使用ニ當リ其操作容易ナリ若シ皺ヲ伸ハサスシテ使用ノ儘放棄スルトキハ手ノ内革ハ發汗ノ爲メ濕リ之ヲ乾燥シテ硬固トナリ竹刀緊握ニ不便ナルノミナラス遂ニ水泡腫ヲ生スルニ至リ水分ヲ含マシムルト同一ノ害ヲ生ス

5、直接地上ニ置クヘカラス

甲手ニ於テモ直接地上ニ置クトキハ面ニ於ケルト同様ノ害アリ



## 第六 胴ノ取扱

生革ノ取扱ノ部ニ於テ既ニ詳述セシモ左ニ二三ノ注意ヲ述ヘン

- 1、胴ノ胸ハ取扱不良ナルトキハ變形シ易ク且ツ柔軟トナリ易キヲ以テ其取扱特ニ格納法ニ注意セサルヘカラス  
 胴ノ胸ハ胸部ヲ防護スル極メテ樞要ナル部分ナルヲ以テ努メテ堅固ナルヲ要ス若シ變形シ或ハ柔軟トナリタルトキハ擊突ヲ受ケタル際疼痛ヲ感スルコト大ニシテ劍術ノ嗜好心ヲ減スルノミナラス危険ヲ感スルコトモ亦大ナリ
- 2、胸ノ乳ヲ直接鐵釘等ニ掛クヘカラス  
 乳ヲ直接鐵釘等ニ掛クルトキハ錆ノタメ革質ヲ變シ速ニ切損スルニ至ルヘシ
- 3、胴ヲ多數重ネテ格納スヘカラス  
 胴ヲ多數重ネテ格納スルトキハ内方ノ胴ハ其開キ小ニ外方ノ胴ハ其開キ大トナリ保存上及使用上害アリ

4、胴ヲ着脱或ハ運搬等ノ際胴紐ヲ以テ引キ摺リ或ハ投擲シ又ハ強ク地ニ落スカ如キコトナキヲ要ス

胴ハ半圓形ヲナスモノナルヲ以テ一方ノ紐ヲ以テ引キ摺リ或ハ投擲シ又ハ強ク地ニ落スカ如キコトアルトキハ外方ニ開キ變形スルニ至リ其甚シキモノハ綴革弛ミ又ハ切斷シ或ハ各竹片ノ接合ヲ保持スルタメ其内部ニ通シタル弦ハ切レ各竹片ノ接合不具合トナルニ至ルヘシ

5、直接地上ニ置クコトノ不可ナルハ面ノ部ニ於テ既ニ述ヘタルカ如シ

## 第七 肩ノ取扱

生革及鞣革ノ取扱ノ部ニ於テ既ニ詳述セシモ肩ハ特ニ其壺及控革ノ形狀ヲ變シ易ク之カ爲メ装着不具合トナリ外傷ノ原因ヲ醸スニ至ルコトナシトセス故ニ雨雪天ノ時之ヲ使用シ或ハ演習中飲用水ヲ撒布シ或ハ着脱ノ際直接地上ニ置キ濕氣ヲ帶ハシムルカ如キコトナキヲ要ス殊ニ梅雨期ヨリ夏期ニ亘ル演習ニ於テハ發汗甚シク加フルニ天候濕



潤ノ爲メ乾燥困難ナルヲ以テ此期間ハ其取扱ニ注意スルコト特ニ緊要ナリ

### 第八 演習又ハ防具乾燥ノ際敷物使用ノ必要

室外ニ於テ演習スル際若クハ日光消毒ヲナスニ當リテハ防具ハ必ス敷物ヲ敷キ其上ニ置クヘシ之レ地上濕潤ナルトキハ勿論縦ヒ乾燥セル場合ニアリテモ土砂ノ爲メ不潔トナルノミナラス保存上有害ナルヲ以テナリ(第三章ノ二及三ノ三参照)

### 第九 防具ノ結束法及格納法

#### 1、防具ヲ結束スルニハ左ノ顧慮ヲ要ス

- イ、一人分毎ニ取纏ムルコト
- ロ、結束ニヨリテ形狀ヲ變セサルコト
- ハ、部類毎ニ置ク時ハ直接釘ニ掛ケサルコト甲手等ハ棚ノ上ニ置クヲ要ス此際變形セサル様注意スヘシ
- ニ、自然ニ乾燥シ易キコト

一人分毎ニ取リ纏メ置ク時ハ整頓シ易ク使用者各自常ニ纏束シ得テ使用後格納ニ便ナリ又演習ニ當リテハ直ニ使用スルコトヲ得ルノ利益アリ若シ個々ニ格納スルトキハ自然ニ一定ノ場所ニ推積シ爲メニ亂雜ニ陥リ自然ノ乾燥ヲ求ムルコト能ハサルノミナラス所要ノ形狀ヲ失フニ至ルヘシ結束法適當ナラサルトキモ亦自然ノ乾燥ヲ求ムルコト能ハサルノミナラス之カ爲メ所要ノ形狀ヲ失フニ至ルモノトス

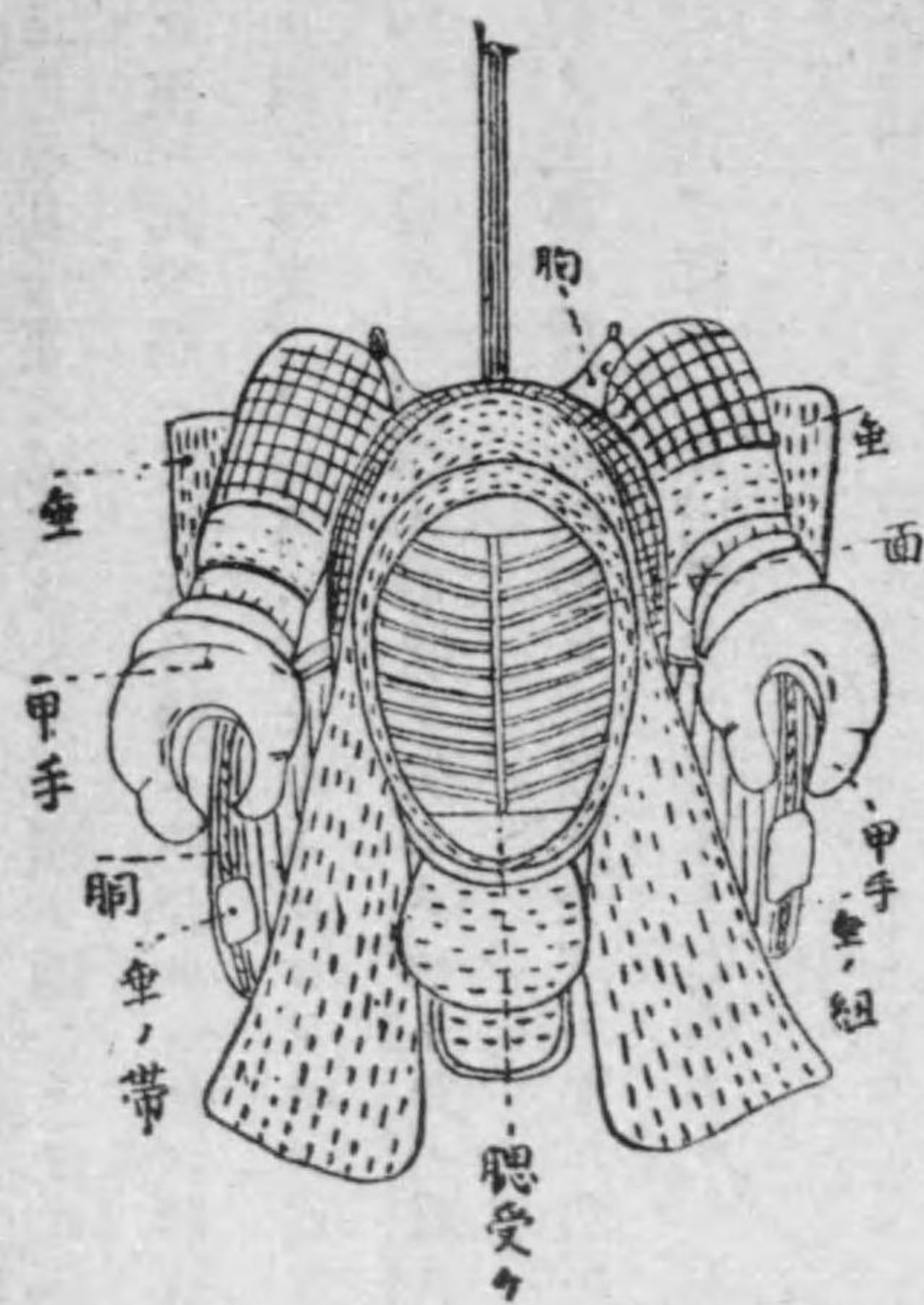
#### 2、防具結束法ノ一例ヲ圖示セハ左ノ如シ

兼用防具ニアリテハ胴ノ内側ニ裏蒲團及肩ヲ置キ其上ニ面ヲ其頭部ニ下方ニシテ置キ胴ノ下紐ニ各々左右ノ甲手ヲ通シテ裏蒲團、肩、面及胴ノ上下紐ヲ揃ヘテ胸ト胴トノ縫着部ニ設ケタル乳ニ通シ此等ノ諸紐ヲ一纏メニシテ適當ノ長サニ結フ若シ胴ノ内側ニ乳ナキトキハ裏蒲團、肩、面及左右ノ甲手ヲ通シタル胴ノ下紐ヲ一纏メニ揃ヘ胸ノ左ノ上紐ヲ胸ノ右ノ乳ニ右ノ上紐ヲ胸ノ左ノ乳ニ通シ之ヲ前ノ諸紐



圖一十五第

例一ノ束結具防用術刀軍手兩



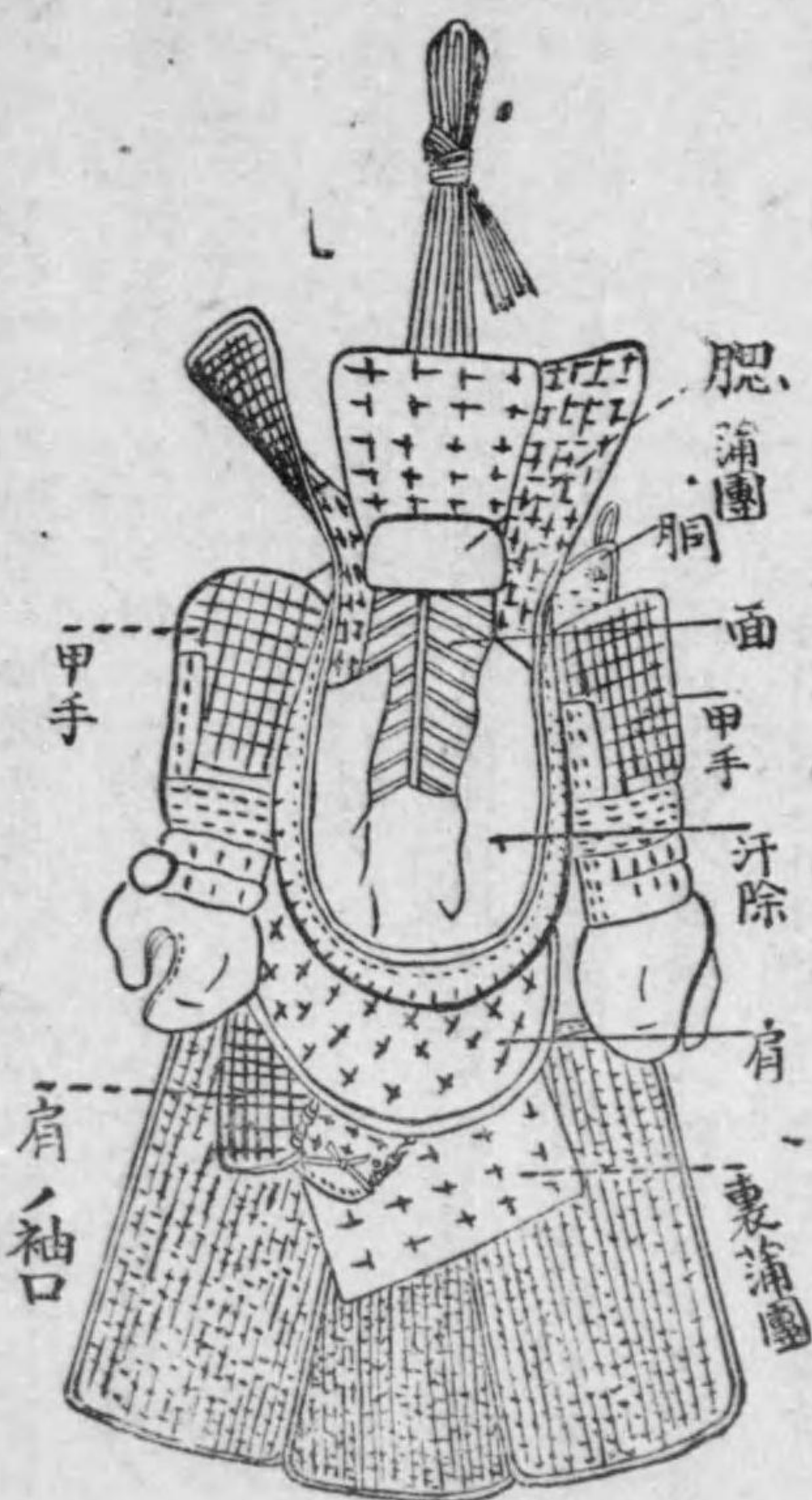
ノ中央附近ニ於テ十文字ニ交叉スル如ク締メ其端末ヲ胸ノ内側ニ廻シテ結フ下紐ハ胸ノ外側或ハ面ヲ胸ノ内側ニ置キタル後其ノ上ニ結フ次ニ縦枝梧ノ上端ニ於テ提ケ得ル如ク適當ノ長サニ面紐ヲ結ヒ他ノ端末ニ左右ノ甲手ヲ結ヒ付ケ提ケ得ル如ク結ヒタル紐ヲ胸ノ内側ニアル乳ニ通シ之ヲ釘等ニ掛クヘシ

胸ヲ梱包ノ被覆ノ如クシ裏蒲團及肩ヲ入レ其上ニ面ヲ置キ面内ニ甲手ヲ挿入シテ胸紐ヲ以テ堅ク結束スルハ最モ不良ナル方法ニシテ左ノ害アリ

イ、竹製ノ胸ニアリテハ其綴革ヲ弛緩ナラシメ又革製

圖十五第

例ノ束結具防用兼



銃劍術専用防具半胸ハ兼用防具ノ結束ニ準シテ行フ

兩手軍刀術用防具ノ結束ハ垂ヲ裏返シニシテ帶ヲ下ニシ垂ノ中央ト胸ノ中央ト略一致スル如ク胸ノ外側ニ當テ垂ノ紐ヲ胸ノ後端ニ纏結シ胸ノ上紐ヲ前ニ廻シテ胸

ト一纏ニシテ適當ノ長サニ結フヘシ



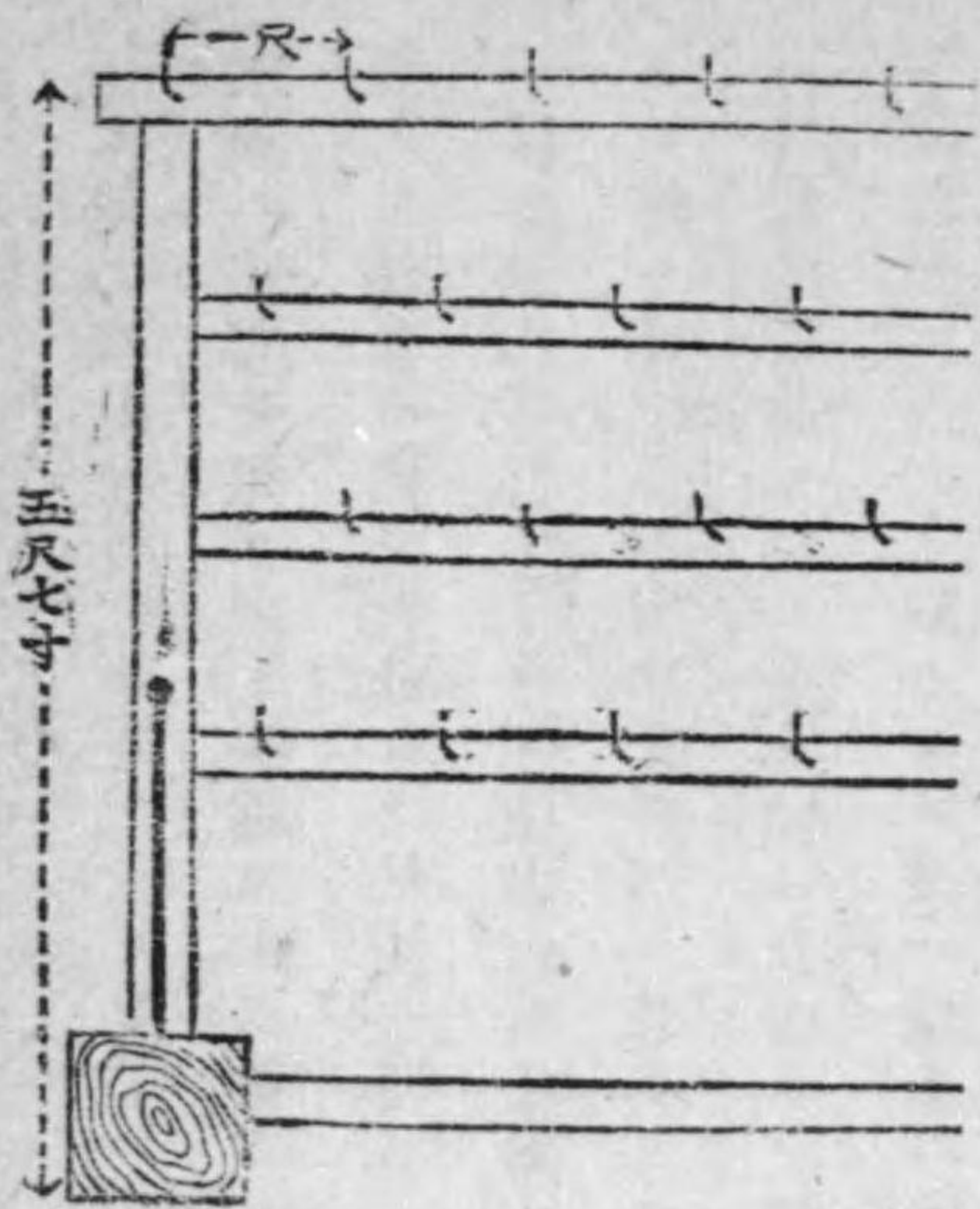
ノモノハ其所要ノ形状ヲ失シ身體ニ適合セサルニ至ルノミナラス防護力ヲ減スルニ至ル元來胴ハ其形状身體ニ適合スル如ク構造スルノ外尙適當ノ曲形ヲ保タシメ以テ撃突力ヲ局部ニ減セシムルコトナク適宜之ヲ分解スル如ク配慮シアリ故ニ胴ニ於ケル所要ノ形状ヲ失ヒタルトキハ直ニ修理ヲ要ス

ロ、肩ノ上部ニ於ケル所要ノ形状ヲ失フニ至ル然ルトキハ肩ニ適合セス防護力ヲ失ヒ外傷ヲ起スノ原因トナリ衛生上有害ナルノミナラス遂ニ使用シ難キニ至ルコトアリ

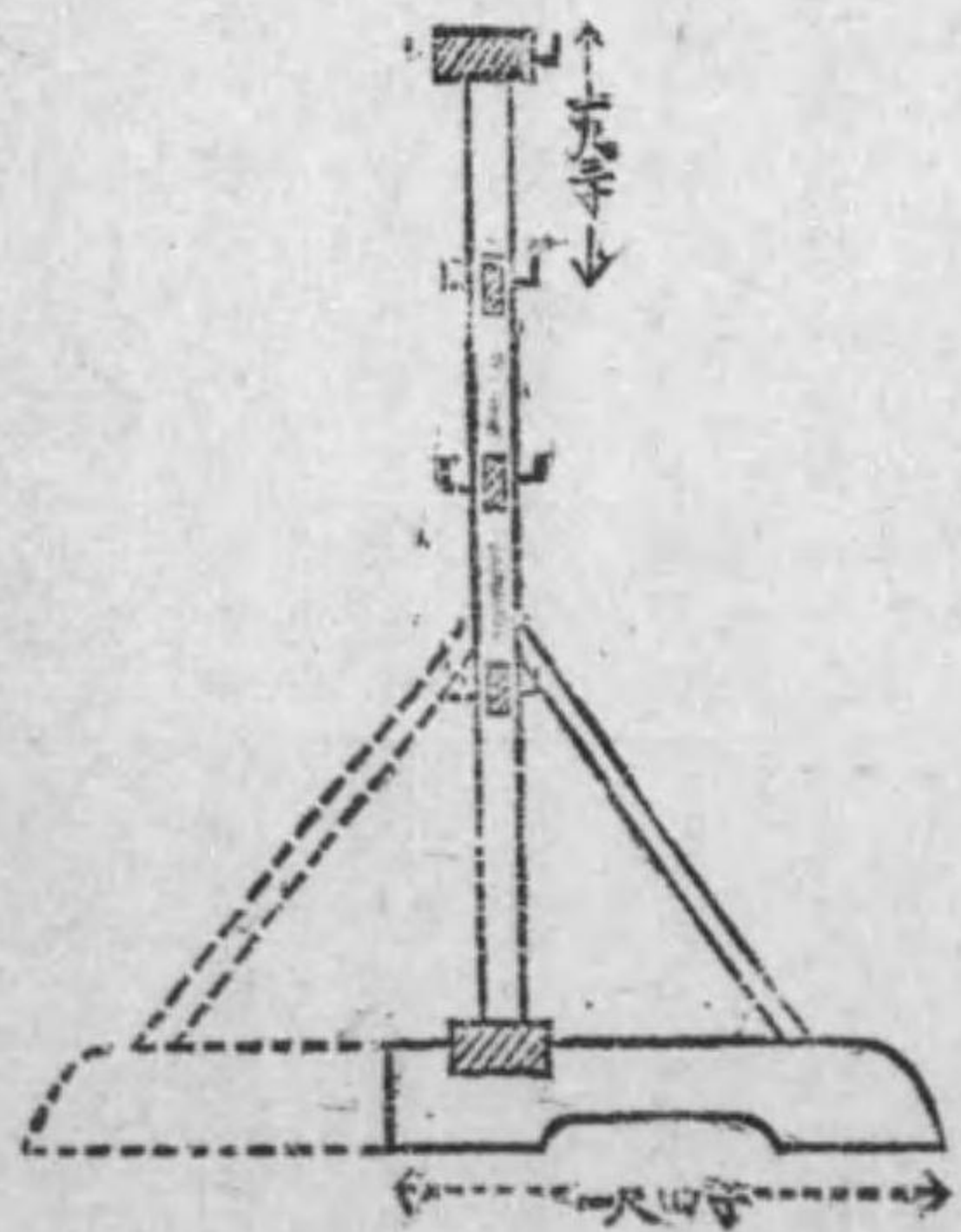
ハ、甲手ノ形状ヲ失フニ至ル元來甲手ハ前臂及拳ヲ十分ニ防護シ得ル如ク構造スルモノニシテ其形状モ手ニ適合シ此ノ利益ヲ收メ得ル如ク附與シアリ然ルニ若シ其形状ヲ失フトキハ手ニ適合セサルニ至リ使用中往々局部ニ水泡腫ヲ生スルコトアリ加之保存上最モ良好ナラス

ニ、防具ハ自然ニ乾燥シ得ス却ツテ蒸ス如キ状態トナルヲ以テ綿布及革ハ漸次腐

圖二十五第



防具掛ノ一例ヲ示セハ左ノ如シ



蝕或ハ變質シ縫着部ヲシテ破綻シ易カラシメ保存期限ヲ短縮セシムルニ至ル

3、防具ノ格納所ハ風通シ良好ニシテ且ツ乾燥シ易キ所ヲ選定スヘシ濕氣ヲ受ケ又ハ塵埃ノ飛揚甚シキ所ニハ決シテ格納スヘカラス故ニ兵室ノ入口又ハ交通甚シキ



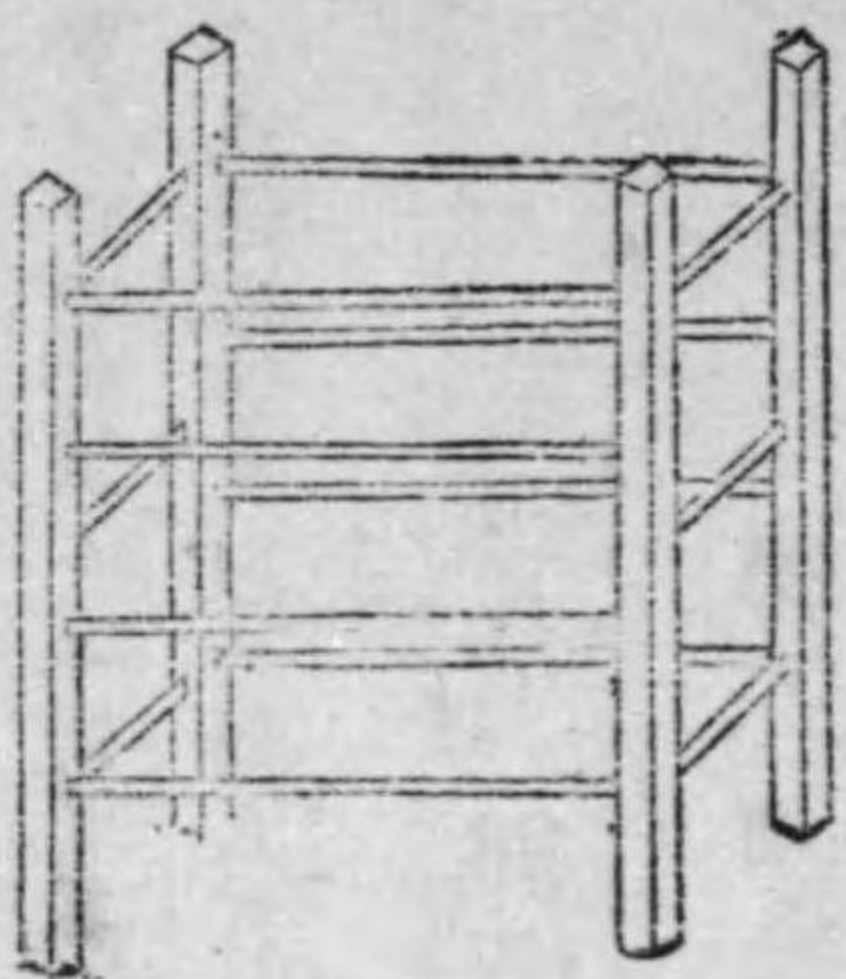
4、木銃ノ格納法

木銃ハ銃架ヲ作り之ヲ格納スルヲ要ス然レトモ其傾斜ノ度甚シキカ或ハ横木上ニ置クカ如キハ自ラ彎曲シテ使用ニ堪ヘサルニ至ルコトアリ木銃ヲ彎曲ナラシムルハ保存法ノ不良ナルヨリ生スルモノ最モ多ク日光ニ直射セシムルト濕氣ヲ帶ハシムル等モ亦之カ原因ヲナス殊ニ若木ニテ乾燥十分ナラサル材ヲ以テ製シタル木銃ハ比較的彎曲シ易シ故ニ縦ヒ老樹ニテ製シ十分乾燥シタルモノニアリテモ演習中ト雖日光ニ永ク直射セシメ又ハ地上ニ横ヘ濕氣ヲ帶ハシムルカ如キハ大ニ戒メサルヘカラス又銃架ニ托シ格納スル場合ニアリテモ壁ニ接シタル所ハ可成避クルヲ要ス

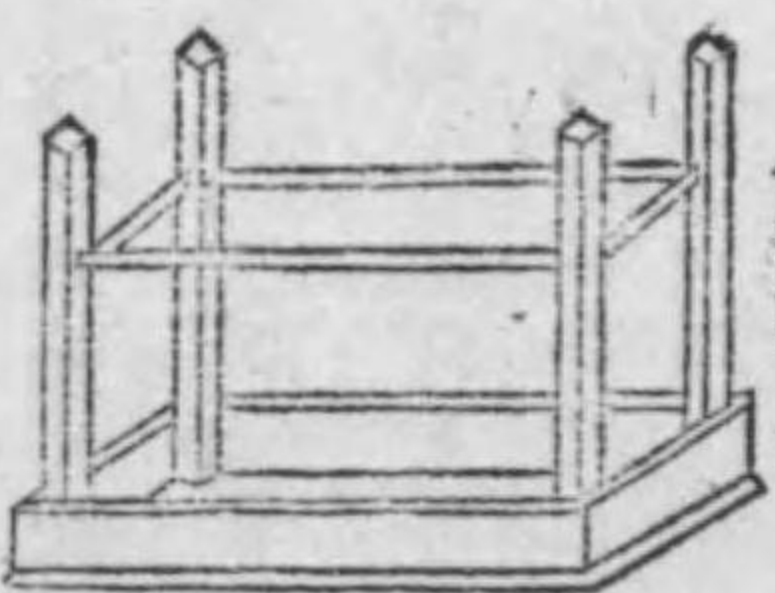
木銃ヲ稱シテ棒ト稱フカ如キハ劍術用具保存上尊重心ヲ失ヒ取扱ヲ粗略ニスルノ原因トナルモノナリ此ノ如キハ雷ニ劍術用具ノ保存上有害ナルノミナラス眞ノ武器ノ代用タルノ精神ヲ忘却シタルノ甚シキモノト謂ハサルヘカラス

5、竹刀ノ格納法

竹刀ハ銃架ヲ應用シテ之ニ掛クルカ或ハ第五十三圖ノ如ク棚ヲ構成シテ其上ニ置クカ或ハ第五十四圖ノ如ク竹刀立ヲ作り之ニ立ツル如クスルヲ要ス



圖三十五第



圖四十五第

竹刀ヲ劍術場或ハ室ノ一隅ニ立テ掛ケ置クカ如キハ柄革及尖革ノ保存上良好ナラサルノミナラス尊重心ヲ失ヒ取扱ヲ粗略ニスル原因トナリ眞ノ武器ノ代用物タル精神ヲ忘却スルニ至ルヘシ

「防具ハ以上述ヘタル諸件ヲ遵守シ總テ叮嚀ニ取り扱フヲ要ス其他草具ニハ一切塗油



ヲ嚴禁シ汗除、腮蒲團ヲ除ク外布ヲ以テ製シタル部分ニハ水分ヲ注クカ如キコトアルヘカラス總テ防具ヲ乾燥スルニ當リテハ乾燥シ過キサルコト及ヒ甲手ノ手ノ内革等ハ直接日光ニ暴サス十分伸ハシテ陰干スルコトニ注意スヘシ又防具ノ結束及格納ニ當リハ自然的ニ乾燥スル如クシ且ツ形狀ヲ變セサル如ク特ニ注意スルヲ要ス又新品ノ防具ヲテ初メテ使用スルニ當リ其装着ノ不具合ヲ醫センカ爲メ木銃ノ床尾飯或ハ竹刀ノ柄頭其ノ他鐵槌等ヲ以テ強ク打撃又ハ押壓ヲ加フルカ如キハ嚴ニ慎マサルヘカラス

#### 第四章 劍術用具ノ手入法

##### 第一 總 說

用具ノ保存ヲ良好ニセンカ爲メニハ其取扱ヲ鄭重ニスルト共ニ手入ヲ完全ニ施行セサルヘカラス如何ニ其取扱ヲ鄭重ニスルモ手入ヲ怠ルカ或ハ完全ナラサルトキハ保存期限ヲ短縮シ或ハ直ニ破損シ易カラシメ又小ナル破損モ益々大ナラシムルニ至ルヘシ加

之不慮ノ危害ヲ招キ劍術ニ於テ尤モ嫌疑スル恐怖心ヲ起サシメ且ツ劍術ヲ厭フノ念ヲ生セシメ使術ノ進歩上少ナカラサル妨害ヲ與フルモノトス故ニ演習ノ前後ニ於テ必ず検査ヲ行ヒ其修理ヲ要スヘキモノハ時機ヲ失セス其方法ヲ講シ又乾燥或ハ洗濯ヲ要スルモノハ直ニ之ヲ行フコト必要ナリ

要スルニ用具ノ保存ヲ良好ニセンカ爲メニハ取扱法ト相俟ツテ十分手入法ニ注意セサルヘカラス之カ爲メ演習ノ前後ニ於テ検査ヲナスノ外時々検査ヲ行ヒ其大修理ヲ要スルモノハ商人ニ命シテ之ヲ修理セシメ又破損セントスルモノ或ハ破綻セントスルモノニシテ兵卒ニ於テ修理ヲ行ヒ得ルモノハ直チニ之カ修理ヲナシ又汗除、腮蒲團等ハ之ヲ洗濯スル等常ニ整備シ置クヲ要ス又演習後ニアリテハ汗染シタルモノハ直ニ乾燥法ヲ講スルト同時ニ修理ヲ要スルモノト否トヲ區分シ其修理ヲ要スルモノハ直ニ修理ヲナス等處置ヲ怠ラサルヲ要ス

防具ヲ常ニ完全ノ域ニ達セシメント欲セハ分數交換ノ方法ニヨリ新陳交換ノ方法ヲ適



當ニ計畫スルヲ肝要ナリ其方法ハ現下ニ於ケル防具ノ程度ヲ顧慮シテ確定スルヲ要ス  
用具ノ保存期限ハ劍術用具ノ種類並ニ保存法及手入法ノ良否、使用ノ繁閑等ニ依リテ  
異ナリト雖左ニ陸軍戸山學校ニ於テ多年ノ經驗ニ鑑ミ研究シタル保存期限ヲ掲ケ以テ  
參考ニ供セン

兼用防具

兩手軍刀術用防具

- 一、面 六年
- 二、胴 半革張 十五年  
總革張 十五年
- 三、肩 五年
- 四、甲手左右 五年
- 五、指袋 六ヶ月
- 六、胸當 二十年
- 七、竹刀 一ヶ月 (學生ハ一ヶ月二本ヲ使用ス)

三年

十年

五年

九、尖革 一ヶ月

一〇、弦 二ヶ月

一一、中結革 一ヶ月

一二、鏢 五年

一三、木銃 年二十分ノ一 (十年)

一四、毬毛 覆革 六ヶ月  
護膜 二年

第二修理法

姑息ノ修理ヲナスヘカラス姑息ノ修理ハ破綻ヲシテ益々大ナラシムルモノナリ小孔ヲ  
穿ツニ大ナル錐ヲ用ヒ針ニテ通シ得ル所ニ錐ヲ用ヒ或ハ修理材料ノ選定ヲ誤リ其方法  
姑息ニ流ル、等ハ大ニ戒メサルヘカラス  
軍隊ニ於テ修理シ得ヘキ者概ネ左ノ如シ

- 一、面蒲團、甲手ノ臂廻、胴ノ垂レ、肩ノ袖廻リ等ノ破綻



- 二、面ノ腮垂レノ離脱、
- 三、面紐止革ノ切損
- 四、各乳及紐附革ノ切損
- 五、甲手ノ頭ト筒及臂廻トノ縫着部ノ破綻
- 六、甲手綴紐ノ切損（修理及交換共）
- 七、胴綴革ノ切損
- 八、竹刀ノ改束
- 九、弦ノ切損
- 一〇、柄革ノ破綻
- 一一、木銃ノ彎曲
- 一二、毬毛ノ破損
- 一三、面蒲團、甲手ノ臂廻、胴ノ垂、肩ノ袖廻リノ修理

破損シタル面積ヨリ稍大キク木綿ヲ截チ鉛筆或ハ「ヘラ」ヲ以テ所要ノ大サノ基盤目ニ線ヲ引キ該木綿ノ中央ニ破損ノ個所ノ位置スル如ク其縁端ヲ面蒲團等ニ縫着シ次ニ基盤目ヲ面蒲團ヲ刺ス要領ニヨリ刺スヲ要ス之ニ用フル糸ハ合セ糸ノ太キモノヲ用フルヲ可トス

### 2、面腮垂レノ離脱

合セ糸ノ太キモノヲ用ヒ縫着ス要スレハ縫着スヘキ垂レノ縁端ニ鞣革ヲ縫着セハ堅固ナリ此際錐ヲ以テ孔ヲ穿ツヘカラス

### 3、面紐止革ノ切損

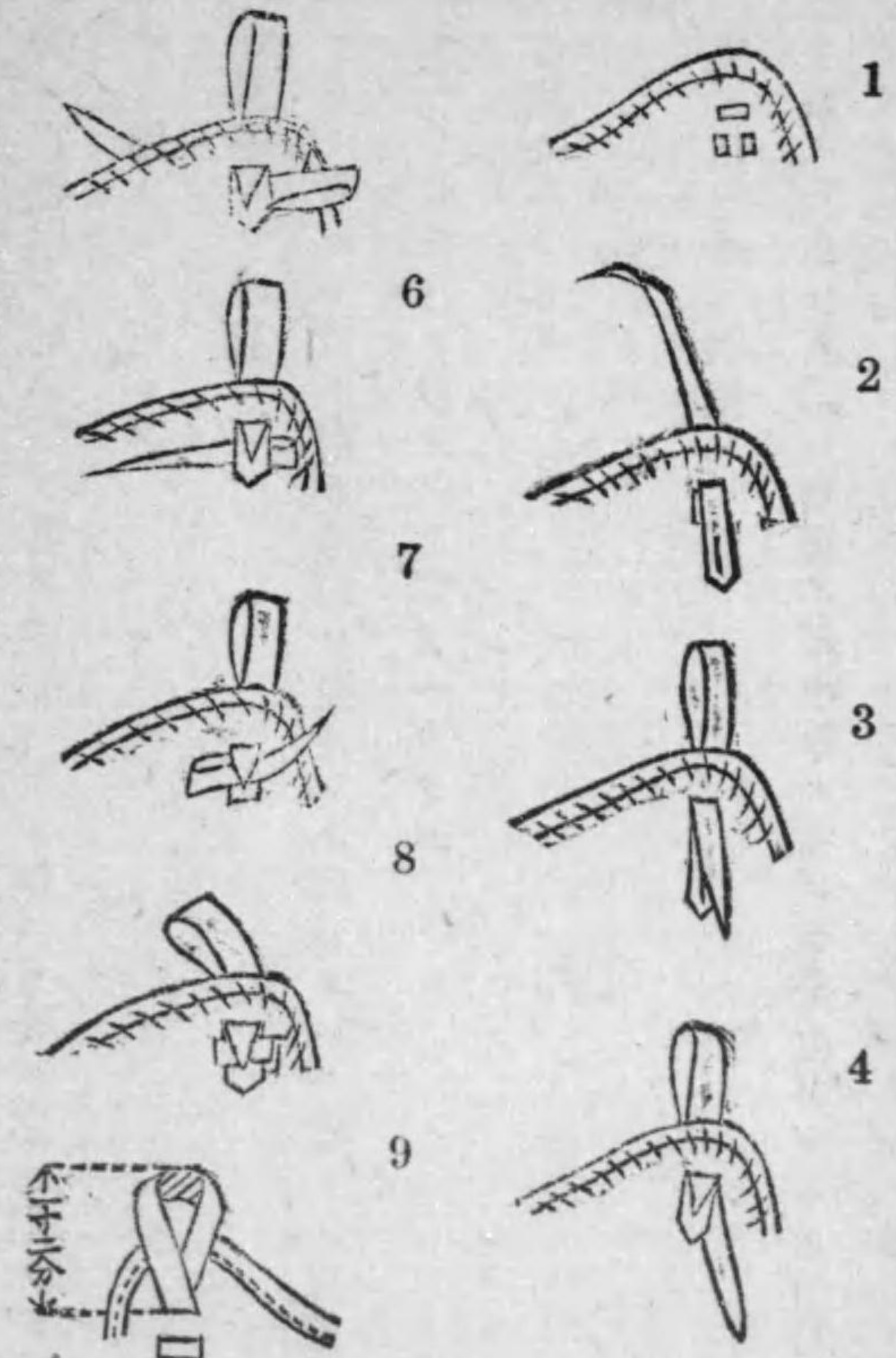
第十二圖ノ要領ニヨリテ行フ

### 4、乳及紐附革ノ切損

胴及肩ノ乳並ニ面、胴、肩等ノ紐附革ハ常ニ完全ナラシムルヲ要ス若シ切損シタル場合ニハ直ニ修理セサルヘカラス胴及肩ノ乳ノ修理法ヲ圖示セハ左ノ如シ



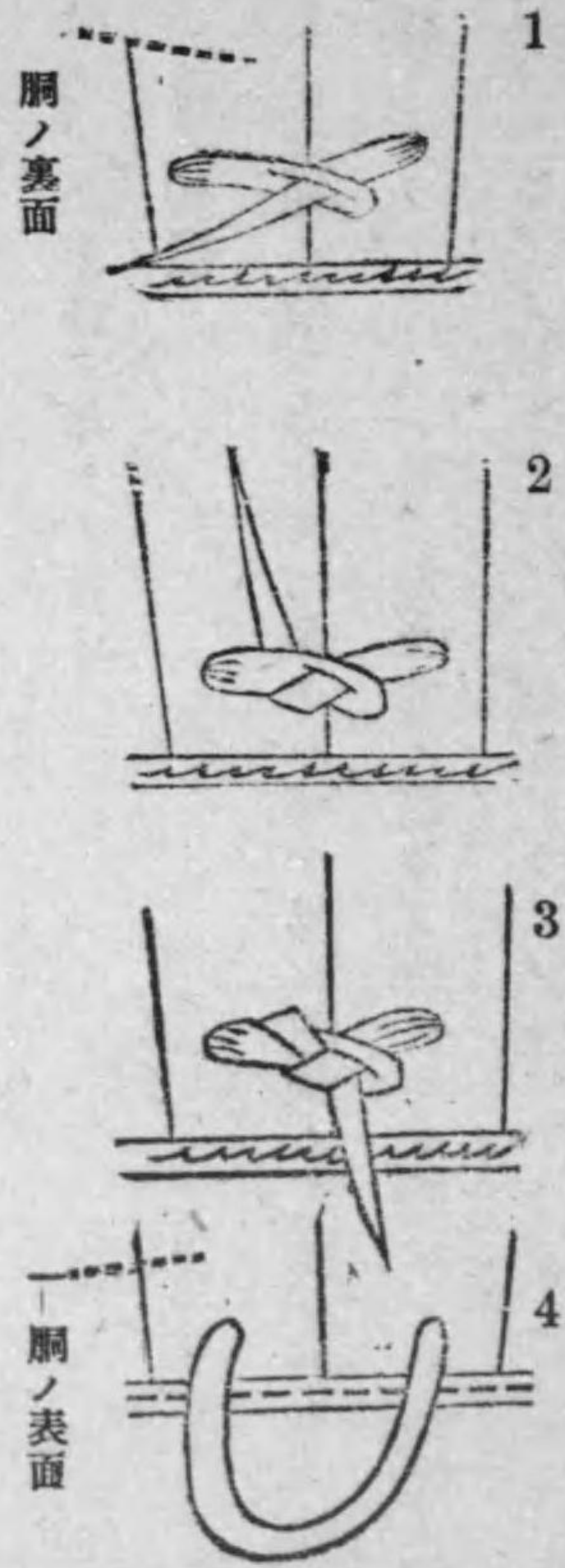
圖五十五第



肩ノ乳モ此方法ニヨリ附ケ換フルコトヲ得  
 胸ノ下端ニアル肩ノ紐通革ノ結ヒ方ハ左圖ノ如シ

表

圖六十五第



胸ノ紐附革ノ結ヒ方

胸ノ裏面

胸ノ表面

圖七十五第



肩ノ後ノ紐附革モ此方法ト同一ノ方法ニヨリ結フ

5、甲手頭ト筒又ハ筒ト臂廻トノ縫着部ノ破綻

甲手ノ綴紐ヲ解キ通常被服ヲ縫フ方法ト同要領ニヨリ可成合セ糸ノ太キモノヲ用



6、甲手綴紐ノ切損

第二章第五ノ五ニ示シタ方法ニ準ス

7、胴綴革ノ切損

圖八十五第



8、竹刀ノ改束

竹刀ノ結束法ニ準シテ行フ

9、絃ノ切損

絃ハ普通ノ結ヒ方ニテハ多クハ解ケ易シ濕潤ノ天候ニアリテ殊ニ然リ若シ普通ノ結ヒ方ヲナシタル時ハ短キ方ノ端末ヲ燒クヘシ然ルトキハ爰ニ球體ヲ形成シ滑走スルコトナク結ヒ目ヲシテ確實ナラシムルモノトス

圖九十五第

第一法 其一



第一法 其二



次ノ如ク結フ時ハ確實ナリ

第二法 其一



其二



第三法 其一



其二



圖九十五第

10、柄革ノ破綻

引キ強キ細キ糸ニ蠟ヲ塗リテ縫フヘシ但シ革ノ破レシモノヲ修理スルトキハ却ツテ甲手ノ手ノ内革ノ破損ヲ速ニスルノ恐アルヲ以テ可成避クルヲ要ス  
持出革ノ切損シタルモノハ胴ニ於ケル肩ノ紐通革ノ結ヒ方ノ要領ニヨリテ附ケ換フルヲ要ス



11、木銃ノ彎曲シタルモノ

木銃ノ彎曲シタルモノハ之ヲ矯正シテ使用スヘシ若シ彎曲ノ度甚シキ時ハ交換スルヲ要ス

12、木銃ノ矯正法

彎曲セル部分ヲ炭火ニテ木銃ヲ焦スコトナク十分ニ炙リ之ヲ矯木ニ掛ケテ矯ムヘシ其炙リ方ニ左ノ三法アリ

1、木銃ヲ直接火ニ炙ル法（木銃ヲ焦スノ患アリ）

2、木銃ニ湯水ヲ注キツ、尖ル法（木銃ヲ焦スノ患ナシ）

3、彎曲部ヲ手拭様ノモノヲ湯水ニ浸シタルモノヲ以テ包ミテ火ニ炙ル法

（此法ハ蒸氣ヲ以テ蒸スト同様ナルヲ以テ木質ヲ軟化セシムルノ効他ノ方法ニ比シ顯著ナリ）

矯ムルニ當リ注意スヘキハ彎曲セル部位ヲ顧慮シテ矯木ニ掛ケ又彎曲ヲ矯ムルタ

メ反對ノ方向ニ彎曲スル場合ニハ急ニ之ヲ矯ムルコトナク徐々ニ力ヲ加フルコトニ注意シ又眞直ノ位置ヨリ少シク反對ノ方向ニ矯ムル如クスヘシ之カ程度ヲ維持スルタメ適當ノ方法ニ依リテ之ヲ控ユル如クスヘシ之カ爲メ人力ニ依リテ冷ユルヲ待ツカ或ハ重リヲ掛クル等ノ處置ヲ取ルモ可ナリ

彎曲部ヲ冷スニ當リ冷水ヲ注クトキハ直ニ冷ユルト雖又直ニ従前ノ彎曲ニ復スルノ患アルヲ以テ可成自然ニ放冷スルヲ可トス

13、毬毛ノ破損

毬毛附着法ノ要領ニヨリ着ケ換フヘシ但シ毬毛革ノ破損シタルモノハ二重毬毛革ノ如ク修理スルコトヲ得其法中徑約三寸ノ圓形ニ革ヲ截チ其ノ裏ニ糊ヲ附ケテ其ノ中心ト修理セントスル革ノ中心ト一致スル如ク重ネ其縁端ヲ強キ糸或ハ靱革或ハ生革ノ紐ヲ以テ縫フヘシ若シ二重毬毛革ナルトキハ外部ノ革ヲ取り脱シタル後前述ノ如ク修理スルヲ要ス



護謨ノ破損シタルモノハ取り換フルヲ要ス

一一二

### 第三 乾燥手入

#### 二、乾燥手入

乾燥手入ハ材料及構造法ヲ辨ヘ之ヲ施行セサルヘカラス是レ乾燥ノ爲メ却ツテ保存期限ヲ短縮シ或ハ所要ノ形状ヲ失ヒ或ハ柔軟ヲ要スルモノヲシテ硬質ニ變セシムル慮レ等アレハナリ

1、面ノ内部濕潤セルモノハ該部ヲ日光ニ直射セシメテ乾燥スヘシ之レ又消毒上ノ利益アルモノトス

#### 面ノ内部ノ洗濯法

面ノ内部ノ不潔ナルモノヲ洗濯スルニハ刷毛ヲ水中ニ浸シ能ク水ヲ切りテ面ノ内部ヲ摺リ不潔物ヲ刷毛中ニ吸ヒ取ラシメ之ヲ水中ニテ洗ヒ又再ヒ水ヲ切りテ前回ノ如ク行フ此ノ如クスルコト數回ニシテ之ヲ直ニ日光ニテ乾スヘシ又水分

ヲ著シク含マサル濕レタル布ニテ面ノ内部ヲ拭ヒ取り布ヲ水中ニテ洗ヒ此ノ如ク數回之ヲ行ヒ直ニ日光ニ乾カスモ可ナリ

#### 汗除及腮蒲團ノ洗濯

汗除ハ手拭ヲ使用スルモ發汗著シキ時ハ之カ爲メ侵蝕シテ不潔トナルヲ免レス元來汗除ハ面ノ内部ヲ不潔ナラシメサル爲メ設ケタルモノナルヲ以テ時々之ヲ取り離シテ洗濯スルヲ要ス

腮蒲團ハ刺突ノ衝力ヲ著シク腮ニ感セシメサルタメ及面ノ内部ヲ不潔ナラシメサル等ノ顧慮ヨリ設ケタル者ナリ故ニ汗除ト同シク時々取り離シテ綿ヲ出シ洗濯スルヲ要ス若シ綿ノ著シク不潔トナリタル時ハ新シキ綿ト取り換フルヲ要ス2、胴及肩ハ消毒ノ必要ヲ認メタルトキ又ハ特ニ乾燥セシムルノ必要ヲ認メタル時等特別ノ場合ヲ除クノ外日光ニ直射セシメサルヲ可トス  
胴及肩ハ消毒ノ必要ヲ認メサルニアラサルモ傳染病(チブス)等ノ爲メ或ハ濕氣

一一三



ノ特ニ著シク含有シタル時(梅雨期)等ヲ除ク外ハ日光ニテ乾燥セサルヲ可ト  
 ス元來胴及肩ノ上部ハ生革ヲ以テ製作スルカ故ニ若シ之ヲ日光ニ直射セシメテ  
 乾燥スルトキハ生革ハ日光ノ爲メ油分ヲ蒸散シ革質ニ變化ヲ來シ軟カナラシム  
 ルノミナラス所要ノ形體ヲ失スルニ至ル又竹胴ニアリテハ竹ト竹トヲ綴合セタ  
 ル鞣革ヲシテ脆弱ナラシムル等保存期限ヲ短縮スルニ至ル

3、甲手ノ手ノ内汗染シタルトキハ十分之ヲ伸ハシ然ル後陰干スヘシ若シ濕潤甚シ  
 キ時ハ僅少時間日光ニテ乾カシ(全ク乾燥セサル前ニ於テ)然ル後陰干スヘシ  
 手ノ内革ハ若干濕潤セルモノヲ陰干スルモ漸次硬固トナルモノナリ若シ多少ノ  
 皺ト雖其儘放置スルトキハ直ニ皺癖トナリ之カ爲メ掌中ニ水泡腫ヲ生スルコト  
 アリ故ニ演習後ハ必ス十分ニ之ヲ伸ハシ然ル後陰干スヘシ若シ日光ニ直射セシ  
 メテ乾燥スルトキハ直ニ硬質ニ變スルニ至リ使用上ノミナラス保存モ亦良好ナ  
 ラス

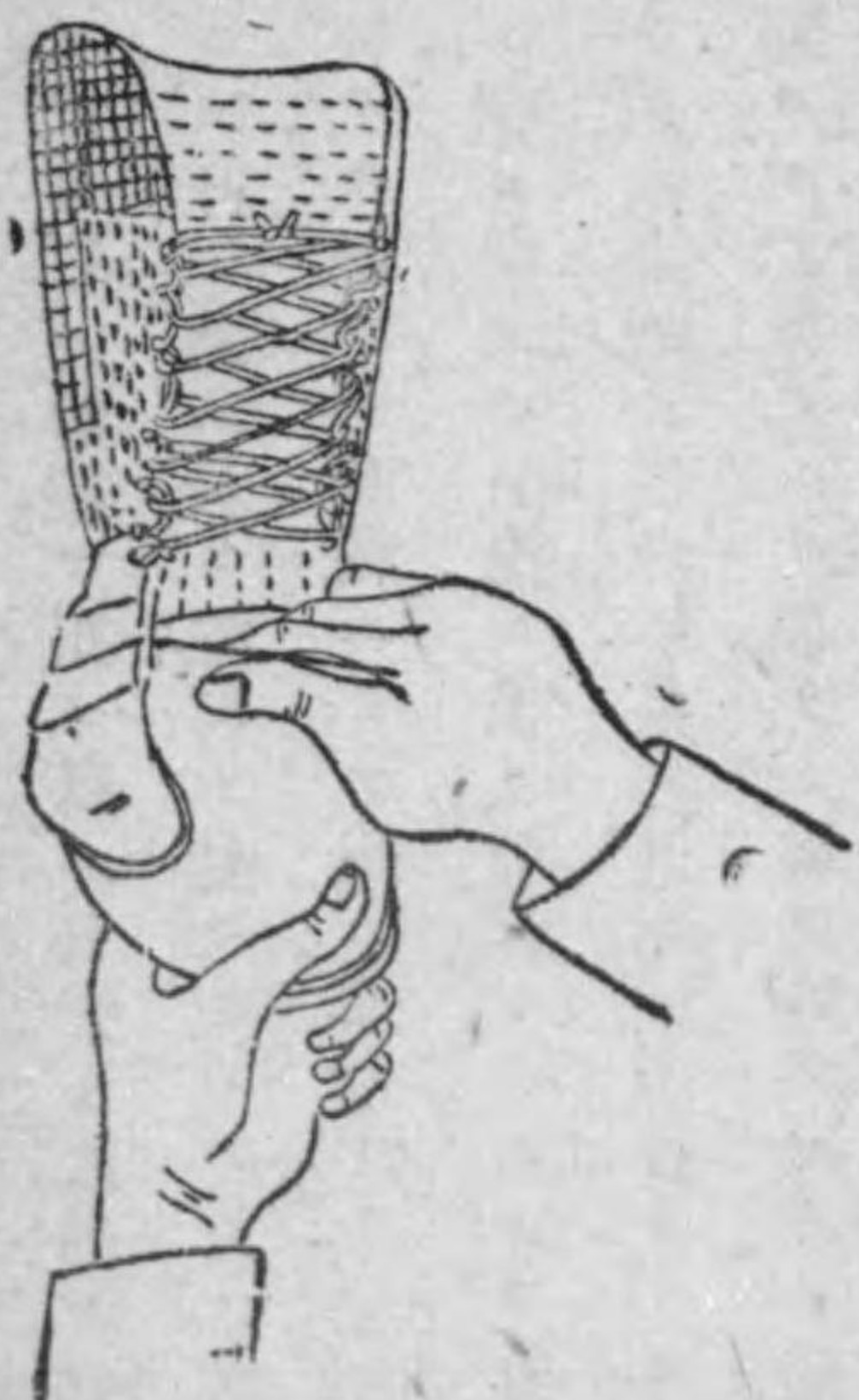
濕潤著シキモノヲ其儘陰乾スルトキハ容易ニ乾燥セス翌日ニ至ルモ尙乾燥セサ  
 ルコトアリ然ルトキハ革質腐蝕シ使用中直ニ破損スルニ至リ却ツテ保存期限ヲ  
 短縮スルモノトス

手ノ内ヲ伸スニ當リ甲手頭ヲ横ニ強ク握リテ行フ時ハ甲手頭ノ形狀ヲ變シ使用  
 上障害アルノミナラス保存モ亦良好ナラサルヲ以テ注意スヘシ

其方法ノ一例ヲ示セハ次ノ如シ

左手ニテ甲  
 手頭ヲ圖ノ  
 如ク持チ右  
 手ノ指ニテ  
 手ノ内革ヲ  
 伸ス

第十圖





4、胸當、裏蒲團等ニ濕潤セルモノハ時機ヲ得ル毎ニ日光ニ直射セシメ乾燥スヘシ  
 胸當及裏蒲團ハ面ト同シク汗ノ爲メ最モ濕潤シ易キモノニシテ之ヲ直接日光ニ  
 曝スモ保存上何等ノ障害ナク却ツテ有利ニシテ綿ノ弾力性ヲ増シ且ツ消毒上ノ  
 利益アリ故ニ時機ヲ得ル毎ニ努メテ日光ニ依リ乾燥セシムルヲ要ス濕潤ナル天  
 候(梅雨期ノ如キ)ニアリテハ濕潤ノ度殊ニ甚シク乾燥困難ニシテ之レカ爲メ材  
 料腐蝕シ保存期限ヲ短縮スルノ慮アルヲ以テ天候良好ナル日ヲ選ヒ或ハ乾燥室  
 等ニ於テ努メテ乾燥セシムル如ク計ルヲ要ス

第四 消毒手入

三、消毒手入

一人専用ノ防具ニアリテハ殆ント消毒ヲ施スノ必要ヲ認メサルモ共同使用ノ者ニアリ  
 テハ時々消毒ヲ行フヲ要ス殊ニ面及甲手ニ於テ然リトス然レトモ其實施ハ使用ノ繁閑  
 ヲ顧慮セサルヘカラス

消毒法ニハ日光消毒ト藥液消毒及藥品瓦斯消毒ノ三法アリ

日光消毒ハ日光ニ直射セシムルモノトス然レトモ之カ爲メニハ取扱法ニ述ヘタル事項  
 ニ注意セサルヘカラス

藥液及藥品瓦斯ノ兩消毒ハ器械ヲ用ヒ藥液或ハ藥品瓦斯ヲ放散セシムルモノニシテ十  
 分ニ消毒ノ目的ヲ達シ材料即チ革具類綿布類ヲ損スルコトナク又金屬ヲ腐蝕スルコト  
 ナク且ツ臭氣直ニ放散シテ使用者ヲ害セサルモノナラサルヘカラス之カ爲メニハ「フ  
 オルマリン」ヲ以テ最良トス

1、「フォルマリン」瓦斯消毒法

「フォルマリン」瓦斯消毒ヲ行フニハ密閉シタル室内或ハ消毒箱ニ防具ヲ吊垂シ室  
 外ヨリ瓦斯發散器ヲ用ヒ消毒用室ノ氣容ニ應シ瓦斯ヲ注入シ所要時間經過ノ後防具  
 ヲ室外ニ出シ臭氣ヲ放散スルモノトス

2、「フォルマリン」液消毒法



噴霧器ヲ以テ同液ヲ防具ニ注クカ又ハ布片ニ同液ヲ浸シ消毒スヘキ部ヲ拭淨ス

此方法ハ全表面ニ亘ルコト難ク從ツテ消毒十分ナラサル所アリ然レトモ消毒ヲ全カラシメントシテ甚シク撒布スルトキハ濕潤ノ爲メ革及其他ノ縫着部ニ於ケル材料ヲ軟弱ナラシムルニ至ルモノトス革類ハ濕氣ヲ帶フレハ其性質ト保存期限ニ多大ノ影響アルコト前述ノ如シ故ニ此方法ヲ採用スルトキハ以上ノコトヲ顧慮シテ行ハサルヘカラス

### 3、日光消毒法

防具ヲ直接日光ニ曝シ乾燥ト同時ニ消毒ス

此方法ヲ採用スルトキハ防具ヲ直接地面ニ置カサルコトニ注意シ必ス莖或ハ机ノ如キモノ、上ニ置クヘシ

### 簡單ナル消毒法ノ一例

1、「フオルマリン」液ヲ用ヒテ消毒ヲ行フノ法ナリ其設備トシテ先ツ消毒用密閉ス

ヘキ箱ヲ造リ之ニ防具ヲ積載スヘキ數層ノ棚ヲ造ル此棚ハ瓦斯ノ流通ヲ妨ケサル如ク鐵網ヲ以テスルカ或ハ間隔ヲ有スル板ヲ以テシ而シテ鍋椀ノモノニ「フオルマリン」液ヲ入レ火鉢上ニテ之ヲ蒸發セシメ以テ燻蒸消毒スルニアリ此ノ如クシテ一晝夜ヲ間シ然ル後防具ヲ日光ニ曝シ臭氣ヲ放散セシム

2、昇汞水 千倍 布片ニ濕シ鐵部以外ノ一切ノ部ヲ拭フ

石炭酸水 三十倍 布片ニ濕シ鐵部（面鐵ノ内部等）ヲ拭フ

此方法ヲ行フニ當リ多少ニテモ藥量多キトキハ之カ爲メ面蒲團ヲ腐蝕シ革部破綻スルニ至ルヲ以テ注意スヘシ



軍需商會

大正八年七月二十一日印刷  
大正八年七月十日發行



劍術防具ノ研究奧附

正價 金參拾錢

著者 片山廉之助

東京市牛込區下戸塚町三十八番地

印刷者 三浦良平

東京市日本橋區鐵砲町十三番地

印刷所 三浦活版所

東京市小石川區高田豊川町十五番地

發行所

陸軍御用圖書發行所  
軍需品一切製造販賣所

軍需商會

電話番町二六一六番  
振替東京五四一六番

發行所

高田豊川町十五番地

西木本長七



8.8.15



318  
410



終

